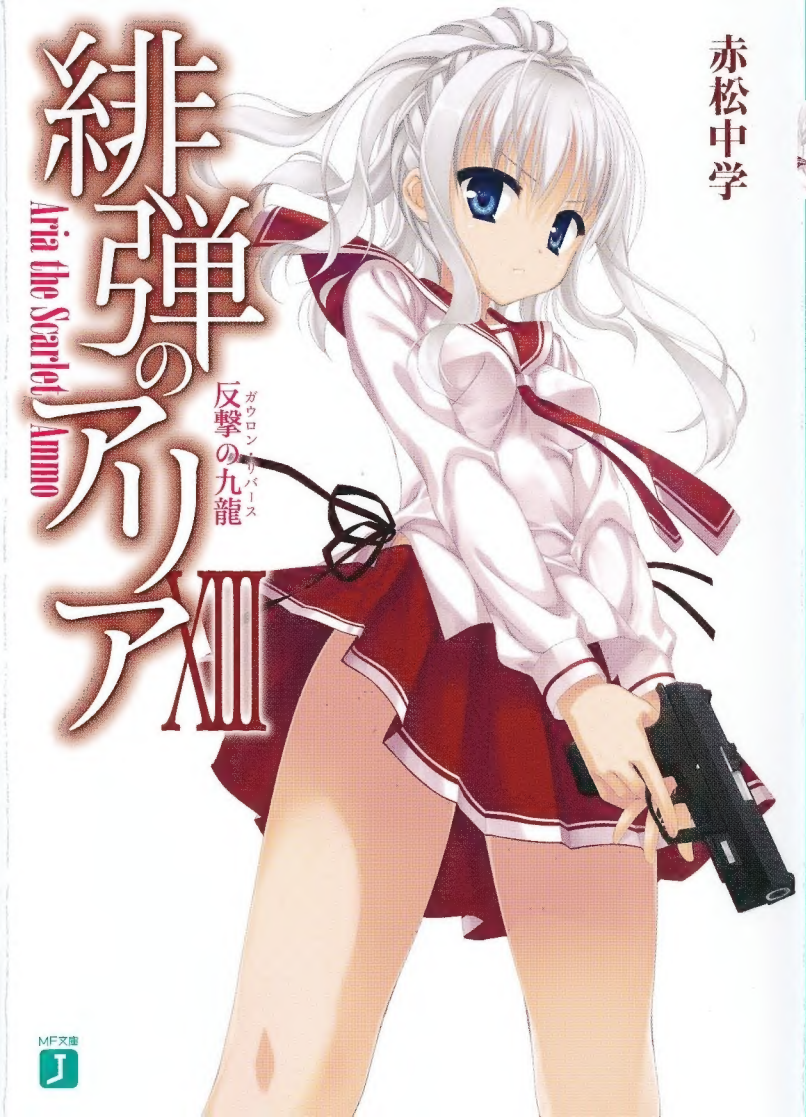


MF文庫 J
あ-05-16

緋弾のアリアXIII
赤松中学
580

9784840146821
ISBN978-4-8401-4682-1
C0193 ¥580E
1920193005806
定価：本体580円（税別）
メディアファクトリー

## 緋弾のアリアXIII　反撃の九龍（ガウロン・リバース）

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵――通称『武偵』を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジ。慣れない〈一般人〉の生活の中で、自分の本質を悟ったキンジは、一度は退学した武偵高に戻ってくる。そして、戦いの中にまた身を投じることになる。彼を中心とするバスカービルの面々は、修学旅行Ⅱを利用して、急襲を仕掛けてきた藍幇の本陣に乗り込むことを決意する。戦いの舞台は、海を越え敵地・香港へ――!!　大スケールアクション＆ラブコメディー第13弾!!

MF文庫J

## 赤松中学の本

**アストロノト！ 1〜3** [イラスト：bomi]

**緋弾のアリア** [イラスト：こぶいち]

**緋弾のアリアⅡ 燃える銀氷**
[イラスト：こぶいち]

**緋弾のアリアⅢ 蜂蜜色の罠**
[イラスト：こぶいち]

**緋弾のアリアⅣ 堕ちた緋弾**
[イラスト：こぶいち]

**緋弾のアリアⅤ 序曲の終止線**
[イラスト：こぶいち]

**緋弾のアリアⅥ 絶対半径2051**
[イラスト：こぶいち]

**緋弾のアリアⅦ 火と風の円舞**
[イラスト：こぶいち]

**緋弾のアリアⅧ 螺旋の天空樹**
[イラスト：こぶいち]

**緋弾のアリアⅨ 蒼き閃光**
[イラスト：こぶいち]

**緋弾のアリアⅩ 禁忌の双極**
[イラスト：こぶいち]

**緋弾のアリアⅪ Gの血族**
[イラスト：こぶいち]

**緋弾のアリアⅫ 狼狗に降る雪**
[イラスト：こぶいち]

**緋弾のアリアⅬⅢ 反撃の九龍**
[イラスト：こぶいち]

【著者】

**赤松中学**
あかまつ・ちゅうがく


生年月日、年齢、出身地、現住所に至るまで全てが不明の覆面作家。『アストロノト！』で第3回MF文庫Jライトノベル新人賞優秀賞を受賞。本作・武装学園小説『緋弾のアリア』は、同作家の2シリーズ目となる。

【イラストレーター】

**こぶいち**

ゆずソフト所属の原画担当。
代表作は『ぶらばん！』『E×E』『夏空カナタ』『天神乱漫』『のーぶる☆わーくす』『DRACU-RIOT!』。
小説では『これはゾンビですか？』（富士見書房）の挿絵を担当。
趣味はゲーム、読書。
ゲームはもっぱら携帯ゲームばかりをプレイ中。
http://tyatsune.blog87.fc2.com/


カバーイラスト／こぶいち　装丁／百足屋ユウコ(ムシカゴグラフィクス)

# 緋弾のアリア XIII

Aria the Scarlet Ammo

反撃の九龍（ガウロン・リバース）

赤松中学

P11 1弾 ドライ・アイズ

P86 2弾 ブリッジヘッド OZONE

P140 3弾 ダブルキャスト 猴と孫と

P195 4弾 ガウロンモンク 九龍猿王

P220 5弾
ダンス・アウトレイジ
躍る香港トラム

P248 Go For The Next!!!
ツェツトアハト
Z8

# Contents

Kinji
Riko
Shirayuki
Reki
Aria

猴
kou

# 緋弾のアリアXIII
## 反撃の九龍（ガウロン・リバース）

赤松中学

MF文庫J

口絵・本文イラスト●こぶいち

# 1弾　ドライ・アイズ

「ジーサード……！」
音速の銃弾をも凌駕する、アメリカの人間兵器――人工天才が。
俺と同レベルの戦闘力を持つ、俺の、弟が。
（たった1撃で……！）
斃された。
藍幇の少女、猴が放ったレーザー――光速の攻撃で。
（こ……こんな事が……！）
月光の下、俺は鏡高組本家の瓦屋根の上で二の句が継げずにいる。
ジーサードはピクリとも動かない。
倒れた拍子に横を向いたその顔も、驚愕の表情のまま固まっている。
その青みがかった目の瞳孔が、開いている。
流れ出る吐血にも、随意筋で吐き出されるような様子が一切見られない。
そ、即死したんだ。
だが俺は、その体のそばに駆け寄ってやる事すらできない。

猴の紅い右目が今、俺を見つめているからだ。
レーザーはあの瞳から放たれた。
つまり見られている時点で、照準は定まっていると考えて間違いない。
あとは猴が撃てば、コンマ1秒後、俺は死ぬ。
その圧倒的な事実が、俺を金縛りのようにその場に縫いつける。
「――猴！　鎮まり給え！　ここは倭ぞ！　これ以上、人を殺めれば――倭と唐の化生が争う事にもなろうッ！　鎮まり給えーッ！」
という玉藻の絶叫を無視して――
カットオフ・セーラー服姿の小柄な猴は、すっ。
『前へならえ』するように、その両腕をこっちへ向けた。
ジーサードより後方に立つ俺に、精密に狙いを付けるように。
そして、その様子に慌てる藍幇の幹部――ココと諸葛に、
「コル・オル、トルマエス・カルガラル」
意味不明な、しかし牽制的なムードの声を放っている。
（ダメだ……ッ！）
もう、誰も猴を止められない。それこそまるで、神仏の怒りに触れたかのように。
足下まで届きそうな猴の長い黒髪が風に揺れ、

（――撃たれる……！）

俺が生唾を飲んだ、その時。

ピュッ――シャァッ――！

ロケット花火のような甲高い音と共に、庭からパステルピンクの煙が天高く伸びた。

「!?」

煙の帯は風に乗ってカーテン状に広がり、夜空を塗り潰し始める。

ピュゥ――ピュゥ！　続けて、アクアブルー、アイボリーホワイト。

3色になった煙のカーテンが、風上から屋根の上へ濛々と流れ込む。

（……煙幕弾……！）

これは――視界を遮る粉末を散布してエアロゾルを空中に生成する、化学武偵弾。

赤・青・白はイギリス国旗の色でもある。アリアの援護だ。

アリアは空を翔けたレーザーを見て、それが敵の攻撃で、俺たちには反撃できない代物だと直観したのだ。さすがホームズ4世。そのカンの鋭さ、ありがたいぜ。

煙は俺と猴の間にも流れ込み、あっという間に双方を見えなくする。

「玉藻、逃げろッ！」

俺は足下の玉藻すら見え難くなってきたところで叫び、うなずいたキツネ娘がシッポをソリにして屋根から滑り降りていくのを横目に――ジーサードに飛びつく。

そして、その動かぬ体を抱きかかえて瓦葺きの斜面を転がった。
屋根から落下する途中で、ヒステリアモードの聴覚が「猴まだ寝醒めネ！」「パトラの鍵で抑えは利くハズですッ」などというココ・諸葛の叫び声を捉える。
俺は空中でジーサードを背負う姿勢になり、ザンッ、と着地すると同時に庭を駆ける。
（走れ……走れッ！）
そして庭の駐車場にあった象牙色のオープンカー——ランボルギーニ・ムルシエラゴの助手席にジーサードを押し込み、自らも飛び乗った。
武偵手帳の解錠キーでエンジンを掛け、車体は後ろ向きに駐車されていたので、ギアをRに入れつつ——スピン気味に方向転換し、屋敷の外を目指す。
その途中で、かつっ。玉藻が下駄を鳴らし、シート後方のクリアエンジンフードに跳び乗った。アリアの姿は無い。どうやら既に退避したようだ。
そう——この場は、逃げるしかない。隠れるしかない。
レーザーでの追撃があったら、反撃不能だ。
「チクショウ……チクショウ……！」
俺は門から車道に出つつ、アクセルを深く、深く踏み込む。
悔しさに、歯ぎしりしながら。

数km――都電の路線脇まで離れ、路上でハザードを点けて停車し……
俺はハンドルに額をつけ、深く息をつき、覚悟を決めてから――
撃ち殺されたジーサードの方を、見る。
すると、
「……っ……！」
笑って、いる。ジーサードの血まみれの口元が。
俺と目を合わせたその瞳孔も、元に戻っている。
苦しそうに脂汗はかいてるが、驚く俺を見てニヤリと頬を動かしさえした。
（い、生きてる……！）
ジーサードを『もうダメじゃ』呼ばわりしていた玉藻も、これには目を丸くしてる。
「……さっきは兄貴が、俺の知らねぇ技を見せたからな。お返しに俺も見せてやったってコトさ。それも、2つな」
声に力は無いものの、ジーサードは震える指をVサインのように2本立てた。
ほ、ホントに生きてるぞ。
胸をレーザーで撃ち抜かれたってのに。
「1つ目は……『死んだフリ』。わざと瞳孔を開く程度のこたァ、国防総省の諜報員なら新人でもできる。血ヘドは、上がってくるのに舌ァ噛んで混ぜりゃ派手になるもんだぜ」

「し、喋るなッ。お前、胸に貫通創が……！」

「重要臓器は撃たれてねェから安心しろ。アメリカじゃ撃つ撃たれるは挨拶みてぇなモンだからな。ヤベェと思ったら体勢を傾けて、弾の入る角度を決めちまうのさ。弾が内臓と内臓の間をスリ抜けて通過するようにな。これが2つ目――『内臓避け』だ。まァ、俺もレーザーでやるとは思わなかったけどよ」

す、すげえ……！

俺も修羅場はくぐってきたつもりだが、さすがアメリカ人はハードコアだな。

一生使いたくないが、とんでもない技を見せてもらっちまったよ。

――ジーサードは……

あの場で猴の瞳が銃口のようなものだと気づき、瞬時に攻撃――『流星』をキャンセルした。

そして内臓を避けて撃たれながら、このレーザーを連撃されたらヤバいと判断したのだ。

だからすかさず死んだフリをして、あの場をやり過ごした。

（た、大したタマだぜ……コイツも）

などと感心してしまうものの、深手を負ったことには違いないようだ。

実際、ジーサードは助手席のシートから立ち上がれずにいる。

そこに――上空から、バラバラバラバラ……と……ローター音が響いてきた。

ヘリだ。接近・降下してきている。こっちへ。
俺は舌打ちし、闇を見上げる。
（藍幇の追撃かッ……！　どこだ……！）
この音は……双発・四翅――UH－60。軍用ヘリだぞ。
そんなモンで日本の領空を堂々飛ぶとは、いい度胸じゃねえか。
ブラックホークに9㎜弾じゃ豆鉄砲みたいなものだが、それでも音源の方へ向けた俺のベレッタを――ジーサードの義手がそっと押さえた。
次の瞬間、ジジジジッ……バチバチッ……！
大きな誘蛾灯のような音を上げて、黒塗りの攻撃ヘリが上空２００ｍの辺りに出現した。
まるで、異次元空間からワープしてきたかのように。
――この光景。見覚えがある。
ジーサードが乗っていた戦略爆撃機と同じ、光屈折迷彩だ。
「悪ィな兄貴。しばらく留守にするぜ」
と言うジーサードの声に続いて、だんっ。
かなり降下したブラックホールの真下、ランボルギーニの右側に、足音。
続けてジッ、ジジジッ……という音が聞こえ、そこに……光屈折迷彩のフードを脱ぐ、先端科学兵装のプロテクターに身を包んだ女が現れた。

たしか九九藻とかいう、ジーサードの部下だ。そうか、救援を要請したんだな。

「サード様っ！　嗚呼、嗚呼ッ……！　な、なんという事……！」

栗色のミディアムヘアーからキツネ耳をぴぴんと出した九九藻は、もう他のものは何も目に入らないという感じでジーサードに飛びついてる。

そんな子分を心配させるまいとしてか、

「――騒ぐんじゃねェ。これぐらい屁でもねぇんだよ。おせっかい兄貴のせいでＨＳＳ・アゴニザンテにノり損ねさえしなきゃ、自力で撤退できたぐらいだ」

ジーサードは、強がってる。

こくこく頷きつつの九九藻はオープンフィンガー・グローブをした手を震わせながら、カラビナ・フックを取り出し……たところで玉藻の姿に気づき、

「た……た、たたた玉藻御前!?　しょ、しょ、正一位の天狐皇幼殿下が斯様の野におわすとは露、露知らず！　此の不肖、つ、つつつつ九九藻生稲、至らずッ、至らずッ――」

べたぁー！

コートを広げ、車の横でいきなり土下座ポーズを取った。耳まで伏せてる。

だがジーサードがどうしても気になるらしく、プルプル震えてもいるな。

「――よい、よい。今は火急の時じゃ。ジーサードを手当てしながら聞け」

と、玉藻に言われ……立ち上がった九九藻だが、社長と会長の間に立つ平社員みたいな

テンパりようだ。自分とジーサードのプロテクターを金具で繋ぐのに、何度もミスってる。
狐に身分があること自体、初耳だが――
どうも、玉藻は随分と偉い狐みたいだな。一切、全くもって、そうは見えんが。
「ジーサードの傷は、唐より来た猴の如意棒で突かれたものじゃ。儂も権現し、鎮めようとしたのじゃが……猴は、聞く耳を持たなかった。まるで正気を失ったかのようにな」
「と……唐の、猴が……!?」
その名前を聞いて、九九藻は大きな目を飛び出させんばかりに見開いている。
どうやら猴は、こいつら妖怪界のビッグネームらしい。
それはそうだろう。玉藻が口走っていた、猴の別名――孫悟空、は、誰だって知ってる。
中国四大奇書の1つ、『西遊記』に出てくる伝説の猿だ。悟空は三蔵法師玄奘の旅に従い、その功績を認められて仏になった。お伽話ではそこまでだが――
（それが実在してて、まだ生きてたなんて……）
しかもあんな、女の子だったなんて。
普通、理解が追いつかない。飲み込めない。『どこまでも伸びる赤い棒』とされていた如意棒の正体が、レーザービームだったって事もな。
――だが、俺はそれを事実としてまず認めておく事にする。
そうしないとヤバそうだからな、この件。

なんたって――

猴は俺たちと敵対する組織、『藍幇』の戦士なのだ。

（そっち系のバケモンは、竜悴公・ブラドで経験済みだぜ）

ヘンな方向に経験豊富になってきた俺は、下降気流で髪をバサバサ暴れさせながら――ヘリから垂らされたワイヤーに九九藻のプロテクターを接続するのを手伝う。

手伝ってやったのに、九九藻は俺に『お前のせいでご主人様が大ケガしたんだぞ』的なガンを飛ばしてくるので……コイツは無視し、

「神に逆らうとバチが当たるって事だ。一つ学んだな、金三」

俺の目の届かなそうな所へ行くらしいジーサードに、そう言っておく。

俺も信心深い方じゃないが、コイツは異教のとはいえ神と聞かされた猴を殺そうとした。

『緋弾のアリア』の力で死者を生き返らせるという、神をも恐れぬ野望も持ってる。

ちょっと、神仏への不遜が過ぎるからな。

「ケッ」

と俺から目を逸らしたジーサードに、九九藻が抱きついて体位を固定する。

ブラックホーク側で、ウインチの駆動音がして――

ジーサードと九九藻が、車から吊り上げられていく。

「この一件、儂が伏見と評議する。唐や天竺からも使者があるやもしれぬ。お主ら従二位

以下は下手に騒がぬよう。姉の七九藻、八九藻にも連絡せい。電話でよい」

空に上がっていく九九藻に、玉藻が何やらそんなことを命じ――2人を回収したヘリは、再び透明になって闇に消えていくのだった。

その後、携帯でアリアと連絡が取れたのだが――

なんとアリアは、車で逃げた藍幇を追い回してたのだという。あの空飛ぶスカートで。しかしそこは不具合発生率に定評のある平賀製品。途中でフィンが1枚外れ、東池袋の乙女ロードとかいう道に墜落したそうだ。

で、一味を捕り逃がした。

「車にはココと、諸葛……あと名古屋女子武偵高のカットオフ・セーラーを着た女の子が乗ってたわ。なんか気絶してたけど、小学生みたいな子よ」

と、小学生みたいなアリアが言うので……

俺はそのチビがいかに危ないヤツか、警告しておいた。なぜ気絶したかは分からないが、そうでなければアリアもあのレーザーで射殺されてたかもしれない、と。

それをアリアは真面目に聞いてくれて、

「――分かったわ。気をつける。それとキンジ、車はそこに置いていきなさい。後始末は外務省に何とかさせるから。さっきの現場には戻らず、帰ること。あんたが逮捕されたら、

ややこしくなるんだからね」

などと言うので、俺は命令通り車を降り……

別の容疑で逮捕されてもややこしくなるので、小学生に見える玉藻には御守りになってもらい、夜道を徒歩で帰った。

歩きつつ、携帯でニュースサイトを確認したところ――さすがに、今夜の銃撃戦は報道されていた。しかし死者が無ければ、その扱いは小さい。それが今の日本の悲しい現実だ。しかも『鏡高組で内部抗争？』という一報以外、続報が出ない。誰の名前も出ない。

これは……

マスコミに外務省から圧力が掛かったんだろうな。その外務省に圧力を掛けたのは――さっき乙女ロードに墜落した、ピンクのツインテール。ってことか。

ジーサードがレーザーで撃たれた事を、かなめに電話しておくと――「ジーサードにはよくあること」的に割とケロッとした反応が返ってきた。

しかし少し心配なのか、明日からジーサードを見舞いに秘密基地へ行くという。

秘密基地というアレな単語に少々クラッと来てしまったが、「どこだそれ」と聞いたら太平洋ならホノルルで大西洋ならハバナだそうだ。

それを聞いて、負傷したジーサードを憐れむ心が一切無くなった俺は――

（あんにゃろう。楽園みたいな所にばっかり陣地を作りやがって……）
自宅の門へ向かう角を曲がり――かけたところで、止まる。
我が家の前に、何の特徴もない黒いクラウンが停まっており……
門の前に立つうちの爺ちゃんに頭を下げながら、後部座席に乗っていく人物がいたのだ。
客が来ていたらしい。
（こんな夜中に、誰だ？）
道の角から窺うが、よく見えない。
月明かりで横顔は見えたものの、特徴は無い。見た事があるような、無いような人物。
おじさんともお兄さんともつかない、中肉中背の男。
車にはその男と運転手の他に、
（ん……？　あの、助手席に座っているのは……）
暗くてよく見えないが、なんか……不知火に似てないか？
と思ったが、確認できない間に車は出てしまい――
「――キンジよ」
爺ちゃんが、背を向けたまま声をかけてきた。
まあ、元軍人の爺ちゃんからすれば、俺の隠れんぼなんか児戯。丸見えも同然だろう。
なので俺も普通に角を曲がり、門まで歩いていく。

# あとがき

元気ですかー！　お誕生日ケーキのローソクの火を扇風機に消された、赤松です！

この13巻は初の海外遠征編で、上下巻でいえば上巻になります。

その下巻にあたる14巻――の前に、次は『緋弾のアリア』シリーズで初となる短編集・アニメのＤＶＤ・ＢＤ特典にもなった『キャストオフ・テーブル』が冬に刊行予定です。

『キャストオフ・テーブル』とは、夏休みにキンジたちが（というか理子が半強制的に）開催した脱衣ゲーム大会。本編ではなかなか見られないようなセクシーイラストも満載で、読者様必携アイテムの１つになること請け合いですよ！

えっ、上下巻の間に短編集が出るのはなぜかって？

……

……べっ別に、レーザーの攻略法が思いついてないんじゃないんだからね！

……

……うぉおおなんであんな強いの出しちゃったんだよー！　私のバカバカー！

い、いや、大丈夫っ、思いついたら14巻もちゃんと出ますのでご安心下さい。

爺ちゃんは、夜遊びしてきた俺を叱るでもなく、
「そろそろ、ちょっと訊こうかの。新しい学校で、お前は何を学べた？」
白い息を吐きながら、そんな事を言ってきた。
何もかもお見通し、といった感じで。
「……微分方程式。更級日記。あと……――俺自身を」
「いい答えじゃ」
にい、と笑ってこっちを向いた爺ちゃんは、
「では、自分の居るべき場所も分かったじゃろう」
改めて、ここから旅立て――と暗に告げてくる。
だが、その眼はどこか淋しそうだったので……俺は頷きながら、笑顔を見せる。
「また、時々帰ってくるよ」
「うむ。いつでも来い。春水車のグラビアを更新して待っておるぞ」
――それは、おかまいなく。マジで。

「えー、短い間ではあったが、遠山が転校する事になった」
数日後、下校前のＬＨＲで担任が２年２組のみんなにそう言う。
俺は――

これ以上一般人に迷惑をかけるワケにはいかないし、自分の居るべき場所も悟った。
だから、この東池袋高校から去る事にしたのだ。
俺は鏡高組との抗争から、2日ほど欠席してたんだが……クラスのざわつき方からして、俺が転校するという噂はその間に行き渡っていたらしい。
まあ、事前に、萌・藤木林・朝青には電話で伝えたからな。三人知れば世界中、だ。
「えーっと……短い間でしたが、ありがとうございました」
最後まで面白味のない挨拶（というか半分ゴリのパクリ）で俺がそう締め括ると――
「遠山！」「遠山君！」「遠山くーん！」などと、みんながショックを受けたように俺の名を連呼してきた。ヒーロー番組が終わってしまう時の子供みたいな顔で。
ちょっと心が痛むことに……
萌は机に伏せて泣き出してしまっていて、前の席の女子に宥められている。
一方、顔に絆創膏を貼った元チャラ男・藤木林と、腕にギプスをした巨漢の朝青は、
「俺らのこと忘れないでくださいね、遠山さんッ！」
前は着崩してた制服までピシッと更生させた姿で、俺に抱きついてくる。
忘れやしない。というか忘れられん、お前らみたいな濃いキャラは。
そうして、ＬＨＲも終わり……
放課後、すっかり夕方になった頃。

俺は職員室で、ゴリ先生から転校関連の書類を受け取った。この高校で取得した、端数程度のハズの単位は……少し多めについていた。不良を更生させたお礼かな。

一礼して職員室を出ると、それに続けて――

――俺と共に東池袋高校を退学したレキも、職員室から出てくるところだった。

「結局……振り回しちまったな。レキの事も。済まなかった」

俺の都合で二度も退学を経験させてしまった事を詫びると……ふるふる。

レキは「済まなくないですよ」的に、首を横に振った。

そして、とこ、とこ。影のようについてくる。

窓からの夕焼けが、登校初日に俺が遮蔽物を探してしまった出入口を茜色に染めている。

外へ出て、藤木林たちとケンカした自転車置き場を横目に――

(たった2週間通っただけでも……退学するとなると、懐かしく感じるものなんだな)

かつて萌と一緒に歩いた、校門までの並木道を歩いていると……

「――そうらァ！」

「いっせーの、せっ！」

校舎の2階、2年2組の窓からは藤木林の、右隣の2年1組からは女子たちのかけ声が聞こえてきた。

俺とレキが振り返って仰ぎ見ると、ばさっ。ばさっ。ばさばさっ。

何人もの生徒が協力して、窓から大きな模造紙を垂らし始めた。次々に。
そこには1枚につき1文字、大きなカタカナが書いてある。
俺の名前――『ト』『オ』『ヤ』『マ』と、レキの偽名――『ヤ』『ダ』。
あれは俺たち2人を送る、垂れ幕……！　作ってくれたのか。わざわざ。
「遠山ぁー！」「矢田ー！」「遠山ぁー！　いつでも遊びに来いよー！」「矢田さーん！
いつか個展開いてねー！」「遠山くーん！」「矢田ちゃーん！」
やべえ、ちょっと……
目が潤みそうだ。レキは相変わらずポケーっと見上げてるだけだが。
でもよく見ると「トオヤマ　ヤダ」で、俺をイヤがってるような文にも見えて――俺はそれに苦笑いしてしまう。
そして、そのとき気づく。
俺は今まで、この学校で一度も笑った事がなかった。
でも、最後の最後で笑顔を見せることができた。みんなのおかげで、みんなに。
ありがとう。
俺は、生忘れない。俺の世界を拡げ、多くを学ばせてくれた、この高校の事を。
数多の犯罪現場を駆け、拳銃を百万発撃ったって学べない事を、この高校は教えてくれた。俺に俺自身という、何より大切な事を学ばせてくれた。

そう。ここも、俺にとって学びの場――学校、だったんだ。まさしく。

キテレツな学歴になっちまった俺とレキを受け入れてくれる高校は、今度こそもう無さそうに思えたが……大歓迎してくれるキテレツな学校が、都内に1校だけあった。

言うまでもない。東京武偵高である。

要するに出戻り。俺は自分から出てったくせに、Uターンして戻ってきちゃったのだ。

恥ずかしいなあ。

だが教務科に電話したら、電話に出た蘭豹は『待ってました！』的にハイテンション。ていうか、賭けてた？　教員ども。俺とレキが戻ってくるかこないか。

ちなみに、俺とレキは学科・実技ともに試験免除。面接のみで再入学OKとのことだ。ヨレた輪ゴムみたいに緩い高校である。

学費も前に払ってた分が生かしになるので、追加支払いは無用ときた。もうこれ戻ってくる前提でシステム組んでるだろお前ら。

とはいえ退学時にレキがやらかした教訓もあり、今回の面接は2人別々に受けろと命令された。これは仕方ないよな。

なので面接日の朝、俺はレキを見送ってから池袋の銃砲店で時間を潰し――

昼過ぎに、池袋駅へ向かった。

（……うーん……）

とある女子中学生が監視してるのには気づいていたが、少し気づくのが遅れたな。

（やっぱり、探偵の才能があるよ。妹さんは）

などと思いつつ、丸ノ内線のホームから池袋始発の電車に入ったところで……

「……遠山君！」

たたっ、たた、た、と――

かつて隣の席だった、望月萌が階段を下りてきた。

制服姿だ。時刻から見て、早退してきたらしい。

俺を監視してたのは、彼女の妹・咲だった。なので萌が現れるとは思っていたが……

（――ダメだ。これ以上、彼女と関わってはいけない）

俺たちの世界は異常で、危険。萌たちの世界は正常で、安全。

ウルス族の諺じゃないが、そっちの人間をこっちへ来させてはダメなんだ。

だから、俺は黙って、やってきた萌を見つめ返すだけに留めた。

「あ、あのね、えっと、彩が教えてくれて……ごめんね。私こそ、ストーカーみたい」

萌も空気を読んだのか、電車の中までは入ってこない。

あの夜と同じ防弾制服姿の俺を前にして、萌が戸惑うような顔をした時――

『2番線は折り返し、12時56分、荻窪行きです。発車まで少々お待ち下さい』

駅のアナウンスが、人のまばらなホームに響く。
発車まで、あと少しだ。なので俺は、
「警察。俺の仲間が手は打ったみたいだが……あの後、萌の家に来たりしなかったか」
あの夜、鏡高組の庭で萌も違法に発砲してはいるので——そこを確認しておく。
すると萌はふんわりしたボブカットの髪を広げて首を横にフリフリした。
「身の回りに、何か不審なことは起きてないか」
「ううん、なにも。大丈夫だよ」
ニュース記事によると、鏡高組の幹部は一斉逮捕され、資金も凍結されたそうだ。
あの場に居なかった組員も金を断たれては首が回らず、もはや皆ヤクザを続けられなくなって離散してるところらしい。
——だが、菊代は司法取引と保釈金で釈放されたようだ。
というのも、返信はまだしてないんだが……そういうメールを、本人から貰ったからな。
『淋しい。会いたい』という文言と共に。
『2番線、折り返し荻窪行き、間もなく発車します。お近くのドアからご乗車下さい』
駅のアナウンスに、後押しされたように——
「と、遠山くん」
萌が、顔を上げてきた。

アリアほどマンガみたいに赤面はしないが、頬を、かぁ……と、熱く赤らめている。
そして意を決したように、
「あ、あのっ。これ……下さいっ！」
なぜか、きゅっ。
俺のジャケットの第2ボタンを両手で包むようにして、そんな事を言ってきた。
と、唐突だな。なんで防弾ボタンなんか欲しがるんだ、別れ際に。
だが、今までの諸々に少しでも詫びたかった俺は——ブチッ、と第2ボタンをちぎって萌の柔らかい手に握らせた。こんなものでよければ、とばかりに。
「……と、と、遠山くんっ……！」
くれって言ったくせに、萌は俺からすんなりボタンをもらえた事に驚いてる。
そして、ふたえの目を潤ませて——その大きくて柔らかそうな胸の前で、ボタンを握りしめてる。お祈りするように左右の手のひらを組んで、その中に。とてもとても大切な、人生最大の宝物を手に入れたかのように。
——プルルル——
発車ベルに急かされ、萌は焦り、泣き出しそうな顔で俺を見つめてくる。
『2番線、ドアが閉まります。駆け込み乗車はおやめ下さい』
「あ、あっ——私。私。まだ、ちゃんと伝えてない。まだ、ちゃんと言えてないのにっ」

ベルが止み、萌と俺の間に――

「……私、遠山君の事が……！」

――電車のドアが、閉まる。

ガラス窓越しに、なおも萌の桜色の唇が動くのが見えた。もう声は聞こえなかったが。

萌は、言い切ったのだろう。俺に言いたかった何かを。

だが俺は敢えて、それを読唇しなかった。

それはきっと萌にとって、きちんと声で伝えたかったこと。それを盗み読むような悪いことは、もう彼女にしたくなかったのだ。彼女はとても、とても――良い子だから。

新橋を経由して、ゆりかもめで台場へ。

すっかりクリスマスムードの台場から、モノレールで人工浮島の武偵高へ。

――戻ってきた。

ここのあまり爽やかではない潮の香りにも、頬が緩む。

浮島北駅から探偵科を横目に歩き、教務科へ入り……高天原先生と合流して、緑松武尊校長に改めて挨拶をしにいく。『へえ、こういう人なのか』としか言いようのない校長の印象は、校長室を出た途端に消え去り――

その後、俺は担任の高天原ゆとり先生に形だけの面接を受ける事になった。

年上メガネ美女の高天原先生と2人っきりなのは、少々ヒス的にアレだが……
ここは、粛々と面接を受けよう。今の俺は文句を言える立場じゃないからな。
「寮では、元のお部屋を使っていいですからね。出戻り率がとっても高いから、退学者のお部屋はしばらく空けておく規則になってたの」
やっぱり戻ってくる事は想定されてたんだな。
「特秘任務が終わったことにして、校内には何食わぬ顔で戻るようにしてね。しばらく、あまり目立つ事はしない方がバレにくいと思うわ」
目立たないのは大得意だ。俺は生来、存在感が希薄なんでね。
俺なんかいてもいなくても、みんな何とも思わないだろう。そこは自信があるよ。
なので元気よく、
「はい。分かりました」
と答えると――
「あらあら、いいお返事。ねえ遠山くん、ひょっとしてちょっとカッコ良くなった？」
「は、はい？」
「うふふ。出戻りの生徒は自信を無くしてダメになっちゃうパターンと、開き直って良くなるパターンがあるけど――遠山君は、後者みたいね」
などと嬉しそうにメガネの奥の目を細めた高天原は、

「そんな遠山くんに、とってもステキなお話があります。じゃじゃーん」
口で効果音を言いながら、国際郵便（EMS）の封筒に入った書類を出してきた。
なにやら封筒の表面に書かれてある文字は……読めん。英語じゃないな。まあ英語でも読めんが。送り主の住所は……Gardone Val Trompia, Italia……イタリア？
「何ですか、これ？」
「……武偵高（ぶていこう）って、なんでか奨学金が集まりづらいでしょう？」
なんでか……って。先生。
ドンパチ&チャンバラなんぞを教える学校に、マトモな企業が金を出すと思いますか？
「世間的には、うちは若者の命を危険に晒（さら）すダーティーな学校と誤解されてるのよねぇ」
その認識の一体どこに、誤解が……？
「なので、日本企業への奨学金の無心は諦（あきら）めたの。法的な規制も厳しいから」
正解だと思うよ！
などと俺は度々ツッコミたいのをガマンしつつ「はい」「ですね」「そうですかぁ」などと相槌（あいづち）を打っておく。なんか金の話みたいだしな。ここはノッておこう。
左右の瞳（ひとみ）に¥マークが浮かんできている俺に、高天原は封筒を立てて見せた。
「その解決策がこちら、スポンサー契約ですー！」
スポンサー契約……？

「武偵高では将来有望な生徒さんをいろんな企業にご紹介して、広告費という形でお金をもらうシステムを運用してるの。遠山くんにはこちら、ファブリカ・ダルミ・ピエトロ・ベレッタ社さんが『卒業まで月額１０００ユーロを無利子で貸してもいいよ』とご提案をくれました！　これはその評価文書とか契約書とか、そういうのなの」

うおっ……！

１０００ユーロって、10万円とかだぞそれ！

後で返さなきゃいけないにせよ、利子がつかないとなれば借りない手はないぞ。

「訳してもらったんだけど――『米国防総省の資料に依れば、ベレッタＭ92Ｆを愛用するこの少年は既にアジア圏のＳＤＡランキングで１００位内に入り、イギリスの公安局から準危険武偵リストのＣ下位等級（同クラス最年少）に格付けされるなど、高ランク武偵の視界内で射撃を行う機会が多い人物であると推定され』――」

機会が多いどころか、アの字で始まるＳランク武偵と毎日撃ち合ってますよこちとら。

ハハハハハ。ジーサードなんかＲランクとかですよベレッタ社さん。

……

……

……ダメだっ！　話の最後あたりに意識を逃してスルーしようと思ったけど、さすがにスルーできんっ！　聞かなきゃ良かった！　準危険武偵リストって何ですか！

「――『なお同様の格付けは現在、日本、アメリカでも検討されており』」

などと高天原が聞きたくない話の読み上げを続けるので、俺は耳の穴を掻くフリをして塞ぎ、自ら「アー」とか小声で唸って情報の侵入を防ぐ。

（も、もう大丈夫かなぁ……）

ソーッ……と、手を耳から離すと……

「――『その超人的・芸術的な曲撃ち技は、弊社銃器の優れた性能を武偵業界に宣伝するに不足なしと断じ、ここに広告費供出の提案をする。追伸：殉学時は一括返還すること』だって。どうする？　サインする？」

にっこり。

微笑んでイタリア語の契約書を見せてきた高天原は、いま自分が読み上げた文面に何の疑問も感じていないご様子だ。さすが武偵高の先生。狂ってる。

（でも、まあ……これは……）

17歳にしてお上から目ぇ付けられつつある己の人生終了具合とか、芸術的とか言うなら月10万円じゃなくてもっと貸してくれよとか、殉学したら金返せって書いてあるけど誰が返すんだろうね？　とか、いろいろツッコミ所はあるものの……

俺は、

「サインします。ありがとうございます」

「はいボールペン。漢字で書いていいそうよ」
高天原からペンを借りて、契約書にサインをした。
分かってますよ、分かってますよ先生。そんな、優しい目の奥に怖い光を見せなくてもいいですって。美しいお顔が台無しですよ。
（――このタイミングで俺に金を用意した、ってことは……）
これは一度脱走した俺への、教務科からのメッセージだろう。『金まで握らせたんだ、もうケツまくるなよ？』という。
辞めねえよ、もう。
むしろこれで武偵を続ける覚悟も決まるってもんだ。ありがたく借りるぜ。
それと今後は『M92FSこそ世界一の名銃』と言い張ろう。
ホントは米軍が制式採用してたから流通量が多くて、拳銃本体やパーツが安かったから買った……ってのが俺とベレッタの出会いなんだけどな。
で、やたら撃ってたら手に馴染んだ。今やすっかり愛銃。というのが事実の流れだ。
「あと、NYに行ってる南郷先生から聞いた話なんだけど――遠山君には国際武偵連盟が、二つ名付けを審議中みたいよ。もうアンオフィシャルに呼ばれてる名前もあるみたいで、それを公式化するんだって。17歳で二つ名って、けっこう早いわよ。すごいすごい」
「そうすか……アリア……神崎さんは14歳で付いてたらしいですけどね」

あー……二つ名とか、イヤだなぁ。中二病的で。

ていうか、遠山キンジの急激な国際化。これはあれだな。

相模湾上空での、ジーサード戦だ。あれで米軍の偵察衛星に顔バレした俺の過去映像を、米国防総省のヒマな職員が探したんだろう。

思い起こせば、お空の下……衛星の下でドンパチやった事も、間々ありましたよ。

イ・ウー甲板上での冪乗弾幕戦とか、新幹線の上での撃ち合いとか。

ブラド戦とかヒルダ戦も、雲の切れ間からちょっとは見えてたかもだし。

で、俺の過去のヤンチャ動画――『飛んできた弾を素手でUターンさせてみた』とか『ミサイルを殴って逸らしてみた』とかが収集されちまい、銃器メーカーや関連国の公安、国際武偵連盟なんかにも共有されたってコトなんだろうな。

（……あーあ……）

先月、ジーサードが言ってた通り……俺、有名人になりつつあるよ。アングラな世界で。

と、俺がちょっと壊れ気味の笑みを浮かべてるのを見て、

「ちょっと普通じゃない経歴になってきちゃったね、遠山君。でも大丈夫。出色の生徒のキャリアは、たいてい普通じゃないものよ」

高天原先生は、天使のスマイル。励ましてくれてる。

だがそれを聞いた俺は、ずーん。むしろうなだれてしまう。

（この奇人変人だらけの学校でさえ、『普通じゃない』認定される俺って……）

――俺は。

一般校での経験を経て、武偵として生きる腹は括ったつもりだ。他に取り柄もないし。

だが、なるならなるで『普通の武偵』を目指すべきだ。と、思っている。

だってそうだろ？　浮いたら、オシマイ。変わり者は村八分。それが日本なんだ。

だから俺はこれからも、『普通』を目指さねばならない。

今までみたいに平凡なサラリーマンや公務員になる事を夢見るのとは意味が異なるが、人間やめランカーとかやってたらガチでこの国に居られなくなるぞ。

そう、これから目指すべきは普通の武偵企業だ。そして――

（普通のボディーガードとか、普通のバウンサーに、俺は、なる！）

と、俺は新たな決意と共に顔を上げた。そう、それでいい。前を向けキンジ。我ながらけっこう精神的にタフになってきたじゃないか最近。

物は考えようだ。普通じゃない学校で普通じゃない認定されるってことはつまり、普通なのかもしれないぞ。マイナスにマイナスを掛ければプラスになるじゃないか。

まあ、足せば超マイナスだけどな。

なにげに心的負担の大きかった面接を終えて、教務科から出ると……

夕焼け空には雲一つ無く、世界がオレンジ色に染まっていた。
東池袋高校を去った昨日の夕陽は寂しく見えたが、再び武偵高で見る今の夕陽は温かく見える。まるで、おかえり、と言われているようで――
「おかえり」
声に振り向くと、夕焼けと微妙に保護色になっているピンクのツインテールが。
「……アリア」
セーラー服姿のアリアが、連絡掲示板に寄りかかってこっちを見ていたのだ。
武偵高に戻ってきた俺を見かけて、教務科前で待ってたのか。
何食わぬ顔で戻れ、という命令があったばかりなので、
「ただいま」
とだけ、小さく笑って返した俺に……たったったった。
歩幅の小さいアリアは、平均的な女子より多く地面を蹴ってこっちへ駆け寄り――
ぽすっ。
セーラー服のタイを靡かせて、俺に正面から抱きついてきた。
「おい……？」
抱きついてきたといっても俺とアリアの身長差は頭1個半あるので、しがみつかれてるようなカンジだが。

「……」

暮れゆく空の下で、アリアは顔を俺の胸に埋めたまま黙ってる。

クチナシのような、甘酸っぱいニオイがその髪から香って……

「……もう、どこにも、いかないで……」

ぼそっ、と――アリアが、俺の胸に願いを埋め込むように囁いてる。

だがそれは小声で、よく聞こえなかった。

「どこにも……何だ？」

と聞くと、がば！

アリアは半べその顔を上げて――

「――どこにも！」

と、何かを叫びかけてから、自分が俺に思いっきり抱きついてる事に今気づいたような顔をした。

そして俺の顔ナナメ下に10センチも離れてないその顔を、ぶ、わぁ、あ……

心臓の鼓動1回ごとに、赤く、より赤く、赤面させていきつつ――

いつもの赤面芸だけじゃマンネリだということか、表情も変えていく……

……般若とか、仁王みたいな、怒りの、貌へ……ッ!?

「キィ～～～ン～～～ジィ～～～ッ！」

ぎりっ、ぎりぎりっ……！

俺の背後でクラッチした左右のお手々が、鉄骨を挟み折るビル解体重機みたいな強さで俺の胴体を締め上げッ……て、きて、るッ……！

「い、痛ッ、痛ててッ！　お、おいアリア！　よせ！　鯖折りはよせ！　背骨がっ折れ、ちょっ、いまゴキッっていった、背中があッ！」

「――きゃぁらッ！」

アリア独自の掛け声と共に、俺は――ゴスッ！

ベアハッグからの、フロントスープレックス！　を喰らって、顔面から地面に落ちた。

そして、どちゃ。仰向けに倒れる。……なんで？

ざしゅ。

ようやく目の焦点が定まってきた俺の頭の脇に仁王立ちし、鬼の貌のまま嗤うという、アリア慣れしてない人間なら失禁まちがいなしの形相をしたアリアは――

ばさ！

ブラウスの裾を自らたくし上げ、小さなお腹のオヘソを見せつけてきた。

……えーっと……何？

新手の痴女ゴッコか？　そんなの理子とやれよ。

「カミナリ雲がヘソを取るですってェ？　面白いジョォォクだったわねぇキンジ……！」

……あー……

巣鴨の実家から、アリアに電話したとき――

怖がらせてやろうとして、そんな事を言ってたね。俺。

「あの後、あの話、あたしが『ねえ、ホントなの？』って白雪と理子に聞いて、どんだけ笑われたか……！　どんだけ『幼稚』とか『幼児』とか『幼女』とか言われたか……！」

燃えさかる太陽を背負ったアリアは、こめかみに『D』字、首筋に『I』字形の血管を浮かび上がらせてる。

その血管が、びくんっ、びくんっ。怒りのあまり脈打ってるぞ。

「いや、俺は日本の迷信というか文化を教えてやろうとしただけで……怒るんなら笑った白雪と理子に怒るのが筋っ――」

という俺のセリフを待ってくれず、アリアは、ちょい。

小さい頃にバレエでも習ってたのか、つま先を伸ばして背伸びするような姿勢になった。

「……」

なにこの静かな入り。えも言われぬ恐怖感があるよ。

ゴクリ、と生唾を飲んだ俺の横でアリアは、まさにバレエのスピンみたいな動きで――

くるっ。くるるっ。くるるるる。

「あんたのヘソに――風穴ぁー！　開けてやるからっ！」

ぐるぐるぐるぐるるるるうっー、ぱっ！
ツインテールとスカートを遠心力で拡げて、回転したままジャンプした。
そして、つま先を先端としたドリルのように――ぎゅんっ！
倒れた俺の腹部、ヘソめがけてスピニング・トーキックを突き刺しに落ちてくるッ！
（オ――『内臓避け』――！）
――できねえし！
ぐさあああ！　とアリアのつま先で思いっきり腹を踏まれ、大地にメリ込む俺を……
教務科の2階から、どうやら自分も特秘任務を終えたらしい不知火がニコニコ見てた。
なにやら呟いてるので死に際の集中力で読唇すると『これにて一件落着』だとォ？
人のセリフを取りやがって。
ていうかこれのどこが落着に見えるんだ。眼科、いや、脳神経外科に行ってこいっ。

久々の第三男子寮・自室で一息つこうと思い、一番上のシャツのボタンを外すと――
「よっと」
にゅるん、と襟首からマフラーみたいなキツネのシッポが出てきた。暑苦しッ！
シッポは俺の首に巻き付いて、しゅるる。出てくる。その付け根には交通安全御守りがついており、シッポごとそれが背中に回ったかと思うと……ぽふんっ。

若干の水蒸気を上げて、ミニスカ和服姿の玉藻になった。
シュールだ。シュールすぎる。ヒルダの影変化に続くシュール・シリーズ・パート2。
「遠山の。儂は今より京都へ赴く。伏見は化粧っ気ばかり濃くて、困った妖狐なんじゃが――知恵者。それに天狐の大八州評定は、伏見稲荷で開くのが習わしじゃからの」
「何を言ってるのかサッパリ分からんが、お前を祓えたという事でいいか」
「お前には信心が足りん！　天罰！」
べち！
玉藻は帯に挿していた御幣で俺の顔面をブッ叩いてくる。なんというダイレクト天罰。
「というわけで、ほれ。旅費にするから、玉串料を入れるのじゃ。儂、新幹線に乗りたい。あと会議中につまむ油揚げ代もじゃ」
じゃら、と背中の賽銭箱をこっちに向けてきた玉藻に、『金なんか無いぞ』――
「べれった社から裏金もらうんじゃろお前。ほれ早く浄財せい」
――と言う前に、先回りされてしまった。あるんだよな、金のあて。チクショウ。
それにまあ、猴に撃たれたのは俺と俺のバカ弟が突っかけたせいもあるっちゃあるので、俺は玉藻の賽銭箱に新幹線の料金（こども・片道分）を入れてやった。だいたいで。
まだ貰ってもない奨学金に、逆つもり貯金的に手をつけちまったよ。早くも。
「遠山の、よく聞け。儂が感じた所によれば――猴は日本を離れ、香港に行ったようじゃ。

本人は朦朧としてたようじゃから、あの中国人たちが同行したと考えるべきじゃろう」
ヤツらはもう、香港……か。
なんとなく、読めるぜ。その素早い撤退の意味。
藍幇は、バスカービルのリーダー……俺が転校して仲間から離れたのをチャンスと見て、取引のあった日本のヤクザ・鏡高組をツテに、猴を連れていっぺん東京へ攻めて来た。
だがその猴の調子が悪くなったんで、香港に引っ込んだ。
そして猴が復調したら、いつかまた攻めてくるつもりなんだ。
師団の戦士を1人殺した（と思ってる）んだから、奴ら的にも悪くない戦果だったってことになるだろう。今回の侵攻は。殺しのヒット・アンド・アウェイだ。
敵が隙を見せた時、かつ、自分たちの調子が良い好機を、ゆっくりと母国の自陣で待つ。
そしてチャンスが来たら攻め、誰か殺して、すぐ自陣に引っ込む。
それを繰り返せば、師団を1人1人殺して全滅させる事だって可能……って作戦か。
（さすが中国人は気が長いな。万里の長城とかが造れるワケだぜ）
だが……
その作戦には1個、誤った前提がある。突き崩そうと思えば突き崩せる、前提が。
俺たちがそっちへ攻めていく、という可能性が無いと踏んでるのだ。藍幇は。
ココのご先祖様――曹操が編纂した『孫子』にある、天の時・地の利・人の和の勝利の

3要素。その『天の時』……渡りに船の話が、あるっちゃあるんだぜ。こっちには。

――修学旅行Ⅱ。

日常が殺伐としており毎年クリスマスに何も予定がない武偵高生たちに、教務科が用意してくれたイベントが……2年次では、修学旅行である。

これなら「クリスマスに予定がある」と言い張れるだろう、という武上の情けみたいな理由で時期を決めたそうだ。

俺もクリスマスにあまりいい思い出は無い。去年は兄さんの失踪事件でドン底だったし、小さい頃には父さんがケーキを買ってきたという記憶が少しある程度。後は、何だか街がうるさい平日でしかなかった。

さてその修学旅行だが、海外――上海、香港、台北、ソウル、シンガポール、バンコク、シドニーのどこかを選んで、チーム単位で各々行く決まりになっている。2年の行き先はアジア・オセアニアに限られるが、3年はアメリカやヨーロッパに行くらしい。

なお、教師の引率は無い。

というか本来はあるんだが、教師はどいつもこいつも修学旅行を慰安旅行だと思ってるらしく遊び呆けてくるだけだ。それで数々の伝説が打ち立てられた。

（ソウルで綴がユッケを牛1頭分食ったとか、チャン・ウーが台北101に徒手登攀した

とか、シンガポール動物園で酔っぱらった蘭豹が象と相撲を取ったとか……）

てか、象と相撲って。向こうは最初から前足というか手が地面についてるだろうに。

ちなみにその蘭豹は貴蘭會という香港ヤクザのお嬢なのだが、何やらかしたか知らんが香港に出禁になっている。なので香港は修学旅行Ⅱの行き先として人気が高い。アイツはお見合いパーティーやら合コンに行くたびに日本でも出禁の店が増えてる。そのうち戦場以外の全地球上で出禁をフルコンプするに違いない。

その蘭豹が今年また引率する、シンガポールに――

ジャンヌ・中空知ら女子5人の通信系チーム『コンステラシオン』は、行くそうだ。

電話で聞いたところによるとジャンヌはそこでイ・ウー研鑽派の残党と会合し、今後の極東戦役に向けた志願兵を募るのだという。

眷属の一角――藍幇に突っかけられた身としてはその辺の話もしたかったので、俺は、2年合同の小スポーツテストがあった後の放課後――

初めて、自ら、バスカービルの面々に招集を掛けた。「作戦会議だ、すぐ来い」と。

これはある意味、心機一転した俺の再デビュー戦になる。

ビシッと、キリッと、務めさせてもらうぞ。バスカービルのリーダーとして。

（招集を掛けるタイミング、完全に間違えた……ぜ……！）

体操服でゾロゾロ俺の部屋にやってきたバスカービルの面々、および外郭団体窓口ことジャンヌ（イ・ウー研鑽派）、ワトソン（リバティー・メイソン）の皆さんを見て、俺は壁際逃げからの床突っ伏し。そのまま亀になって泣いてみようか。

女6人・男1人になる事までは覚悟してたが……

体操服でヒロイン全員集合とか、理子的ゲームのワンシーンみたいな画――のイベント画像にしてもトンチンカンな光景だろ。どういう集まりだよこれ！

俺がしたかったのは、作！　戦！　会！　議！　なんだよ！

「なんで着替えてこないんだよ、お前ら……！」

と言う俺に、体育で髪をストレートに下ろした別キャラモードのアリアが、

「しょうがないでしょ、女子更衣室が壊れてたんだもん」

ちっこい口を、への字にした。ハーパン&Tシャツ姿で。

あーもう、アリアめ。今日も超カワイイな。

普段のツインテールもカワイイんだが、髪を下ろすとピンク色の表面積が増えてやたら女の子っぽい。新鮮味もある。ほんと何でアリアはそんなに何やっても許されるレベルでカワイイんだよ。見た目のみ。

なおアリアの発言における「室」が「壊れてた」という表現に一般人は違和感を覚えるかもしれないが、ここは武偵高。物理的に壊れるのである。対装甲車輌ロケット砲訓練の

誤射とかで。

「キミが『作戦会議』とか『すぐ来い』とか武偵的に前向きだから『なにかヘンな物でも拾い食いしておかしくなったんじゃないか』ってみんな心配したんだよ。それで着替えを後回しにして、急いだんだ」

と、衛生科（メディカ）の薬箱を持ってきているワトソンは――まだ男子のフリをしてるとはいえ、その実体はショートカットの美少女。倒錯的（とうさくてき）な際どさのある、上級者向けキャラだ。

だがこのイギリス人2名、およびそこの壁際で体育座りしてるレキは、ヒステリア的にまだマシな方。ハーパンにTシャツという、一般的な体操服を着用してるんだからな。

だが、そこの臙脂色（えんじいろ）、紺、ピンク色の――

（白雪（しらゆき）、ジャンヌ、理子ォ……ッ！）

――ブルマー3人！

それはもう盗撮被害とかで絶滅しつつある、20世紀の体操服なんだよ！

なんで盗撮されたりしてたか、そのパンツとほぼ同じデザインから類推できんのか！

という説教から入ろうかとも思ったが、3対1では分（ぶ）が悪い。

むっちりした太ももをよりむっちりと強調するかのように正座してる白雪。

白人特有の白くて長い脚部（きゃくぶ）を強調するかのようにスツールに掛けているジャンヌ。

己のアホさを強調するかのようなピンクの提灯（ちょうちん）ブルマーをはいている理子。

この1人1人に「なぜ遠山キンジは、あなた達にその体操服をやめてほしいのか」理解できるよう説明するのは、池上彰にもできないだろう。だからあきらめよう。
と、俺は痛む頭を押さえつつソファーに座り直し……
「――作戦会議ってのは、極東戦役の件だ」
と、鋭い眼で言う。
すると一同は、俺の前に広がるようにソファーやら床やらにやってくる。
その位置関係がまたツイてなくて、俺は彼女らからみてエアコンの風下になった。
うう……体育で、ひと汗かいてからやってきた、女子どもの……
クチナシ、桃、バニラ、ミント、シトラス、シナモンっぽい、それぞれの香り。
それらが混合された女子スメルのシンフォニー。
男女差別と言われそうだが、女嫌いの俺にとっては吐き気がするまである。
しかし全員を前に集めていきなり嘔吐するのもファンタジスタすぎる。
ので、俺は鼻からの吸気を抑えつつ、
「――打って出るぞ。ターゲットは藍幇だ」
「なんで急に鼻声なのよキンジ」
アの字がいきなり出鼻くじくし……
「うるせえなッ、人間の鼻は詰まる時には詰まるんだよ。おいジャンヌ。ココの件」

俺はソファーの向かいに座る、ブルマー（紺色・サイドラインあり）の構造上１００％脚部を露出させた状態のジャンヌに話を振る。

「うむ」

ジャンヌはアップに結った三つ編みを揺らして、うなずく。

「遠山が『気になるから調べろ』と言うので、情報科で確認したのだが……修学旅行Ｉで逮捕したココ3姉妹が、間もなく仮釈放されるらしい。莫大な保釈金を積んでな」

「……間もなく？」

アリアの膝に厭がらせ的に座ろうとしていた理子が、その単語を目ざとく拾う。

こくり、とジャンヌは頷き、

「そう。３人のココはまだ長野拘置所に勾留されている。そして皆も聞いていると思うが、遠山は特秘任務で非指定暴力団を壊滅させた際――ココと会っている。『第４のココ』が、存在するのだ。能力は不明。外見は他のココと同じだが、メガネをかけているらしい」

ココの手強さはみんな知っているので、ようやく場の空気も引き締まってくる。

そこで俺は皆を見回しつつ、

「ココだけじゃなく、諸葛って男も得体が知れない。それにジーサードを一撃で斃した、猴っていう少女がいる。これも――強い。玉藻曰く、孫悟空なんだそうだ。如意棒というレーザービームを撃つ。あれは一言で言って必殺技だ。誰も勝てないだろう。俺以外は」

と、勝算があるような事を言ってまずは皆を制した。
武偵高の女子どもにはこう言わんと、手柄を立てようとして我先に突っかけてバタバタやられかねんからな。
「猴は俺に任せろ。弟のカタキだ。俺が討つ。手助けがいる時は誰かを指名してやるから、そしたら来い」
言い方が少し亭主関白すぎたかな？　とも思ったが……みんな『やだカッコイイ』的な顔で俺を見てる。悪くなかったみたいだ。女子相手にはこれぐらいでいいんだな。
――正直、あの必殺技に勝つ方法なんて無い。
あるわけねーだろ。レーザービームっつったら光速の攻撃だぞ。こっちが目からニュートリノでも出せりゃ勝てるかもしれんが、そんな超人アメコミにもいねーっつーの。
だが、戦わなきゃならん。
弟を撃たれて兄貴が黙ってられるか。
弟が妹をやった時にもキレたが、妹のカタキだけ倒して弟のカタキは討たないんじゃ、その妹のカタキこと弟が拗ねるしな。ややこしいなこの話。
「でもキンちゃん、最初に言ってた『打って出る』っていうのは……？」
臙脂ブルマー（サイドラインなし）でソファーに正座してる、行儀がいいんだか悪いんだか分からない白雪が聞いてくる。

「――これまでの極東戦役では受けに回っていたが、それだと距離のある敵と膠着に陥る。実際、藍幇の一味は猴の調子が悪くなったのかすぐ香港へ引っ込んだ。それを態勢が整うまで待ってやるほど、俺はお人好しじゃないぜ。これは戦争みたいなもんなんだ。フェアプレーを誉められるスポーツとは違う」

と、宣戦会議直後に玉藻が言ってたセリフの受け売りを語ると――

「なんか誰かの受け売りっぽいけど偉いわキンジ！」

びし！　アリアが俺を指して、笑顔になった。

「攻撃は最大の防御なり！　強襲すべき時は強襲するのが戦いよ。受け身なのはあたしの性に合わないって、前々から思ってたところなのよ！」

強襲科のエリートさんは、フンフンフン。鼻息も荒く、俺の進撃案に大賛成だ。

一方、他のみんなは……

ビックリしてる。「キンちゃん様がこんなに積極的になるなんて、ステキ」「キーくん、拾い食いのメニューは何だったの？　こんど理子が道端にそっと置いとくよ」「……」「バスカービルのリーダーは遠山、長らく忘れていたが思い出したぞ」「トオヤマ、まさかとは思うけど、キミは何か禁止薬物をやってたりとかは……しないよな？」などと、一部というかほぼ全員失礼な驚き方で。

とりあえずそれらはスルーしつつ、

「そこで、修学旅行Ⅱを使う。行き先にはいろんな都市が選択できるが、バスカービルは香港だ。異存は無いな？」

アリア、白雪、理子、レキを見回してそう告げた。

「いいわ！」「ついていきます地の果てまでも！」「理子栗子月餅食べるー！」「はい」

4者4様のＹＥＳが返ってきて、進撃案は可決となった。

というかアリアが賛成した時点で、全員ＯＫになるんだよな。バスカービルって。

白雪→俺の言うことなら何でも従う、理子→ノリで従う、レキ→意見無し。

「――トオヤマ、ボクは東京に残ろう。修学旅行Ⅱの時期はジャンヌもシンガポールだ。ああ、留学生には見学するアジアの都市に『東京』という選択肢もあるから単位の心配は無用だよ」

と、少し人選面で心配していた守備役にはワトソンが立候補してくれた。

――武偵の集団が拠点から打って出る場合、全員が出てしまうのは厳禁とされている。敵の工作員に忍び込まれ、重要物を盗まれたり設備を破壊されるのを防ぐのは勿論……味方が散開する場合、連絡網の軸も要るからだ。それにあまり考えたくはないが、もし俺たちが負けて東京に撤退してくるなら――その受け入れ態勢を整えておく必要がある。

なので拠点となる東京に、常に最低1人は留守番係が必要なのだ。

ワトソンはどこのチームにも属さない一匹狼。

今回は、そのフットワークの良さに助けてもらうとしよう。
守備役は楽なように見えて、実は『もうそこより逃げ場がない』『皆のため、死んでも拠点を守らねばならない』シビアな役割なので――
「悪いな、後でレポートは手伝う」
その重責を自ら引き受けてくれたワトソンに、俺は礼を申し出る。
「じゃあキミの帰国後、六本木、秋葉原、浅草を一緒に回ろうね」
ワトソンは外国人がよく行く定番スポットを列挙して、ウィンクで応じた。
う。やべぇ。ワトソン特有の倒錯的な魅力に、ドキッときちまった。
ほんと、欧米勢のこのウィンク奇襲には参るな。
ていうかお前、転装生で男子って事になってんだから、そういうのよせって。
男子が男子にウィンクとか、ヘンな誤解を受けるだろ。既に不知火に受けてるけど。

あれだけリーダーシップを取って『香港に進撃する！』と宣言した俺だが、実は海外に出た事はない。というか本州以外の陸地を踏んだ事がない。
バスカービルではアリア、レキが外国産。理子も生まれだけ日本で育ちはヨーロッパ。
ジャンヌやワトソンも洋モノと、こういう流れになると立場的に俺は相当弱い。
だが自分よりダメなヤツは、どの分野にもいるもので……

「キンちゃん見て見て、飛行場が見えてきたよ。うわぁ、飛行機がいっぱい……！」
長い睫毛の目をまん丸にしてモノレールの窓から空港整備場を指さしてる白雪さんは、今朝、これに乗るのも俺の引率無しにはできなかった。大丈夫かなこれ。
「あそこはまだ整備場だろ。空港はこの先だぞ」
ちなみにパスポートは秋に教務科命令で作らされたんだが、白雪も俺と同時期に作っていた。ので、当時インタビューしたら……
白雪は生まれてから一度も、旅客機に乗った事が無いという。
そこは俺以下だ。俺は乗った事あるからな。ハイジャックで。
（海外なんか、行きたくないと思って生きてきたけどな……）
学校行事、極東戦役、藍幇と猴、弟のカタキ討ち（生きてるけど）――
いろんな理由でイザ行くと腹を括ったら、少し楽しみにもなってきたな。
そうさ、楽しむぐらいの余裕を持って行こう。
何もかもサクッと何とかして、後はスッキリした気分で香港饅頭でもお土産に買う。
見たい物も、ある。純粋に、観光したい物という意味で。
（『１００万ドルの夜景』――）
――香港の夜景は、『１００万ドル』と形容されるほど美しいという。
映画では見たことがある。猫の額ほどの土地に超高層ビルが密集し、海際ギリギリにも

それが続く。その全てが煌々と光り、海面に映って2倍の輝きを放つ。地震大国日本では決して見られない、幻想的な光景だ。

俺はそれを小さい頃、ジャッキー・チェンの映画で見た。殉職する少し前の父さんと。

『――死ぬまでに一度は、生で見てみたいな』

父さんはそう言っていたが、彼の願いは叶わなかった。

でも、息子が叶えに行く。そうさ、叶えるんだ。

藍幇との戦いに勝った上で、気分良くな。

朝の羽田空港に着くと、白雪はキョロキョロ、キョロキョロ。

まだ海外に着いたワケでもないのに、ボストンバッグをどでかい胸の前に抱っこして、物珍しそうに空港を見てる。どうやらここも初めてらしい。

「おい、着いたぞ」

などと、3階の国際線出発ロビーから他のメンツに電話し――

予定通り、朝7時にバスカービルが全員集合した。今度は、ちゃんと防弾制服姿で。

「んもー、普通はラウンジ集合なのに」

何だか分からん理由でむくれてるアリアは、空港のホテルに前日泊。金持ちは5時起きとかしないのである。

ダブルの部屋だったからもう1人泊められたようで、そこにはちゃっかりレキが寄宿。
ハイマキは救護科1年の獣医学専攻・宗宮つぐみという便利キャラに預けたそうだ。
「いやーカタログチェックで夾ちゃんと貫徹！　コミケが理子に徹夜を強いる件！」
などと食パン咥えて時間ギリギリに走ってきた理子は、早くも俺には理解できん日本語以外の言語で喋っているようだ。
「きゃっはー！　キーくんのパスポート、ヘンな顔ー！　ゆきちゃんも超おすまし顔！」
……あっ、理子！
いつの間にか俺のトランクと白雪のバッグからパスポートを盗みやがってるし！
徹夜明けでハイテンションな理子から俺はパスポートをもぎ取りつつ、
「――証明写真ってのはヘンに撮れるもんだろッ。ていうかお前、自分こそパスポートを寮に忘れたりしてないだろうな？」
小突いてやると、にやぁー。理子は笑って、
「理子はスタジオで撮った顔写真使ってるもんね～！　4つあるけど、どれ見るー？」
フランス、アメリカ、日本、あとどこだか分からん国のパスポートを見せてきた。
ていうか、お前なぁ……なんで4つも持ってんだよ……
と思ったが聞くだけムダなので聞かない。どうせ偽造パスポートだろ。フランスの以外、どれも名前が違うし。自由な怪盗さんは国境線にも縛られないんだなあ。

「あっ、リュックにはカナの顔のパスポートも入ってるよ。日本国籍のやつ」
「……もういい。出入国、ちゃんと乗り切れよ？」
早くも頭痛がしてきた俺の前で理子は、
「アリアのも見せて！　そういや見たことないよ！」
などとアリアにすり寄ってる。
普段ならここで『公共の場で騒いだら風穴よこのバカ理子！』と二丁拳銃が出るところなのだが――アリアは、
「ほら、バカやってないで荷物預けに行くわよ」
プイッとソッポを向き、すたすた。
横にレキ、後ろに慣れない空港でカルガモのヒナ状態の白雪を連れ……キャリーバッグをゴロゴロ引いて、チェックイン・カウンターの方へと去っていってしまった。
そのアリアらしからぬリアクションに、俺と理子は顔を見合わせてしまう。
何だよアイツ。パスポートの写真、よっぽど変顔なのかな？

カウンターでシート番号・フライト時刻・出発ゲートの書かれたボーディング・パス（要するに飛行機の切符だ）をもらい、荷物を預け……
日本円しか持ってなかった俺と白雪はアリアに怒られつつ、空港内の銀行で香港ドルに

現金を両替してもらう。これがもう日本と掛け離れており、同じ20ドル札でもデザインが3種類もあったりする。10ドル札なんか、一部プラスチックで透明だし。

やっぱり海外なんだなぁ。今から行く場所は。

とはいえ、フライト時間はたったの4時間半。外国は遠いと思ってたが、学校で授業を数コマ受ける間に行けちゃうのだ。国によっては。

そんな事を悟りつつ、俺は武装職従事者専用の出国ゲートをくぐる。

ここでは国外に持ち出す銃、銃弾、ナイフの種類と数を細かく書かなきゃいけないので面倒だった。藍幇と戦いに行くってんで、重武装してきたし。

「ベレッタ1、DE1、ナイフが1、スクラマ・サクスは……中型刀剣1。銃弾……あれ、何発あったっけ」

などと9㎜弾を一々数えて床に落としたりしてる俺の横を、すたすた。たたた。

「何やってんのよ、グズねぇ」

「……」

「キーくん、おっさきー♪」

アリア、レキ、理子は申告用紙を事前に作ってきたらしく、ぺらっぺらっと出して先へ行ってしまう。ずりい！　そういう手があったんなら教えてくれよ！

俺と白雪はそこでモタモタし……最終的に、

「キンちゃん待ってぇ～、ひぃ、はぁ」
「おい急げ白雪、もう搭乗案内中だぞっ！」
空港名物の免税店を見るヒマもなく、搭乗ゲートへ走るハメとなった。
あっ、ちくしょう。海外慣れ軍め。
ウィンドーショッピングを満喫したツヤツヤ顔で、ゲートを通過していきやがるよ。
こっちは足がもつれた白雪が「きゃん！」と転んで、ウィーン……動く歩道で自動的に運ばれてきている。無様だ。

ＡＮＡ１１７１便、Ｂ７７７－３００ＥＲ。
飛行機の中にも格差はあった。如実にあった。
――まず、アリア。
これは当たり前のように機体先端方向のファーストクラス席へと案内されていく。
ちなみに先日ネットで調べたところ、時期にもよるがファーストは東京―香港間で片道25万円とかするのだ。
さらに高級なエグゼクティブ・ファーストクラスとやらもこの世には存在し、一般人は乗れないチャーター機で提供されている。あの忌まわしい４月にアリアが乗って、理子にハイジャックされたロンドン便がそれだ。

かつて俺はその料金を片道20万円だと思っていたが、それは桁を1つ間違えていたのである。だがそれも不幸中の幸い。２００万円もするお部屋と知ってたらテンパっちゃって、あんなに遠慮無く撃ち合いとかできなかったよ。

――それと、理子、レキ。

この2人は他の航空会社で過去の搭乗回数が多い、お得意様。そのマイレージをＡＮＡにも流用できるとかで、2人してビジネスクラスに席をグレードアップしてやがった。どいつもこいつも、たかが4時間半のために贅沢しやがって。

いかんぞ、そういう浪費は。日本人の美徳を知らんのか。

遠山憲章1条、人は質素を旨とすべしだ（いま作った）。

「白雪、俺からはぐれるな。迷子になったらコトだから。お前、席どこだ？」

と訊ねつつ、白雪とエコノミークラスのある方へ移動しようとすると……

白雪はボーディング・パスで顔を隠すようにして……ふるふる！……と震えて、

「キ、キンちゃんごめんなさい、私、私、星伽の決まりで……公共の乗り物に乗る時は、盗難防止のために、あれば一等車か二等車に乗らなきゃいけなくて……三等車とか貨物車とか……ダメなんですっ……！」

うるるる。目を潤ませつつ、口と鼻をそれで隠しつつ見せてきたチケットは――

ビ、ビジネスクラス……！　こいつまで……！

「ごめんなさいっ！」

白雪は愛する人のもとから貧富の差という悲しい理由で去るようにターンして、たたぁ。

機体前方の金持ちゾーンへ、消えていく……

そして、シャッ。

C　Aさんがビジネス以上と以下を仕切るカーテンを閉め、俺はお嬢様たちの姿すら見ることが許されないエコノミー界に分断されてしまったのであった。

ベレッタ社からのいわゆる奨学金は第1回入金があったが、節約のためにネットで一番安い席を頼んだ俺のシートは……機体のシッポ側、一番後ろの窓側だった。

しかも隣に座った乗客はよりによって力士。さすが運の悪さに定評のある2年の遠山だ。

「すみませんねぇ。ごっつぁんです」

などと謝りつつの力士は巨体で空間侵犯してくるが、縮めと言って縮むもんじゃないしケンカはしたくない。力士はただの太っちょじゃないんだ。その巨体で体脂肪率は一般人より低かったりする、筋肉を脂肪の鎧で包んだ戦闘巨人。

（強襲科でも『力士とだけはケンカするな』って先輩が言ってたしな……）

チラッと見れば、手の指さえフランクフルトみたいにぶっとい。ありえんだろこれ。

なので俺は泣き寝入りするしかなく、

「いえ……大丈夫です」
小声で応じ、エコノミー席の狭い空間をより狭く使うハメになった。
（重さが3倍ぐらい違う力士と俺の料金が同じとか、ヘンな話だよなぁ）
とか器の小さい事を考えつつ、動き始めた滑走路の景色を窓から眺め――
エンジン音が強まり、機体がジェットコースターみたいに速度を上げ、浮かぶか、浮かぶか……と思った次の瞬間……ふわり。浮かんだ。日本の地面から、離れた。
（武偵憲章9条――世界に雄飛せよ）
それは……こんなに簡単に始まっちまうもんだったんだな。
英語もできんし忙しいからとか言って妙に構えてた過去が、あっけなく終わっちまった。
世界ってもんは、チケット1枚買って、飛行機に乗っちまえば――始まってしまうモノ。
その向こうが無限に広く、その先にいろんな事があるにせよ、踏み出すのは難しくない。
（世界、か……）
その記念すべき第一歩を、フワリと踏み出した瞬間だな。
まあ、隣のお相撲さんのせいで浮遊感は満喫しきれないんだが。
機体は上空へ出て、ベルト着用サインが消えた。しかし俺はサイドからの圧力に屈してバナナみたいに体を曲げ、寄せ木細工みたいに足・胴体・腕の位置まで固定した状態だ。

これで香港まで行くのか、俺。

などとゲッソリしていたところ……

「失礼いたします、遠山キンジ様。ちょっと、こちらへ……」

やってきたCA（キャビンアテンダント）さんが俺を呼び出すので、お相撲さんに一度立ってもらって……

通路に出た俺は、彼女の「ささ、こちらへどうぞ」的な手つきで機体中央のギャレーに連れ込まれた。

簡易な台所みたいなそこでは、制帽を脱いで胸の前に持った……副操縦士か……？　が、俺に一礼してくる。何だ？　何で呼ばれたんだ、俺？

「――遠山さん。私は4月、東京湾の人工浮島に不時着したＡＮＡ６００便の副長です。当機の操縦士は、あの時の機長でして……その節は、ありがとうございました」

「ああ、あの時の……！」

俺とアリアが組んで解決した最初のヤマ、ＡＮＡ６００便ハイジャック事件。

その被害に遭い、結果的に俺たちが助けた機長と副長が、今はこの路線のパイロットをやってたのか。縁は異な物だな。

「私たちからのささやかな御礼として、遠山さんのシートをファーストにグレードアップさせていただければと思うのですが――いかがですか？」

いかがも何もない。お相撲さんだって隣に誰もいない方が座りやすいだろうし。
というわけで俺はお言葉に甘え――さっきCAに閉められたカーテンの向こうへ、そのCAにカーテンを開けてもらいつつ堂々と入っていった。
（俺とアリアだけじゃなくて、犯人の理子も乗ってるんだが……言わぬが花だな）
横一列に9人も座らされていたエコノミー席とは違い、ビジネスでは7人。
シート幅もそのぶん広く、ゆったりしてる。
いかにも会社の重役といった人々が疎らにいる座席、その間の通路を前へ進むと――
そのシートの1つから、
「キーくん！　理子に会いに来てくれたのー!?　そんなに理子の事が好きなんだねぇ～」
アニメ映画を見ながら機内食を食べちらかしていた理子が、振り向いてきた。
空港で買ったお菓子の空き箱が、座席下に散らかってる。
リラックスしすぎだろお前。足までプラップラさせやがって。ここはお前ん家か。
「会いに来たんじゃない。俺は席替え中なんだよ、ファーストにな」
俺が思いっきり見下すような視線で言うと、機内食の皿をナメナメしてた理子は、
「なにぃー！　キーくんのくせに生意気だー！　がおーだ！」
左右の人差し指でツノを作り――座ったままシャッシャッと俺の腹を蹴ろうとしてくる。
その足と足の間、スカート内がチラどころかモロに見えそうだったので、俺は前へ移動

というか避難する。その時、視線を床に逸らしたせいで気づいたが――
（理子の、影……！）
２つ、ありやがる。ヒルダがついてきてるのか。
ていうか、ヒルダ。完全にタダ乗りじゃねえかそれ。なんてヤツだ。影になって誰かについていけば世界中どこでも行けるぞ。映画館とか銭湯にも入り放題だ。
などと我ながらセコい事を考えながら歩いていくと、
「かしこみ、かしこみ……」
いたぞ裏切り者が。
毛布を膝にかけてアイマスクをした白雪が、酔い止めの薬を飲もうとまごまごしてる。
俺を見捨てたバチが当たったのか、飛行機酔いしたらしい。
ていうか、薬飲むんならアイマスクする前に飲めよな。
鼻でもつまんでやろうかと思ったが、もう天罰は下ったようなので……見逃してやるか。
それ以前に貧乏人の逆恨みだしな。俺のこれは。
それと――もっと前の方の窓側席に座っていたレキは、
「……」
なんにもないお空を窓から見て、アンニュイそうにポケーっとしている。
微動だにしないので、せっかくのビジネスクラスの広いシートを全く活かせてない。

お前こそエコノミーで良かったんじゃないのか？
などと思って見てたら、窓ガラスに映っていたレキの目と反射越しに目が合った。
だが、レキは別に何も言わない。いつものレキだ。
ジー……っと、窓に映る俺の目を見てくるだけ。
「……」
「……」
……よし、見つめ返してやれ。ヒマだし。
ジー……っと、俺もレキの目を見つめていると……
……すっ……
あれ……少し恥ずかしそうに、視線をナナメ下に逸らしたぞ。なにこのカワイイ小動物。
じゃあジロジロ見てやれ。視線責めだ。
と思って、面白半分にレキをシートのナナメ上から1分ほど（途中から窓越しでなくて本体の顔や頭を）見つめ続けてやったところ……レキは頭を垂れて、赤くなってしまった。
ヘッドホンの下のショートカットの髪も、くにゃんと頬や目元を覆うように垂れている。
相変わらず、口元に表情は無いままだが。
なんというか……ちょっと、喜ばしいことだな。これは。
半月ほど5人も家族がいる我が家にホームステイして、レキも人間的に成長したのかな。

こういう人間的な仕草が出てくるとは。それもけっこう、いやだいぶカワイイぞ。
かつてのロボット・レキを知る身としては面白くもあるので、もっとこういうのを引き出してみたい気もする。矢田ミントちゃんから。

白雪流に言えば二等席ことビジネスクラスを通過し、俺は一等席――
ビジネスからもキッチリ仕切られた、ファーストクラスの空間へと足を踏み入れた。
さすがファーストは足下からして違う。機内用の絨毯だよこれ。
そして、空間の使い方に超ゆとりがある。エコノミーなら50人ぐらい詰め込まれそうな空間に、座席というより可動式ベッドに近い大きなシートが8席しかない。
で、前列中央でくっついてる2席の片方にしか、客がいない様子だ。
つまり、アリア1人の貸し切り状態。
俺の席をグレードアップしてくれたのは、こっちが空いてたからもあるんだな。
しかし……そうなるとちょっと、気恥ずかしくもある。
この空間に、俺とアリアの2人っきりとか。
「……」
そっと、アリアのシートまで歩いていくと……
……すー、すー。

アリアはカプセルみたいなシートの中で、眠っていた。
まるで、揺りかごの中の赤ちゃんみたいだ。
（おっ。アリアのパスポート……）
シート脇のカクテルテーブルに、起きっぱなしにしてるな。無防備なやつめ。
アリアは今のところ日英の二重国籍者だが、パスポートは菊柄の日本のものではなく、ユニコーン・ライオン・王冠などが描かれたイギリスのものだ。
見れば、かなり使い古されてる。5年は使ってるカンジだ。
そういえば、羽田でアリアはこれの写真を理子が見せろと迫った時――なんでか、見せなかったんだよな。テンションも下げてた。
どれどれ。どうせクシャミした瞬間とかの恥ずかしい顔写真なんだろ。
寝てる隙に見て進ぜよう。
と、俺はそのパスポートを手に取り、ぺら、ぺら、と顔写真のページを探り当て……
（……）
静かに、そのページを閉じた。
……
……
（アリア……お前……）

言葉も……出ないな。
悪かった。勝手に見て。
だが、見て良かったとも思う。ある意味、覚悟が決まったよ。改めて。
俺が武偵として、今しばらくお前と共に戦う――覚悟が、な。
眠るアリアを見下ろしつつ、俺がそっとパスポートをテーブルに戻した時……
「ももめん……じゅるっ……ん？」
アリアは口内に分泌したヨダレを吸う音を立て、その音で自ら目を覚ました。なにそれ。
「え……キンジ？」
アリアは寝起きの自分を見下ろす俺に、赤紫色の瞳を半開きから通常開きにしていく。
「……ももめん、ってのはももまんの複数形か？　まあ、お前が香港で本場のももまんを食うのを楽しみにしてるのはよく分かった」
「な、なによそれ。あたしが食い意地張ってるみたいに……！」
「ヨダレ拭いてから言えよ」
俺はアリアの隣のシートに、どさっ。
堂々、悠々と座る。そしてセレブ気分で脚を組む。
うーん。スバラシイ。これがファーストクラスか。これはアリアじゃなくても眠くなるほど柔らかくて心地良いシートだ。

「お客様、ボーディング・パスを確認させてくださいな」
俺が勝手に来たと思ってるらしいアリアが、自分のシートの上に崩れた正座をしつつ、CAゴッコっぽく言ってくる。
「機長に確認しに行けよ。きっと喜ぶぜ」
「よく分かんないけど、正当に席を手に入れたみたいね」
カンの鋭いアリアは俺の態度からそこを理解したらしく、にこ。
ネコっぽい犬歯を見せて、嬉しそうに微笑んだ。
たぶん淋しかったんだろうな。こんな広いところに1人っきりで。
ていうか機嫌がいいカンジだぞ、アリア。これは良い事だ。フライトの安全上。
「ねえキンジ、あんた香港に着いたら何食べる予定なの。夜」
やっぱり食べ物の事を考えてたな。
「別に予定なんてない。適当に食べる」
「じゃあ、あたしが食べさせてあげるわ。美味しいレストランはたくさんあるんだけど、どこも1人じゃ入りづらいのよ。香港は賑やかなお店が多いから」
シートは広いので、ちびっこアリアには座席というよりベッドだ。
なのでアリアは四つんばいになって、こっちに話しかけてくる。
「じゃあ、お言葉に甘えるよ。腹が減っては戦にならないしな。あ、そうだ。できれば、

夜景の見える店がいいんだが」

と、俺が父さんが見られなかった『１００万ドルの夜景』をリクエストすると――

「や……夜景ね。分かったわっ」

それに何やら誤った深読みをしたようなマジ顔になったアリアは、ぐいっ。

前のめりの上半身を、さらにこっちへ前のめらせてる。

するとそのセーラー服の襟首から、胸元が見えて……一瞬焦ったが、セーフだ。

白雪や理子に見られるような谷間が存在しないので、そこには闇が広がっているだけ。

だが俺の怯える視線は気づかれたらしく、

「あッ……また、もう……！　バカキンジ……」

アリアは、サッ。セーラー服の胸あてを引き上げて、胸元を隠した。そして、ぷい。

座り直して、小さな背をこっちに向けた。

「――なんで見たがるのよ、こんな胸。バカにしてるんでしょ、心の中で」

半分振り向いて、恥ずかしそうに赤面して言ってくるので……

「いや……違うって。今のは、その、わざとじゃない。男は本人の好む好まざるを問わず、本能的に目が行ってしまうものなんだ」

俺は一般論になすりつけて、個人の罪ではないというロジックで自己弁護しようとする。

「あたしにはほとんど無いんだから、本能も働かないでしょ。白雪が『男性は大きな胸が

大好き！』ってたまになぜかいきなり電話してきて叫んで電話切るし。夜中に」

何やってんだ白雪は。それもう精神攻撃だろ。

「いや、そうとも限らないぞ。俺は少なくともそうじゃない」

大きかろうが小さかろうが、どっちも困るからな。女子の胸なんか。

と言うとアリアは、ぐるっ！

「そ、そんなのウソよ！」

「なんですごい笑顔で振り向いてくるんだよ。セリフと表情がズレてるぞ。ていうか……お前なんか最近、機嫌いいっつうか……何か、いいことでもあったのか？」

通常の会話ならもう7～8発は撃たれてる所なので、つい俺は聞いてしまった。

アリアと接触して3分近く経つのに、銃はおろか刀もバリツも出てこないなんて。

逆に調子が狂っちゃうよ。

「……うん。あった」

アリアは、ぎゅ……と、枕を抱きしめて胸を隠しつつ、ちょっと赤くなった顔をそれで半分隠し……上目遣いでこっちを見てきた。

「何が」

「キンジが」

「俺が？」

「なんだか最近、前向きになってくれた気がするの。武偵として。それが……嬉しいの」
らしくない甘え声で、アリアはウットリ俺を見つめてくる。
ので、俺は柄にもなくドギマギしてしまう。
これもアリアの落とし穴なんだよな。
周囲に他の人間がいるとキリッとして俺のご主人様ぶるくせに、2人きりになると妙に甘えん坊になる事があるんだ。日に日に、その頻度が増えてる気もする。
しかも甘えてくるのは、元々が海外のファッション誌に載るような美少女。ときたら、いくら女嫌いの俺でもテンパる。正直、見た目は嫌いじゃないし。
なので俺が甘やかし気味に、
「……あー……それはまあ……その、お前には話しておくよ。事実、前向きになったんだ。この間の特秘任務でな。まあ、まだお前ほど前向きじゃないが」
そう言ってやると、アリアは……わぁあ。
ロングピローをギュッと抱きしめつつ、驚きと喜びに声もなく口を開く。
そして興奮のためか、その顔がどんどん赤くなっていく。
「じゃあ……もう、武偵やめるとか言い出したりしない？」
「ああ。自分からは辞めない。俺には他の仕事も出来なさそうだしな」
その回答はアリアにとって、とても満足なものだったらしく……

表情がやたら読みやすい事で有名な双剣双銃さんは、一足早いクリスマスプレゼントをもらった少女みたいな顔になった。

「じゃあじゃあ、これからもあたしのパートナーでいてくれるのね？」

何か話に飛躍があるような気もしたが、俺はそれにも、

「そうだ。だから大事に扱えよ」

と、肯定で返しておいた。

するとアリアは枕に顔面を埋めて「キンジぃ～！」などとアニメ声をくぐもらせ、ぱたぱたぱた。シートの上で、靴下のつま先を小さくバタ足させてる。

……喜んでる。すっごく。

なるほど、そういうことか。

――アリアの一族、ホームズ家の人間には、パートナーが要る。

そのパートナーとして採用したのに今ひとつモチベーションの低かったキンジが、何があったか知らないが少々やる気を出しつつあるらしい……

だから、上機嫌だったのか。

（ていうかほんと、俺なんかの何がいいんだろうな……？）

あっちの俺を頼りにしてるのは分かるが、アリアはこっちの俺の事も十分知ってるハズなのに。

俺がお前だったら、俺なんかと組むのはゴメンこうむるぞ。こんな昼行灯なんかとは。

ぱたぱた。ぱたぱたぱたー！

見ればアリアは喜ぶ顔をロングピローに埋めて隠したまま、隠してるのに耳やうなじの色で分かるほど赤面していた。

そしてほぼ超音波なので聞き取りにくいほどの高音、かつ小声でスキスキスキスキー！

……？　よく分からんがキーキー言ってる。我を忘れたように。

（何が……好きなんだ……？）

一つだけ確実な事は、このあいだ怒りにまかせて腹にスピニング・トーキックを入れた対象――俺以外の何かが好きって事だな。そこから推理して考えるしかない。

（アリアの、好きな物……？）

ああ、あれか。

これはアリアがたまに発症する『ももまん萌え』（理子命名）。

アリアがサイフを忘れた日の帰り道とかに、いきなり「あたしはももまんが好きよ！」などと俺に叫んでくる――すぐ買って来なさい！　という意味のアレの亜種か。

飛行機の中……つまり食べたいのに食べれない状況下だと、こんな形で発症するんだな。

おそらく想像上のももまんに萌えて、禁断症状をやり過ごそうとしているのだ。アリアは。

夢でも食ってたみたいだしな。

「キンジっ」
薔薇みたいな赤面顔を上げてきたアリアは、
「あたし……あの、あたし、キンジ……キンジ、ありがとっ……寝るわっ！」
いきなり、ばたーん！
その顔のままシートに寝そべって目を閉じた。ニヘラニヘラしつつ。
で、お年頃の女性としていかがなものかと思われる無防備さで……くー、くー。
俺、つまり男子がいる真横ですぐ寝息を立て始めた。
すげえな。『おやすみ』の3秒後に寝られるのはアリアの特技だが、空の上でもできるとは。どんだけ飛行機慣れしてるんだよ。白雪に爪の垢でも煎じて飲ませたいね。
……しかし、ここでの俺。
ディナーの誘いは受けるわ、幼児体型も擁護するわ、武偵やめません＆パートナー続けます宣言とか……可愛いからって、ちょっと子どもを甘やかしすぎたかな？
だが、いいんだ。
構わない。
俺は——この旅でも果たさなければならない、俺の重い責任を改めて思い出したところだから。
「……」

今ここにいるアリアの髪がピンクブロンドで、瞳が赤紫色なのは……彼女の体内に撃ち込まれた、緋弾のせい。

それはイ・ウーで、俺が止めきれなかった弾丸。

アリアは今やその緋弾のカバーとなる殻金を失い、自分が自分でなくなってしまうかもしれない危機に瀕している。

緋緋神。

それに、もしアリアがなってしまったら――髪や瞳の色が変わるだけでは済まない。

おそらく元々のアリアの心は失われ、その恋と戦争を好む荒ぶる神に乗っ取られる。

そうなってしまったら……

破滅だ。

玉藻なんか、殺せとまで言ってた。

アリアの変化は時間的には緩やかにだから、危機感を持ちにくい。だが、その時は間違いなく刻一刻と迫ってきているのだ。俺はそれを防がなければならない。命掛けで。

なぜなら俺は、アリアのパートナーで……そして……

イ・ウーで『緋弾のアリア』の始まりとなったシャーロックの発砲を止めきれなかった、責任者だから。

（――香港――）

香港（ホンコン）には藍幇（ランパン）がいる。
藍幇は、持っている。
元々は7枚あり、今は3枚しかない、アリアの殻金（カラガネ）のうちの――奪われた1枚を。
それを取り返すんだ。事と次第によっちゃ……いや多分、力尽くでな。
この極東戦役（FEW）に於（お）いて、『眷属（グレナダ）』と戦う時は――それが極めて、重要な事。
（それを思い出させられたよ。アリア。お前の、パスポートの写真にな）
と……
俺（おれ）は再び、カクテルテーブルに置かれたアリアのパスポートを横目で見た。
パスポートの写真のアリアは、発行日から見て12歳の時のアリア。
――金髪、碧眼（へきがん）のアリアだったのだ。

# 2弾 ブリッジヘッド OZONE

現地時間の正午過ぎ、12月とは思えない陽ざしの中――
ANA1171便は香港上空にさしかかり、風向きに応じて旋回した。
機体が傾き、町を南北に分断するヴィクトリア湾が窓の向こうに見える。
（あれが、香港……とうとう来ちまったな、海外に）
あれだけバスカービルを扇動しといて何だが、さすがに緊張するなこれは。
着陸態勢に入るその航路は、驚くほどビル群の上空スレスレを飛ぶものだ。ビルの窓の1つ1つがツブツブと見える。日本じゃ許されんぞ、こんな進入コース。
そして滑走路へのアプローチングが行われ、きゅきゅっ……
機体はソフト・ランディングで香港国際空港に着陸し、ビジネスクラスの方から理子の拍手と指笛が聞こえてきた。
――ベルト着用サインが消えると、ぴょこ。
着陸の振動で目覚めたアリアがシートから飛び降り、靴を履き直しつつ、
「ほら。降りるのもあたしたちから優先なんだから、グズグズしてたらみんなに迷惑よ」
などと貴族的なご発言で俺を急かすのだった。

なんか、アリア……海外に着いた途端、少し活き活きしてるカンジがするな。

（12月下旬だってのに……暖かいな……！）

機体を降りてすぐ、それに驚かされる。

さすが沖縄よりずっと南にあるだけの事はあるな。20℃近くありそうだぞこれ。

煩雑な武装者入国審査を済ませ、白雪・理子・レキとターンテーブルで荷物を取り——俺を急かした割には入国審査で時間を食ってたアリアと（背伸びしてカウンターから頭を出し、係官にペラペラ英語で話してた。パスポート写真と本人の色が違うから説明を求められたんだろう）合流し、税関を抜ける。

アリアと理子はキャリーバッグを引いて薄暗い到着ロビーをスタスタ歩き、レキも普段通りの無表情でゼロハリのトランクを片手に進む。

キョロキョロ、ノロノロ、挙動不審なのは——

「た、大変だよキンちゃん、看板が全部中国語だよ。周りがみんな外国人だよ」

「外国人なのは俺たちだろ、ここじゃ。こら、袖つかんでくるなよ」

海外なんかもちろん来た事の無い白雪と、その白雪にしがみつかれてる俺だ。

「キーくん、ゆきちゃん。機内で切ってた携帯の電源、ちゃんと入れたー？」

「はぐれた時に電話できなきゃ困るわよ、あんたたち。その様子じゃ、誰かの案内無しに

日本に帰れなさそうだし」

理子とアリアに言われた俺と白雪は、それぞれ青と白のガラケーを出す。

「えっと……あっ！　アンテナ立った！　キンちゃん電波来たよ！　電波、電波！」

白雪は携帯を手に報告してくるが……

コイツが『デンパ来た！』とか言うと妙な怖さがあるのは何でだろうね？

「――よし、俺も大丈夫だ」

電源を入れれば『３ＨＫ　３Ｇ』と通信会社とネットワークの表示が出て、アンテナの表示も出た。メールもリアルタイムで受けられるように設定して……と。よし。

（これで、一安心だな）

入国審査も税関も通れた。現地通貨もある。通信もできる。携帯の待受画面では時刻もちゃんと香港時間になってたので、腕時計もそれに合わせた。

さあ、動くぞ。敵のホーム・香港での作戦開始だ。

と顔を上げたら、携帯から『花のうちに』のイントロが。２通の新着メールだ。

飛行機に揺られてる間に送られてたのを、まとめて受信したらしい。

「……？」

珍しいな。『バスカービル』フォルダでも、武藤や風魔からのメールが振り分けられる『どうでもいい』フォルダでもない。２通とも、素の受信ボックスに入ってる。

――1通目。送信者、『望月萌』。件名、『武装探偵になろうと思います』……

――2通目。送信者は未登録メアド。件名、『菊代だけど。また武偵を目指すよ』……

ばしん。俺は携帯を閉じ、見なかったことに……

で、できん！　なにこれ!?

しかもなんか妙に連携の取れたカンジじゃございませんか萌さん&菊代さん!?

（まさか2人で言い合わせて、俺を追って武偵高に移る気じゃ……！）

ガーンだな。海外で動こうと思った矢先に、国内問題に出鼻をくじかれた。

だがもうこれは帰国してから対処するしかない。おいよせやめろ2人とも、とは思うが、ここからじゃ止めるに止められん。

というわけで俺はやはり今の2通を見なかった事にしつつ、

「よっ……よし。まずは市街地のファミレスかどこかに入って、作戦会議をしよう」

気持ちを切り替えて、天井から下がる『往市區』の案内板――電車やバス、タクシーのアイコンが描いてある。そっち側の出口から都市部へ行けるんだろう――を指す。

すると理子とアリアは揃って『やれやれ』といった仕草をし、

「キーくん中国慣れしてなーい。茶餐廳じゃ外から丸見えだよ。見られてもいい作戦になるかもだけど、とりま隠密行動しなきゃ」

「橋頭堡なら、もう予約してあるから。ついてきなさい」

などと、俺が指したのとは別の出口へ歩いていく。
なので後を追い、明るい陽光に照らされた車寄せに出ると……
そこにはキラキラした白銀のロールスロイスが2台停まっており、正装した運転手らが俺たち——特にアリアを恭しく出迎えるのだった。

香港は文字通り、港町。
中国の一部だが、一国二制度というルールで独立国のようなムードがある。
社会主義国にあるのに、貿易や金融で繁栄した資本主義の権化みたいな大都会だ。
（東京より過密な都市なんて、初めて見るぜ……）
車窓から、俺は流れる町並みを眺める。
急峻な山岳を背景に、僅かしかない平地に密集する高層ビル。ビル同士の隙間にさらに少ししかない地面では、車・バス・路面電車がウジャウジャ行き交ってる。
渋滞を巧みに避けつつ、俺たちを乗せた車は九龍地区のウォーターフロント——
台場を彷彿とさせる、ハコモノが建ち並ぶ地域に入った。
停車したのは、その一角で天を衝く翡翠色をした超高層ビルの下。真新しくて、やたら高いビルの車寄せだ。
アリアは見上げても見えない高層階を小指で示し、

「ＩＣＣビル。ここの１１８階に場所取ったから、そこを司令室にするわよ」
と、車を降りていく。ビル入口で待機してたポーターが車のドアを開けてくれたのは、さも当然といったカンジのおすまし顔で。

ツアコン気取りの理子がペラペラ説明した所によると、このＩＣＣビルは４８４ｍ。ビルだらけの香港でも一番高い超高層ビルなんだそうだ。
その１０３階から上は全て、リッツ・カールトンという超一流ホテルになっている。
ガラスのクリスマスツリーで装飾されたホールから、エレベーターに乗り……
「アリアはペニンシュラのが好みだったんじゃなーい？　純イギリス系だし、あそこ」
「藍幇は香港中に手先がいるでしょ。あんな歴史あるホテルじゃこっちの動きが筒抜けになるわ。ここは開業したてだから、藍幇の影響も少ないハズよ」
などと理子とアリアが話すのを聞いてる間に、エレベーターが急上昇していく。気圧が変わるので耳抜きが必要なほどのスピードで。
それでも1分以上かかって――１０３階・各国の金持ちが歩くレセプション・ロビーに到着し、さらにエレベーターを乗り継ぎ……
「ここからなら、香港中が見えるでしょ」
窓から超高層ビル群を遥かに見下ろしつつのアリアに先導されて、俺たちは１１８階の

OZONE（オゾン）というバーに着いた。
そして六本木のクラブみたいに派手なその店の、VIPルームに入る。
ここがなるほど隠れ家っぽい所で、壁と見分けのつかないドアから入る構造だ。普段は歌手や映画スターがお忍びで来た時に使う個室なんだろう。
で、そこのデザイナーズ・ブランドの円卓に着いたアリアは、
「ここ、しばらく貸し切りにしたから」
当たり前のように、上座にどっかり着席。
そして、きゅ。エラソウにアンヨを組んだ。
白人のキレイなウェイトレスさんが三段重ねのトレーでアフタヌーンティー・セットを運んできたのも、全くもって当たり前といった表情をしてる。
そんなアリアの左右には、
「きゃはー！　理子（りこ）エッグタルト取りぃー！　あとチェリーのフレーバーティー予約！　おぉー見て見てアリア、プチケーキがクリスマス模様だよーっ」
三段重ねのトレーに載ったカラフルな洋菓子（ようがし）に目を輝かせる理子と、
「……」
分解ドラグノフ入りのトランクを壁際（かべぎわ）に置いたレキが、それぞれ座った。
かいがいしく俺（おれ）のリュックをバゲージラックに置いた白雪（しらゆき）も着席し、ウェイトレスさん

たちがティファニーのティーカップとソーサーをその前に並べてる。
「ようこそ神崎様。日本からお送り下さったお荷物は、こちらです。ご指示通り開梱して磨いておきましたので、ご確認下さい」
ホテルの制服をピシッと着たお姉さんが日本語で示した、部屋の片隅には――
ベルベットの布で覆われた、何かゴツゴツした大きなモノが鎮座してる。
「ありがと。ここの席料にまとめといて」
アリアは支払いのサインを、サラサラと筆記体で書いてる。どうやらアリア級の金持ともなると、こういう場でサイフを一々出したりはしないらしい。
「……何だよこれ。機関砲とかじゃねえだろうな」
不安に思った俺がベルベットの布をめくり、中身を査察すると……
あ。ホバー・スカートだ。
だが色が違う。
前に見たのは燻銀だったが、今回のはアリアの髪と同じピンクゴールドになってる。
「これ、こないだ乙女ロードに墜落して壊れたんじゃなかったのか？」
「あれは評価機だったのよ。これは実機。名前も『YHS／01』――コードネームからプロダクトネームに変わったわ。ほらここに書いてあるでしょ」
「要するに改良版か。ていうかお前、まさか……ここから飛ぶつもりか？」

「そうよ」
ケロッとして言うし。
怖くねえのかよ。ここ、高度５００ｍとかだぞ。
「――司令室をここにしたのは、その理由もあるわ。香港はどこもかしこもビルの谷間。敵を空襲するとき、ここから飛べば一旦上昇する手間を省けるでしょ。それにあたしは、孫悟空って敵のことを絵本で学習してきたの。ヤツは筋斗雲って航空機を持ってるそうよ。となると飛べる個体がこっちにも必要だわ」
どや顔で西遊記知識を披露するアリアに、
「ああもう……生命保険には入っとけよ？　武偵は割高だけど」
俺は頭を振り、席に着くのだった。

バスカービル以外を人払いしたＶＩＰルームで、クリームをベタベタつけたレーズン・スコーンをもりもり食いながらの理子が……
まずは、藍幇について語る。
理子はイ・ウーにいたころ中国拳法や爆弾戦術をココ（たぶん猛妹と、第４のココ）に教わった弟子だから、ある程度の知識があるのだ。
「――藍幇は昔からある組織でね、清朝ごろまでは海賊だったんだよ。だからイ・ウーと

思想的に共鳴してたね。洋上アナーキズムっていうのかな、ああいうの」
「無法者同士、友好的だったってことか……」
　せっかくなので俺も、エッグタルトをつまみつつ話す。
「通商は多かったね。イ・ウーが南シナ海を航行してる時は装備品の調達とか戦術講師(コンサル)でよく出入りしてたし、ドック船で潜水艦のメンテしてくれた事もあったよ。藍幇は組織に上納した金額で序列が決まる拝金主義の組織だから、高かったけどねぇ」
「――組織の戦略傾向(ブリヴィアーストラテジー)は？」
　アリアが紅茶を傾けつつ、サンドイッチを取って理子に聞く。
「本部と各支部でバラバラ。香港支部はカウンター型の組織だね。自分から攻めるより、敵が攻めてきたところを迎え撃(う)つスタイル。でもそればっかりじゃいけないってことで、ココが上海(シャンハイ)の本部から香港に異動させられたんだよ。上海藍幇は攻撃一辺倒(いっぺんとう)だから」
　ふむ……
　中国ぐらい広い国になると、無法者の全国組織も地域ごとに性格が変わるんだな。
「藍幇城だっけ、藍幇のアジトはどこにあるの？　あと、藍幇は何人ぐらいいるの？」
　ちゃんと挙手してから、烏龍茶(ウーロンチャ)を蒸らし中の白雪(しらゆき)が聞く。
「アジトの場所は分かんない。っていうのも海賊時代の名残(なごり)で、藍幇城は海上に浮いてる浮島(ふとう)みたいな施設なんだよ。タグボートで牽引(けんいん)して、香港島とか九龍半島の周囲を行き来

してる。人数は……末端まで数えると、１００万人とかじゃないかなぁ」

「な、何っ!?」

俺はタルトを落っことしてしまう。

１００万人って。どういう組織だよ。

「藍幇は企業・財界はもちろん、教育界、司法、政治の中枢にもお仲間がいる。そういうところは、リバティー・メイソンに似た組織だよ。だからその影響下にある人も入れると、すごい人数になるんだよ。藍幇資本の会社に勤めてる人とか、学校に通ってる人とか」

なるほど……日本のヤクザみたいにハッキリと『ここからが構成員』っていう区切りがし辛いってワケか。

「１００万人対５人か。厄介な状況だな。だがまあ、極東戦役（FEW）では代表以外の戦闘参加が禁じられてる。雑兵を薙ぎ倒す面倒は無いってことだ。ただ、何にせよ注意して動かないといけないって事だな。どこに藍幇の目があるか分からない。で、どうするアリア」

ちょっと振ってみると、アリアは、キリッ。

「――撒餌作戦よ。その目の多さを逆利用するわ」

頼もしい表情になった。

「ヤツらのアジトがどこにあるか分からない以上、まっすぐ進撃して敵の戦士を倒す事はできない。それに加えて、香港の藍幇は自分から攻めてこないタイプ。そういう場合は、

こっちが相手のホームに入り込んだ事をアピールして敵を誘い出すのよ。そこで勝ってもいいし、もし引き分けても逃げる相手を追跡すれば拠点が判明するでしょ」

「じゃあ、えっと……？」

白雪が小首を傾げると、

「ヘンに探るような真似はしなくていいから、人目の多いところを普通に観光しなさい。学校の課題だってあるんだし」

ふむ……なるほどねえ。

アリアも言ってたが、これは『撒餌作戦』という裏技的な戦術。俺も戦略Ⅰで習った。まずセオリーを無視して、敵地侵入の後に敢えて散開する。

そして魚が撒き餌に食いついてきたら、その個体はしばらく持ちこたえつつ——仲間を呼んで、敵を取り囲むのだ。

各個撃破されるリスクは伴うものの、①個々の個体の戦力の信頼度がおしなべて高い、②通信手段が確立している、といった条件さえ整っていれば効く戦法だ。

——一同を見回すと、別に異存のありそうな顔をしてるのはいない。

バスカービルには、アリア、白雪、理子、レキ、そして条件付きだが俺……まあ、全員ちょっとやそっとじゃやられないタマが揃ってるしな。

戦役では敵も代表となる戦士だけを出すのがルール。三国無双みたいに雑兵に囲まれて

体力切れ・弾切れに陥るケースも想定しなくていいだろう。
通信も、携帯があるんだから大丈夫だ。
今日日の携帯は海外でも日本にいるのと全く同じように通信ができる。アリアが空港に着くなり俺たちの携帯を気にしていたのは、この作戦が念頭にあったからかもな。
（よし、その手で行くか。あと……）
俺は紅茶を飲みつつ、アリアの表情を確認する。
アリアは……
海外に出て、このセレブな施設に入ってから、水を得た魚のようにすっぽり収まってる感じがある。
本人もそれは感じてるようで、俺ら平民をしっかりリードする貴族様の立場をしっかり思い出したような面構えだ。
一言で言うと、調子が良さそうなのだ。アリアの。
……よし。
本来なら俺がリーダーだが、ここは権限を委譲しよう。
貴族ならではの人使いの荒さはあるヤツだが、こういう時は誰かが仕切ってくれた方がやりやすいしな。あまり余計な口を挟まず、まずはこのちびっこ女王様に任せるとするか。
などと俺が考えている前でアリアは、

「じゃあ……お茶を飲み終わったら、さっそく行動開始よ。香港の治安は悪くないけど、観光スポットにはスリも出るから気をつけなさい――こらキンジ、聞いてるの!?」

などと俺の思いが以心伝心したように、司令官モードで怒鳴ってくるのだった。

アリアはOZONEに残り、いざ誰かが敵と戦闘になったらYHSで空襲・援護する係。

メインの荷物をOZONEに置いて軽装になった俺・白雪・理子・レキの4人は……

これも長官の発案で、まず2人ずつで行動することになった。

組み合わせについて「じゃあグーパーでもするか?」と言った俺はアリアにマカロンを投げつけられつつ、

・近接戦に強いキンジと理子をまず別々にする。

・キンジは超能力に弱く、また、負傷しやすい。なので治癒能力を持つ白雪と組ませる。

・理子は退避行動に優れるので、敵と遭遇したら距離を取ってレキが狙撃で反撃すること。

というご説明を受けた。

さすが戦闘絡みのことには頭が回るアリアだ。この編成も、確かに上手い。

なので白雪と理子も「なるほど」って顔。いつもの俺を左右に割くパターンのケンカもせず、それに従った。

なお、おやつ時に一旦4人で合流し、情報交換&アリアへの電話連絡をせよとの事だ。

そして最後は1人ずつで自由行動し――

アリアからの命令メールによれば、夕食時に俺とアリアはちょっと合流してリッツ・カールトンのレストランに入り、バスカービル幹部会議。料理と夜景で英気を養った後……

その時点でも藍幇側に動きがなければ――

夜中は、全員それぞれの宿で敵を待つ。という作戦になった。

そこが敵さんにとって最も狙い目な時間帯になるわけだが、来襲してもらわなきゃこの計画自体が上手くいかんからな。果報は寝て待て、って事だ。

――さて、やってやろうじゃねえか。この一風変わった、藍幇釣り上げ作戦を。

香港には主に中国本土側で半島状になってる『九龍』と、その南に浮かぶ『香港島』の2地域がある。

その間にはヴィクトリア湾という海峡があり、そこはトンネルやフェリーですぐ渡れる。

12月22日、14時。アリアの号令で作戦開始が告げられ、俺&白雪班は九龍の目抜き通り・彌敦道へ、理子&レキ班は香港島へとそれぞれタクシーで向かった。

（初乗りが200円ちょいとか、サイフに優しいな……）

ビルの林をひたすら走るタクシーの中で、メーターを見ていると……

（……？）

さっきまで観光計画を手持ちのガイドブックに書き込んでいた白雪が、俺をニコニコと見てるのに気づく。
見てる。めっちゃ見てる。白雪が俺を。風邪でもひいてるように、ポワーンとした目で。
そして……ん？
よく聞こえないが「これは神様がくれた大きなチャンス」とか「最近の遅れを取り戻す最大のチャンス」とか「さあ決定的チャンスを物にできるか」などと、1人でサッカーの実況中継みたいな事をブツブツ呟いてるぞ。
それから「チャンス、チャンス、チャンス」と音飛びするCDみたいになったので、
「お、おい白雪。何だよ。何がチャンスなんだ」
俺は引き気味に、というかドン引きしつつ尋ねる。
するとハッと我に返ったような顔をした白雪は、サッ。
「あ、あの！」
顔の下半分を『香港』と大きく書かれたガイドブックで隠した。
「あのね……私は想像力があまりないから、夢に描いたこともなかったんだけど……」
そしていきなりツッコミ所のある発言から入ってきたな。
お前に想像力が無いなら、この世に想像力のある人間は1人もいない事になるぞ。
「キンちゃんと2人で、2人っきりで、海外旅行！　だなんて……これ……し、し、し、

新婚旅行っ！　みたいだね！　とか、思ったりして……あはっ、ううん、何でもないの。何も言ってません私っ。私、キンちゃんと2人っきりだと、恥ずかしくて言いたいことが言えなくなっちゃうクセ……なかなか直らないね。ごめんなさいっ」

きゃー、って、最終的には顔全体を伏せて隠しちゃったけど……

お前いつも、というか今もしっかり言ってるじゃんか。何だか分からんそういうこと。

正しくは『恥ずかしくて言えないクセ』じゃなく『言ってから恥ずかしがるクセ』だぞそれ。

と、俺は呆れ顔をする事でツッコミに代える。

だが、幼なじみの白雪が楽しそうにしてる分には……俺も、悪い気はしない。

表現方法に独自性があるとはいえ、白雪の感情は俺に伝わってきやすいからな。思考は全く読めんが。心と心というか、気持ちは一番伝わってくるんだ。

その辺は、かなめ以外では唯一の女子かもしれない。

今もとにかく白雪がなぜかワクワクしてて、すごく楽しい時を過ごしているという事はよく伝わってきた。

そして人間、楽しそうな人がそばにいると自分も楽しくなってくるもので……

白雪と共に佐敦という地区でタクシーを降りた俺は、自分も少し気持ちが盛り上がってくるのを感じていた。

この佐敦（ジョーダン）は、いかにも買い物天国って感じの場所。

ビルだらけなのは同じだが、その合間を多様な露店（ろてん）が埋め尽くしている。町中がドンキホーテ状態だ。この混沌（こんとん）としてて、猥雑（わいざつ）で、アジア的な喧噪（けんそう）。否応（いやおう）なしに気分が高揚（こうよう）する。

そして何より一番、俺たち日本人にとって面白い光景は――

「キンちゃん見て見て、頭の上に看板がいっぱい。みんなネオンサインになってるよ」

などと白雪がデジカメで写真を撮（と）りまくっている、色とりどりの看板だ。

香港（ホンコン）では看板が、左右のビルから上空に突き出ているのだ。それも、大量に。

「ああ。どれもゲーセンとかパチンコ屋みたいに派手だが、普通のお店の看板なんだな」

と、俺もその無限の看板群を携帯のカメラで撮っておく。

映画などではお馴染（なじ）みの光景だが、こんなの日本の屋外広告物法じゃ許されないだろう。

今すれ違った2階建てバスなんか、屋根で看板を掠（かす）めるように走っていったぞ。

そして……出不精（キンジ）と箱入り娘（白雪）がキョロキョロよそ見しながら歩いていると……

「――あれ、大通りはどっちだ？」

すぐ、道に迷ってしまった。

「彌敦道（ネイザンロード）をまっすぐ南へ行ってから、香港島へ渡る予定だったよな。通りに戻らないと」

「う、うん。えっと、えっと……ここがこの角だから、こっちが……えーっと……？」

んー？　と地図を覗（のぞ）きこむ白雪は、限りなく頼りない。

だが案ずるなかれ。

「――俺に任せろ」

武偵憲章7条。『悲観論で備え、楽観論で行動せよ』だ。

海外だからって恐れることはない。備えはある。

俺の手元には日本製の、世界一高性能な情報端末――携帯電話があるのだ。

と、俺はガラケーのGPSを起動する。

……よし。自分の現在位置が表示されたぞ。誤差も50m以内。

海外パケホ事業者に接続してるから、料金もたかが知れてるだろう。

「ほら、これで俺たちがどこに居るか分かる。歩いてる向きも出るんだぞ」

と、俺はアナログ女の白雪に地図アプリを見せつけてやる。

すると白雪は俺の携帯を見つつ、つん……つん。

「ありがとうキンちゃん。キンちゃんは、や、やっぱり、頼もしい御方……」

つん、つん……

何だ？　携帯GPSごときで過剰に俺を尊敬したような表情をしつつ……俺の手の甲に、自分の手の甲を触れさせてきたぞ。

つん、つん……

あ、またやってきた。

白雪は手の方を見ておらず、わざとかどうか分からないほど控えめになんだが……俺がそれに気づいた顔をすると、テンパったような表情になって固まってる。
どうも故意だったらしい。このつんつん行為。
（なんだ……？）
俺が首を傾げると、白雪は「えいっ」って顔をして、ぺた。
手の甲と甲を、くっつけてきて……からの……そーっ……
ゆっくり綾取りするみたいな指つきで、俺の指と自分の指を絡め始めてきた。
何これ。マジで。
「――あ、あああ、あのっ、キンちゃん様っ！」
にぎりっ。
しまいには俺の手を握ってきたよ。白雪。
そして、うわぁー凄い大胆な事しちゃってる私！　的に自分で自分にビックリした顔をしている。
いやだから何なんだよこの手は。意味が分からん。
「あの！　はぐれちゃったらいけないから！　手を繋いでもいいですかっ！」
声でけえし。
ていうか……いいですかって聞く以前に、がっしり繋いできてるだろ。これ。

もう振り払えないぐらいの勢いで、かなりの力を込めてギューって握ってきてるし。

「……」

――ただ、実際ここではぐれたらマズそうなのは事実だ。

しかも白雪は、『ダメ』って言われたら泣いちゃいそうな顔で俺を見上げてる。

まるで死刑か無罪かの判決を待つ被告人みたいな表情だ。

「……」

まあ……いいか。

藍幇。見たけりゃ見ろ。子供同士みたいだと、冷やかすなら冷やかせ。

その方が、俺がお前らの首根っこを押さえるモチベーションも高まるってもんだ。

「……行くぞ」

と、俺も白雪の手を握り返してやると、白雪は「！」と心臓が口から出てきそうな顔になる。

そしていつものX脚ぎみの足つきで――

俺に引っ張られるようにして、彌敦道をついてくるのだった。

手が入れば足も入る。

昔の人はよく言ったもので……その後、白雪は俺の手を握りっぱなしになった。

（いいかげん、気恥ずかしいんだが……）

白雪はさっき公認を得たという様子で、写真を撮る時とかに手を離してもすぐさま繋ぎ直してくる。

その度に繋がってる手と手をニコニコ見て、それから照れるような、はにかむような、幸せいっぱいの笑顔を俺に向けてくるから……

俺としても、やめさせるに忍びない。これは。

なので俺と白雪は、さっきからずっと手と手を繋ぎっぱなしだ。

（……流されてるっていうのかな、こういうの）

そういえば昔、上野でアリアと手を繋いで歩いてた事もあったな。半ば無意識に。

だがあの時はグーで殴られた後、手を離してから繋ぎ直したりはしなかった。

なので、手つなぎ回数・時間ともに白雪が一気に逆転した形になってる。この香港で。

それはそうと、

「あっ、日系のお店があるよキンちゃん！　セブンイレブンだよ！」

「吉野屋もあるぞ。何か、ラーメンも売ってるみたいだが……おっ、あっちには和民……元気寿司まで……！」

レポートに書くネタをカメラで撮りまくる俺と白雪は、相変わらず観光客丸出し状態。

白雪に至ってはガイドブックを羅針盤のように何べんも覗きこむから、日本人だという

ことまでモロバレだ。
まあ藍幇（ランバン）の構成員を釣るという作戦上、それはそれで全く構（かま）わないんだが。
「あっ、ブランド物のバッグが9ドルで売ってるよ！　粉雪（こなゆき）が喜びそう。お土産（みやげ）に買っていこうかなあ」
「どう考えてもニセモノだろそれ。空港で没収されるぞ？」
俺は白雪と2人して談笑しながら、大通りを歩いていく。
普段なら、女子と2人っきりになれば話すネタにすぐ詰まる俺だが——
海外には珍しいものが溢（あふ）れてる。だから白雪との会話も弾（はず）む。
正直……けっこう、楽しい。
さっきの白雪じゃないが、結婚した男女がハネムーンとかいう旅行に行く謎（なぞ）——あれも、なんとなく解明されてきたぞ。俺の中で。
幼なじみという事もあり元々お互い友好的だった俺と白雪との関係も、より良くなったような感じがするしな。こうして旅先を歩いてたら。
ちなみに英語がロクに喋（しゃべ）れない俺と、知識はあっても人見知りするため喋れない白雪のコンビは、最初のうちちょっとした買い物にも言葉の壁で困ったが……
それも、2人で協力すれば越えられる事がすぐ判明している。
まず白雪が紙に言いたい事を書いて、俺がそれを店員に読み上げればいいのだ。

聞き取る係はまた白雪で、それを俺に和訳してくれるから聞き取りも問題ない。
これが、海外――
（なんだ、なんともないじゃないか）
最初は少なからず不安もあったが、ちょろいもんだぜ。
戦いの日々で会得した『やればできる』の精神を以てすれば、世界なんて楽勝だ。
この調子なら、藍幇もすぐ陥落させられるだろう。
イケるぞ、この海外遠征。

九龍観光を満喫した俺と白雪は、東京港トンネルみたいな雰囲気の短い海底トンネルをタクシーで渡り――香港島に入った。
間もなく、15時。次はそこで理子たちと一旦合流し、軽食を取る予定だ。
タクシーの運転手さんには英語が通じなかったが、漢字で行き先を書けば簡単に通じた。
漢字文化圏同士ではこういうやり方もある。ここのコミュニケーションも余裕でクリアだ。
なお白雪はさっき日本人向けの漢方薬の店にも入り、冬虫夏草を見て「きゃーっ」とか溜め無しの白雪ジャンプでわざとらしく俺に抱きついてきた後……
何やら得体の知れん漢方薬を店に調合させて、しこたま買っていた。で、
「日本に帰ったら、これで薬膳を作ってあげますね。あなた」

タクシーの車内で、ニコニコと薬の入った紙袋を見せてくる。
白雪に、どこか悪いと思われてるのかな？　俺。
（……何を飲まされるんだ？）
不安に思って「ちょっと見せろ」と袋を取ると、日本語の説明文が裏に書かれてあった。
『滋養強壮』……元気が出るってことか。これは別に構わんな。
『男性機能増進』……うーん……よく分からん。ヒゲが濃くなったりするのかな？
『子宝に恵まれます』……？
何だこれ。総合的に何だ。だが一瞬、動物的本能による緊張感が走ったぞ。俺の背筋に。
「……？」
額にワケの分からん汗が滲んできた俺と目が合った白雪は、
「だって……手、繋いでくれたし……」
もにょもにょと小声で独り言を呟き、赤くなってクネクネし始める。
そして所々でその声のボリュームが大きくなり「それは愛し合ってる証拠」「新婚旅行も済ませた」「7～8人産む事を考えればそろそろ第一子が」等の危険性の高いフレーズが聞き取れた。
これは……アレか……！
白雪やチャンネル2のかなめがお得意な、超理論錬成。本人にしか理解不能な方程式に

よって日常の些細な事象を曲解し、一足飛びに何か企んでるっぽい。そんな顔をしてる。言うなれば、白雪が黒雪に変わる予兆。黒雪注意報だ。

白雪の中で普段おとなしくしている和風九龍――ヤマタノオロチ？　が解き放たれたら、取って食われかねん。おそらく俺の知らない、恐ろしい方法で。

こ、この辺で理子たちと合流する予定になってて良かったぜ。

香港島は、さっきの九龍よりイギリス統治時代の建造物が多く残っている。

というのも、アヘン戦争で負けた中国からイギリスにまず割譲されたのがこの島だったからだ。その後50年以上かけて、九龍、新界といった地域が段階的に取られていった……と、白雪のガイドブックに書いてあった。

東洋と西洋が混じったようなその香港島の、上環という駅で車を降りた俺たちは――

「キーくん、やっほー！　もう食べてるよー！」

「……」

駅中の添好運という飲茶レストランで、理子・レキと合流した。

食うことに関してはムダにこだわる理子のメールによれば、ここはカジュアルに見えてミシュランで星を獲得した事もある名店らしい。

お茶や点心を運ぶ店員さんたちをスリ抜けてテーブルについた俺は、

「――どうだ、敵の気配は感じたか」
本場のラーメンを食べてみたかったので、中国語のオーダーシートの『麺』と書かれた料理に適当にチェックを入れて白雪にパスする。
俺はシリアスに尋ねたのに、理子は、
「あーゴメン、ひたすらあちこちで食べてたから分かんないや」
まさかの、『てへぺろ』。
コイツめ……どうりで腹が妊娠したみたいに膨れてると思ったぜ。
しかも今なおアワビを乗せた焼売やらプリプリの蒸し棒餃子やら、ガツガツ食ってるし。
体が爆発しても知らんぞ。
「……」
その隣でクコの実入りゼリーみたいなのを食べているレキも、理子に付き合ってグルメツアーをやってたんだろうが……その体型に変化は無い。腹腔内ブラックホール飼育説が裏付けられつつあるな。
詰問したところ、2人はもうこれで10軒も食べ歩きをしたそうだ。何やってんだよもう。
「キーくん・ゆきちゃんコンビは何食べたの？」
「どのお店がどんなお料理を出すのか分からなかったから、まだ食べてないの」
オーダーシートと香港ガイドブックを照らし合わせ、無難な物を探していた白雪が顔を

上げると――

「もったいなーい！　モッタイナーイ！　もったいない運動！」

ばんばん！　理子はテーブルを叩き、

「酒楼・酒家は広東料理店！　飯店・菜館は上海とか北京とか四川の料理も出すとこで、粥・麺ってついてたら大衆店、甜品店は甘味屋さんっ！」

などとギャーギャー説明してきた。

もうコイツは……完全に、当初の目的を忘れた顔をしてるな。

まあ、白雪と写真撮りまくって歩いてた俺が言えた義理も無いんだが。

「広東料理とか北京料理とか言われても、分からん。何を食っても中華は中華だろ」

反論した俺に、理子はいかにも見識の少ない島国人間を批判するような目。

「広東料理は薄味、上海料理は味が濃いめ、四川は辛口で、北京料理は塩味！」

よかったー、理子とツーマンセルじゃなくて。

この調子でベラベラ知識をひけらかされながら歩いてたら、ウザくてどっかでブン殴ってたね。

「ほんとキーくんってば、何しに香港来たんだか！」

ほら忘れてやがった。

「少なくとも食うためじゃないぞ。今から思い出させてやる」

と、俺は携帯を出して――OZONE基地にいるアリア長官にテレビ電話をかけた。
すぐ出たアリアは食べてたももまんを画面の外に隠してから、
『合流できたみたいね。海外でキンジがタクシーに乗れるか、そこから心配してたけど』
上から目線でそんな事を言ってきた。
「バカにすんな。そのぐらい余裕だ。あと最初にチクっておくが理子はこの調子だ」
俺は携帯のインカメラで理子のぽっこり腹、およびリスが頬袋にやるみたいに食い物を詰めたほっぺたを映す。
で、怖い物知らずの理子がカメラに両手で敬礼して、怖い物＝アリアが『後で風穴』と歯ぎしりしながら言うのを聞いてから、
「――今のところ猿はシッポを出してない。とはいえ俺と白雪は繁華街を歩き回ったし、このバカとレキもレストランを何軒もハシゴしたそうだ。相当な人数に姿を見せる事には成功しただろう」
と、状況を報告しておく。
ちなみに猿というのは事前に決めた、藍幇を表す隠語だ。
ヤツらは孫悟空を出してきたからな。
『OKよ。じゃあこれからは作戦の第2フェーズ。バラバラに動いて、猿が食いつくのを待ちなさい』

というアリアに頷いて、俺は連絡を終える。
次の段階――海外での個人行動ってのは最初ハードル高い気もしたが、少し歩いてみてその不安も払拭できた。現金も持ってるし、携帯もあるし、大丈夫だろう。
「請慢用」
と、ウェイトレスのお姉さんが俺がさっき注文した『麺』を持ってくる。
よし、俺もしっかり食べておこう。腹が減っては戦ができぬ、と言うからな。
「……さて、本場のラーメンはどんな感じだ？」
と、箸を手に皿を見ると――
か、かた焼きそば……！
確かに『麺』だが、俺のイメージしてたのと違うよ。これじゃあ。
愕然とする俺を、理子は指さして大爆笑してる。
あっ、白雪までクスクス笑ってるぞ。
ちくしょう。俺もケチらないでガイドブック買ってくりゃ良かったぜ。

人間翻訳機のアリアほど堪能じゃないが、理子は日本語・フランス語・英語に加えて、中国語も話せる。
といってもカタコトらしいのだが、コイツは中国人相手でも平然とベラベラ喋る。元々

おしゃべり好きなので、楽しげに、ジェスチャーを交えながら。で、結果、通じる。
知識はあるのに物怖じして喋れない典型的な日本人・白雪とは大違いだな。
そんな理子の案内で、俺たちは香港島を東西に横断する路面電車の駅へ向かった。
ここの路面電車は2階建て。
よく言えばレトロなムードがあるが、車体は古いな。箱を立てたような形で、不安定な感じもする。蘭豹あたりが張り手したら、普通に横転するんじゃなかろうか。
アリアの立てた作戦では——ここからは4人バラバラに行動して、敢えて隙を見せつつ藍幇を釣り上げる段階だ。
なのでレキは上環に留まり、残りの3人は路面電車に乗り込む。
俺たちはこれで香港島を東へ向かい、停車駅ごとに1人ずつ降りる。
そうして、携帯でアリアに連絡しつつ相手の出方を窺うってワケだ。
せっかくの2階建て電車なので、俺は白雪・理子と2階席に座って写真を撮るが……
「キーくん見て見て！　全面金色のビルがあるよー！　あれね、金運が良くなるからってあんな色にしてるんだよ！　さすが風水都市だねー！」
理子は幼児みたいに座席に膝立ちして、個性的なビルを見てはそのたび大はしゃぎ。
混み合う車内で老人に席を譲った白雪は、
「キンちゃん。降りる時に乗車賃の2・3香港ドルを払うのが遅いと急かされるんだって。

お札とかで払っても、お釣りは出ないみたい。コインを用意しておいた方がよさそう」

などと旅の知識を教えてくれつつも、相変わらずガイドブックと睨めっこだ。

なもんで、俺が2人とも降りる駅を乗り過ごさないよう管理しなきゃならん。

引率の先生みたいだよ、まったく。

で、理子、白雪をそれぞれ中環、金鐘という駅で無事降ろしてから――

（次は……灣仔、俺が降りる駅だな）

俺はサイフを出し、多角形の2香港ドル玉と端数の30セントを握っておいた。

あまり大金は持ってないんだ。釣り銭が出ないんじゃ困るからな。

そして狭い階段を他の乗客と揉み合うようにしながら下りて、いよいよ……

――単独行動、開始だ。

1人だし、人混みの中を歩く事になる。スリには重々、気をつけないとな。

雑然とした灣仔の路地に降り――

生活雑貨・生鮮食品・子供向けのオモチャなんかが並ぶ市場を歩く。

まるでスーパーマーケットが屋根を失って、ビルの間中に広がったような光景だ。建物にも生活臭がある。観光地じゃなくて、地元民がリアルに住んでる地域って感じだな。

なので、俺みたいな外国人に優しい造りにはなっておらず……

（あれ、どっちに向かってたっけ）
またすぐ、迷ってしまう。香港は迷いやすい街だな。
だが大丈夫。こういう時は、さっき白雪にやってみせたのと同じ手法で切り抜けられる。
携帯GPSだ。科学の力は偉大だよ。
さて……
「……？」
あれ、携帯……どこに……
……
……
「――！」
な、無いっ。
それだけじゃないぞ。
サイフも無くなってる。
落としたかと思い、慌てて周囲の路地を見回し――かけて、舌打ちする。
（……スられたんだ！）
片方ならともかく、両方いっぺんに落とすなんてありえん。
だが、どこでだ。灣仔に降りてからは気をつけていた。

となるとその前。路面電車の中……だっ。
思い返してみれば、車内で――
俺は白雪とか理子を引率してたせいで、注意が散漫だった。
日本語を喋り、高そうな日本の携帯で写真を撮り、サイフを出して運賃を用意してた。
どちらも、どのポケットに入れたか丸見えだったんだろう。
そして2階席から降りる時、あの狭い階段で何人もの乗客とすれ違った。
そこで盗られたんだ。
(やられた……!)
振り返っても、もう路面電車は遥か東に消えている。
すぐアリアに電話しようと思ったが、その携帯が無い。
タクシーに乗ってICCビルへ戻るにも、金が無い。1香港ドルもない。
パスポートはOZONEに置いてきてしまった。
あるのは――拳銃だけ。むしろヤバいだろこれは。
「……っ……!」
俺はアリアのいるICCビルを探そうと、周囲の空を見回す。
だが、見えるのはビルの壁だけだ。ビルとビルの間からも、ビルしか見えない有様。
どこか……どこか、周囲が見える所に出ないと。

見晴らしのいい所を探して、ウロウロ歩いている内に……
俺は方向感覚を失い、さっきの灣仔（ワンチャイ）駅にすら戻れなくなってしまった。
ここは、どこだ。
様々な色形のビル。様々な露店（ろてん）。こんなに景色は多様なのに……同じところをグルグル回っているような気がする。
そこをどこまで行っても、ビルの壁しか見えない。1階が店舗で、上は何十階にも及ぶ古いマンション。それが地の果てまで続いてる。
GPSに頼ってたから、俺は白雪みたいに地図を持っていない。理子みたいに広東語（かんとん）が喋れるワケでもない。
空き缶でも置いて日本の歌でも歌って小銭をもらおうか、などと追い詰められた発想も湧（わ）いてきたが、俺はレキみたいに歌が上手（うま）いわけでもない。仮にそれで電話代を稼（かせ）げても、公衆電話から仲間の——日本の携帯に国際電話をかける方法を知らない。
俺は……
俺は、何もできない。
周囲にはウジャウジャと人がいるのに、誰（だれ）にも助けを求められないまま……
さまよい歩いて……歩いて……歩いて……

日が暮れ始めた頃、ようやく路面電車の線路を見つけた。だが、さっき俺が乗ってきた路線のものかどうかは分からない。そもそも路線が幾つあるのかも知らんし。

だが、

（これに沿って歩けば、戻れるかも……）

不安だが、他に何の手がかりもないんだ。これに賭けるしかない。

線路沿いを歩き始めた俺を、暗くなってきたので点灯を始めた頭上のネオンサイン——色とりどりの看板が、照らしていた。

……歩き疲れた。

もう夜の10時だが、俺はまだ自分がどこにいるのか分からない状態だ。

さっきの路線を歩いたのは、間違った判断だったかもしれない。むしろ元いた所からは遠ざかってしまったようにも思える。

（どこだ、ここは……）

地下鉄の駅があり、そこの表示によれば『北角』という所らしい。

だがそれが香港島のどこにあるのか、土地勘のない俺には分からない。

「……」

腹が、減った。

かた焼きそば、イメージと違ったからって残すんじゃなかったぜ。
俺の食べたかったラーメンを始め、ローストチキンや饅頭、果物――道ばたではありとあらゆる食べ物が売り買いされて、うまそうなニオイを町中に充満させている。
だが、こんなに沢山、こんなに目の前に食い物があるのに……
金を持ってない俺は、何も食えない。
倒れそうだ。
（ホントなら今ごろ、アリアのおごりで美味いモノを食べてたハズなのに……）
飛行機の中での約束を思い出しつつ、俺は溜息をつく。
完全に、すっぽかした形になったな。
怒ってるだろうなぁー……アリア。
などと道ばたで恐怖に打ち震える俺は、せわしなく歩く通行人の皆さんのジャマっぽいので……通りを少し離れ、裏路地に入った。
表通りは比較的キレイな北角だが、一歩道を折れ曲がると――
そこは汚くて、貧しいムードの路地。
通りは狭く、舗装がデコボコだ。人々がビルに住んでるのは同じだが、建物はほとんど朽ち果てている。剥き出しのコンクリートが黒ずんでて、あちこち窓ガラスも割れており、建物の中には裸電球があったりなかったりだ。

「……」

大通りを観光したり、駅中で飲茶を楽しんでた時には、分からなかったが……

すごく……貧富の差が、あるんだな。香港には。

アリアがいたような豪華なホテルがあり、高級なペントハウスに住む金持ちがいて——

一方では、こんな下町以下の所で暮らしてる人々がいるのか。

(まあ、俺は一文無しだからそれ以下なんだけどな)

とりあえず往来はほとんど無いので、俺はベコベコの鉄板みたいな壁ぎわに座り込む。

腹が減って、もう歩けん。目が回ってきたぜ。

しかも、昼間は暖かかったが……夜はそれなりに寒いな。冷えてきた。

そういや12月下旬だったんだよ。今は。

「……不幸だ……不幸すぎる」

疲れた両脚を抱えてうなだれつつ、俺は——今の自分の独り言が、間違っていると思い至る。

これは、運の悪さじゃない。

俺の弱さ、不甲斐なさが招いた事なんだ。

日本で、俺は……ちょっとばかり、強くなったつもりでいた。

だがそれは戦闘の話。それで調子に乗って敵地に攻めてきて、観光地を歩けたぐらいで

余裕ぶっこいてたら——ご覧の有様。戦う前に、倒れつつあるよ。
俺は……強いか？
外国語が喋れないだけじゃなくて、学も無い。修学旅行も借りた金で来たぐらい赤貧だ。
この危機を切り抜ける何かの取り柄もない。何もない。戦うこと以外には。
俺は、強くない。
人間の総合的な能力で言えば、弱いんだ。とても。
それが図らずも今、痛いほど分かってしまった。
（……そんな俺でいいのか？　これからも、ずっと……）
自分の『弱さ』。
うーん。深刻な問題に気づいてしまったな。これは。
しかし今は、それを思い悩む元気もねえや。
（１００万ドルの夜景、楽しみにしてたのにな……）
ここからじゃ、裸電球ぐらいしか見えねー。
ていうかどうする。今夜。
どこか安宿に泊まるつもりだったが、文無しじゃ土間も貸してもらえんぞ。
しょうがない。このままここで座って寝ちまおう。
などと、ウトウトしていたら……

「——喂(こら)！　唔好坐喺我門口前面(うちのドアの前に座り込むな)！」
誰(だれ)かに怒鳴(どな)られた。中国語で。
顔を上げると、白い制服姿の学生——
腰に手を当てた中国人の女の子が、切れ長の目で俺(おれ)を見下ろしている。
数珠(じゅず)みたいな形のテールを左右にピョコンと出した変則ツインテールの、ほっそりしたかわいい女の子だが……
なんか、怒ってるぞ。こっちを見て。
だが何に怒ってるのかよく分からん。
「……？」
という顔をする俺に——
女の子も眉(まゆ)を寄せ、「？」という顔をした。
本人はハッキリと要求を言ったのに、俺がそれを理解してないからだな。
俺がそう思うのと同時に、向こうも言葉が通じてない事を悟ったようで——
「……日本人(にっぽんじん)？」
への字口をして、桃色の唇から発したのは——日本語……！
聞き間違いじゃない。日本語だ。
訛(なまり)ってはいるが、この子は喋(しゃべ)れるみたいだぞ。日本語を。

「そ、そうなんだ。その、金も携帯も、スられちまって……言葉も通じなくて……」
そう言うと同時に、グゥー……俺の腹が、情けない音を上げた。
「マヌケな日本人もいたもんだなー」
女の子が鼻から溜息をつくと、向かいのビルの窓から赤ちゃんを背負ったオバチャンが顔を出してきて——彼女と中国語で、何やら会話した。
オバチャンは俺をバカにしたように一笑いしてから、建物の内部に声を掛ける。
すると、建物と建物の隙間から……
ヒビをテープで修理した丸サングラスをかけ、煙管を咥えたお爺ちゃんが出てきた。
ガリガリの体に麻ズボンと半袖シャツを着た老人は、ぐいっ。
いきなり俺の服を掴んで立ち上がらせ、路地のもう一本向こう側へ連れていこうとする。
な、何やら大声で喋ってるが……分からん。中国語だし。
ていうか怖いぞこれは。何をされるんだ俺。
しかし突き飛ばすワケにもいかん。相手はお年寄りだし。
後手に回った俺を囲むように——ビルの谷間や扉から、人が何人も出てきた。腹巻きとステテコみたいな姿でビール瓶を持った、咥え煙草のオヤジ。伸びきったシャツを着た、丸刈りの少年。小さいサロンパスみたいなのを首に貼った、お婆ちゃん。みんなニヤニヤ笑って、口々に何か喋ってる。

やばい……やばい、かもしれん。
——だが大丈夫。
何もかもスられた俺だが、腰には最後の切り札——
拳銃がある。
最悪の最悪、威嚇射撃の数発もブッ放せば逃げられるハズだ……！

元々悪い目つきをより鋭くした俺が連れ込まれた先は、さっきの裏路地のすぐそば……というか同じビルの反対側だった。
通りに面したそこでは、衣服や魚を売る人々の元気な掛け声がまだ続いている。
俺はそこの一角、店舗らしき空間に押し込まれた。
排気ガスで薄灰色に汚れた透明ビニールシートが扉代わりの、何だか分からない店だ。
「……？」
警戒しつつ、中を見回すと——木のテーブルが幾つもある。その周囲のイスは、ガタのきてるパイプ椅子や何段か重ねたスーパーのカゴだ。切った丸太もイスにされてる。
そこに座った客たちが、ワイワイと騒いでいる……
どうやら、メシ屋らしい。
席の合間を、なぜか常時半ギレのオバサンが炒飯やらインスタント麺やらを運んでいく。

オジサンたちがワイワイ騒ぎながらそれを食べ、煙草をふかし、酒を飲んでいる。でかい牌で麻雀をやってる人たちもいる。

ここは……

高1の頃、平賀さんの実家の工房に初代ベレッタ・キンジモデルを受け取りに行った、東京の下町にあったみたいなムードの店だ。あそこよりずっと貧しげだが。

で、割れサングラスの爺ちゃんが俺を指して大声で何か言うと、みんなが俺を見て……

……わーっはっはっは！　と、大笑いしてる。

な、何だ。状況が全然読めん。

「？　？　？」

俺がキョロキョロしてると、さっきの変則ツインテールの女の子が店の奥から出てきた。

そして俺に、

「ん」

と、油で少しベタついた深皿を俺に押しつけてムリヤリ持たせる。

すると——

店内の人々が集まってきて……

自分たちの皿から、少しずつ食い物を入れ始めた。俺の皿に。

具のない饅頭をちぎったかけら。目玉焼きの切れ端。スプーン何杯かのタイ米。小さな

ソーセージ。

みんな俺の目を見ず、何事か呟いて皿に食い物を入れると……

照れて逃げるように、自分の席へと戻っていく。

……な、なんだ。押し売りか？

「お、おいっ。俺は金を持ってないんだよ。お、お前っ、通訳してくれ。って、おい……ノーマネー、なんだってば」

と、俺が例の女の子を介して断るヒマも無い間に、皿には食べきれないほどの食べ物が盛られてしまった。

言うなれば、深皿ごちゃ混ぜ丼。

もう中華料理ですらなく、リッツ・カールトンのティーセットや添好運の点心飲茶とはえらい違いだが……

腹が減ってる俺には、たまらなく美味そうに見える。

「『お前』じゃなくて院美詩。はいスプーン。その皿と一緒に、後でそこの流しで自分で洗いなさいよ？」

などと、女の子――ユアンちゃん？　がスプーンを俺の皿にぐっさり刺したので、

「いや、だから、俺は金を……」

弱り切った俺は、唾を飲みつつもそう言う。

ユアンは割れサングラスのお爺ちゃんを手で示し、
「珍さんが『日本人が金をスられて一文無しになった。悪いことしたのが香港人だから、誇り高き香港人は助けろ』って言ったのよ。それでなくても――みんな、腹ペコの辛さは知ってるから。あんたに『あげる』って言いながら、食べ物を入れてくれたのよ」
と、さっきの流れを説明してくれた。
（……っ……）
失礼ながら……みんな、自分たちこそ食うのに困ってるような人々っぽいのに……
俺を、助けてくれるのか。
こんなに、むしろ腹いっぱいになりそうなぐらい食べ物をくれて。
なんてこった。これは……恥ずかしいな。威嚇射撃がどうのとか考えてた自分が。
「あ、ありがとう……」
俺は感謝の気持ちで彼らを見回すが、誰も彼もニヤニヤしつつ俺から目を逸らすようにして合わせない。
日本式の礼でいいかちょっと迷ったが、俺は彼らに頭を下げ――
店の片隅にあった足の折れたイスに座って、ごちゃ混ぜ丼をありがたくいただいた。
「……」
みんなそっけなくて、人をバカにしたように笑うし、強引だし、愛想ってものがまるで

無いが……やってくれてる事が、優しい。
内側に気前のよさというか、義侠心を秘めてる。そういう民族性なのかもしれない。
（ここの人たちは全員、ツンデレ族なのかな）
などと考えながら丼を平らげ、腹いっぱいになった俺の前に……
「――日本人だってのは、すぐ分かったわ。アニメキャラみたいな制服着てるから」
と、さっきの少女・ユアンが自分の食事を持って相席してくる。
「あんた、1人で来たの？」
「いや……ICCっていうビルに仲間がいるんだ。行き方を教えてくれないか」
「ICC？　ここからだとトラムとフェリーを乗り継いで、後はバスね。でも全部、もう動いてないわよ？　始発までどうするの。寝床あるの？」
「それはその……野宿だ」
「あのねぇ。どこの街だって夜は危ないのよ？　しょうがないなあ」
世間慣れしてない俺に細くて形のいい眉を寄せたユアンは、
「じゃああたしの家に泊めてあげるから。明るくなってから動きなさいよ」
などと、この子も親切な提案をしてくれる。
「いや、そんな。女子の家になんて……」
「あたしは男より強いから大丈夫。ヘンな事しようとしたら、窓から外に放り投げるから。

ちなみにあたしの部屋は5階」
雲呑の和え麺を食べつつ、ユアンは普段アリアが俺にやってるようなバイオレンス行為を語る。どこの国でも、女は怖いもんだなあ。
「――その代わり、起きてられるだけ起きて、あたしとお喋りして。日本語で。あたし、日本に留学するのが夢なの。あたしの日本語、発音がヘンなの分かるでしょ？」
な……なるほど。そういう形で恩返しができるんなら、俺としても嬉しい。
自慢じゃないが、俺は日本語だけはできるからな。
いやほんと、自慢にならんが。

さっき俺が座り込んで背もたれにしていたベコベコの鉄板みたいな壁は、実は扉だった。
OZONEとは偉い違いだが、これもある種の隠し扉だな。
ユアンの部屋は、その内側の階段の先。
どうりでさっき、それを塞いでた俺を叱ったワケだ。
なぜかツインテールを解きつつの彼女に続き、コンクリート剥き出し・貼り紙だらけの細階段を上っていると……
「ここのお湯、使っていいのは1日3分だけだから。あたしが2分、あんた1分よ」
などと言いつつ、いきなりユアンは中2階にある踊り場の奥に引っ込んだ。

（……何の話だ？）

と、L字形に折れ曲がっているその空間を角から覗くと、

「――！」

み、見ちまった！　背後からだけど！

狭い通路を折れた先は、1m四方ぐらいでタイル張りの――日本の海水浴場も顔負けの、超小型シャワールームになっていたのだ。

そこでユアンは、何の警告もなく制服を脱いでおり……

俺は彼女の白い下着のストラップと、背中の肌を見てしまったのだ。思いっきり。

（イ、探偵科で忍び足を習っててよかったぜ……！）

即座に後退したが、見たのを気づかれてたら窓から捨てられてた。

そして靴と制服と、し、下着を入れた籐編みの籠がこっちへ滑り出てきて――

「さて、お喋り始めようか。あたしの言葉が間違ってる時は、ちゃんと教えてね？」

しゃーっ、とシャワー音が始まってしまう。

ゆ、湯気がこっちに回り込んできて――石鹸とシャンプーのニオイもしてきた。

目には見えずとも、まるで一緒にフロに入ってるみたいな距離感だぞ。これ。

3歩歩けば裸がそこにある。彼女の体から弾けた湯の滴がぴょんぴょん見える。

しかし会話を要求されている以上、逃走するワケにもいかん。

「あっそうだ。日本といえば、日本から香港に今、超人が来てるらしいわよ」
「ちょ、超人……？」
「あたしの学校は、身よしの無い……身よるの無い？　えっと……」
「身寄りのない、か？」
「そう、それ。みなしごない女の子が通う所でね。学費がタダなかわりに、ちょっとした仕事をするの。今はその超人を見つけたら、学校に通報しろって言われてるわ」
「お尋ね者か何かが香港に来てるのか、日本から。それは……困った話だな。同じ日本人として、謝るよ」
「アンダーグラウンドでは『不可能を可能にする男』って二つ名が最近ついたみたいよ。どんなに追い詰められても、ありえない切り抜け方で敵を返り討ちにするんだって。あと、写真を見たクラスメートが言ってたけど……ちょっと、かっこいいんだってさ」
ユアンは、かっこいい男の話という事でちょっとウキウキした声になってる。
やっぱり女の子だな。
「へえ……そんなヤツがいるのか」
「まあ、あんたじゃないわね。間違っても」
にこ、と笑って顔だけ角から出してきたユアンは、きゅっきゅ。シャワーを止めて——また引っ込んで、ごそごそ。天井裏からタオルを取って、体を拭いてるようだ。

そして、ぺた、ぺた。
出てきちゃったよ！　バスタオルを体に巻いただけの姿で！
「……っ……っ！」
後退しようとして上り階段に足を引っかけ、たたらを踏む俺は――
「ほら、あと1分よ。セッケン置いといたからね」
ばふ、と頭に新しい籠を被せられた。虚無僧みたいに。

ユアンの部屋は、日本で言えば二畳間ぐらい。
2人で入ると激狭だったが、そこはやっぱり女の子の部屋で……
壁にファンシーなキーホルダーが鈴なりになってたり、タオルケットがピンクだったり、鏡だけは割とちゃんとした物だったりしてる。
「足を折り曲げれば、床でも横になれるでしょ」
と言われて横になった俺を、パジャマ姿のユアンが跨いでベッドに上がっていく。
（……うう……）
外で寝るより安全なのは確かだが、ここもヒス的な意味では有害空間だ。
望月萌の部屋に上げてもらった時と同じように、まず女子特有の――甘酸っぱいような、やたらいいニオイが充満してる。これは世界共通の現象だったのか。

しかもこの部屋は狭いから、女の子フェロモンの濃縮パック状態。
トドメに、お風呂上がりのユアン本体からほこほこ上がる香りが……な、生々しすぎる。
――斬撃や銃撃は、避けられる。
しかし、人はニオイを避ける事ができないのである。
しかも俺は生まれつき嗅覚が敏感で、バスカービルの女子どもだってニオイで嗅ぎ分けられる能力の持ち主だ。そこだけはウワサの超人くんにも勝てる自信がある。
とはいえ、鼻にメンソレを塗ったり室内にファブリーズを撒き散らすワケにもいかん。
どっちも持ってないし、失礼だし。
「床、固くて痛いでしょ。マクラだけは貸してあげるわ」
また殺人的に馨しいものを渡してくるし……！
寝返りでも打って、思いっきり鼻を埋めちゃったりしたら――俺、ヒスって国際問題を起こしかねんぞ！
しかし「女臭いからいらない」などと断るのもアレだ。実際、床も固い。
よし、もうこうなったら口で息しよう。鼻からの吸気を停止する。武偵高で体育の後の女子たちが部屋に押しかけてきた日と同じ作戦だ。
などと目に見えぬ敵との激闘を繰り広げる俺に、ユアンは、
「ねえ、『おにぎり』と『おむすび』はどう違うの？」「『河童』って何？」「『新発売』っ

て、発売後いつまで使っていい言葉なの？」

電気を消した後も、日本語について比較的高度なことを聞いてくる。

俺は半徹で、その1つ1つに――

「同じものだ。『おむすび』は『斬り』という音を忌み嫌った言葉だ」「俺は会った事はないが、日本土着の妖怪。全身緑色で、頭に皿があって、キュウリが好物」「定義は無い。かつて、ケンちゃんラーメンなる商品は8年以上『新発売』だったらしい」

などと答えつつ……彼女の学習意欲の強さに、驚かされた。

経済発展のまっただ中にある中国では、学ぶことが立身出世に、つまり豊かさに繋がるというイメージが生きているんだろう。

実際、彼女だって将来、日本との商売で成功すれば一攫千金も狙えるかもしれない。

そうすれば、貧困から抜け出すことだってきっとできるのだ。

（頑張れよ、ユアン）

学ぶ……勉強のニガテな俺も、彼女のガッツを見習わないといけないな。

ここのみんなとはレベルが違うが、金欠でいつも喘いでるワケだし。

# 3弾　猴と孫と

翌朝――

俺は昨晩の飯の恩義に報いるため、この空へ伸びる香港版の長屋――ビルの人々の役に立つ何かをしようと早起きした。いいニオイの缶詰の中で、あまり眠れなかったしな。

――ビルから出ると、早朝から働いてる人はいっぱいいた。

昨夜どの人が食べ物を分けてくれたのか、もう分からなかったので……俺は誰彼構わず、手伝えそうな仕事を何でも手伝った。お爺ちゃんが台車に米袋を積み上げるのを助けたり、水汲みをしてたオバチャンがしんどそうだったのでそのバケツを運んだり、皿を洗ったり、逃げたニワトリをダッシュで捕獲したり、やれることは何でもやった。

言葉は通じなかったが、気づけば……

みんな警戒心が解けたのか、普通に笑顔を向けてくれるようになってきた。

そうこうしてると、どうやらここの長老的存在らしい割れサングラスのお爺ちゃん――珍さんがやってきて……今度は俺を、ビルの向こうにある店に連れて行った。

その店からはイスとテーブルが路上にハミ出ており、建設中の高速道路が屋根がわりになってる。

言わばオープンカフェ状態だが……そんな品の良いもんじゃなくて屋台に近い。
大勢の地元民で賑わうそこでは、ユアンも白い制服姿でお粥を食べていて……
「あんた、このビル中の話題になってるわよ。喋れないけど、働き者の男がいるって」
レンゲを手に、ちょっと呆れ気味で俺に話しかけてきた。
だが俺はそれに生返事しか返せずに、そこで見えた光景に目をこらす。
建造中の高速道路の先端は、海の上を掠めるようにカーブして伸びており――
――その隙間から海峡、ヴィクトリア湾が見えたのだ。
その対岸、遠くに霞んで天を衝くのは、
……ＩＣＣビル……！
「あそこでしょ、アンタの仲間がいるの」
どうやら、ユアンが俺の事を珍さんに説明してくれたらしい。
（ここからならＩＣＣビルが見えるから、連れてきてくれたのか）
横の珍さんは、『どうよ？』って感じにサングラスの奥の小さな目を細めてる。
そして何やら言いつつ、俺に中国語の新聞を渡してきた。
「……？」
「『これ以上物を盗まれないように、これを読むフリしながら歩け』だって」
な、なるほど。香港の新聞を持っていれば香港人だと思われて、もう観光客狙いのスリ

には遭わずに済むってワケか。

俺が新聞を受け取ると、珍さんは口笛を吹きながら去っていき……

その直後に気づいたが、新聞には20香港ドル札が挟んであった。

日本円にして２００円ぐらいだ。

これがあれば……トラムで移動して、フェリーで海峡を渡る事もできる。

「もう。珍さんはお人好しだなぁ」

ユアンは鼻で溜息をついて立ち上がり、

「じゃ、あたし学校行くから。それ食べたらＩＣＣに帰ることね。目で見えるんだから、足で歩いたって半日もあれば着くでしょ。あと……さっきこの粥品専家の店主さんに通訳頼まれたんだけど、正鯪魚球粥。あんたに、お礼だって」

さっき俺が水汲みを手伝ったオバチャンが、お粥を運んできてくれるのだった。

何度も礼を言う俺にユアンは「お粥が冷めちゃうよ、早く食べなさい」と気恥ずかしそうに去っていき……

彼女に名乗ってすらいなかった俺は、その事を後悔しながらも――

（歩くにせよ何にせよ、食べておかないとＩＣＣビルまで辿り着けないからな）

ガヤガヤと中国語の飛び交う店内で、もらった朝粥を食べていた。

ここは人気のある粥屋らしく、客は次々やって来る。そして何も言わず俺と相席になり、食ったらすぐ去っていく。人口過密都市・香港では、相席は当たり前らしい。

俺がもらった、正綾（シェンリン）ナントカ粥は――お椀（わん）いっぱいの粥に川魚のつみれが入っており、味の第一印象は淡泊（たんぱく）。

だが他（ほか）の客の見よう見まねで、つけ合わせの刻みショウガと醤油（しょうゆ）を適時（てきじ）ぶち込みながら食べると……これがやたら美味（うま）い。

（こんなに美味い粥は、食べたことがないな……！）

俺は椀を思いっきり持ち上げて、ズズーッとすすり……

とん。椀をテーブルに置く。

その時正面でも、相席になった少女が俺と同じポーズで粥をすすっており……

とん。俺と全く同時に、椀をテーブルに置いた。

その少女と、目が、合う。

「――！」

俺は目を見開いた。

「……！」

向こうもクリクリしたお目々を見開いて、ビックリしている。

こ……この、地面につくほど長い黒髪の、小5ぐらいの少女は――

（――猴……ッ！）

あまりの偶然に見間違いかと思ったが、間違いない。

コイツは――鏡高組の屋上で俺の弟を撃った藍幇の戦士。猴だ！

俺と猴はお互い1秒、2秒、硬直して見つめ合ってしまった後――

「――猴ッ！」

「ちがうですちがうですそんなことないですきゃあああ！」

どたーん！

逃げようとしたらしい猴が店のスツールごと、真後ろに倒れた。

ヘソ丸出しの名古屋武偵女子高のカットオフ・セーラー、その超・超ミニのスカートがひっくり返り――ベルトのように腰に巻いてたシッポが、にょろんと動いたのも見える。

違いますだと？　違うワケがねーだろッ。

あの夜とは少し様子が違うものの、これは猴だ。間違いないッ。

世の中にシッポの生えた女がそうそう居てたまるか。お前の他には玉藻ぐらいのもんだ。

――だんっ！

香港映画のように俺がテーブルを跳び越えて迫ると、猴は身をよじってそれを躱す。

そして、パシッ！

絶妙なタイミングで、俺の着地ぎわの足をシッポで払った。

「――うッ！」

シ、シッポで来るとは。完全に想定外だったこの足払いに、俺は転倒し――

「ひゃあああああぁああ！」

奇声を上げた猴が、他の客を押しのけて高速道路の下から逃げていく。

なんて身のこなしだ……！　本当にサルみたいなすばしっこさだぞ。

猴は店外に駐輪していた補助輪つき自転車に跨ると、ぎこぎこぎこーっ！　チェーンをちぎりそうな勢いでそれをこいで走り出し、がすんっ！　いきなり10ｍぐらい先の標識にぶつかる単独事故を起こし、自転車を捨てて走り出した。なぜ乗ったし。

それで俺が粥屋から出る時間は稼げたものの――

肩にナナメがけしていたポシェットを跳ねさせつつ、猴は、どんどん逃げる。

速い。諸手を挙げて逃げるという、全力疾走に適さない姿勢で走ってるってのに。

しかも相手には地の利がある。ビル群の織りなす複雑な路地をどんどん折れて走るから、見失わないようにするのが精いっぱいだ。

だが猴は余計で見え見えなフェイントが多いから、距離は詰まったり伸びたり。

言わば一進一退の追撃になった。

――猴は道路の先で走りながら振り返り、俺がついてきてるのを見て目を丸くし、

「ぴきゃあああ！」

などとまた奇声を上げて、坂の上にある公園の方へ走り込んでいく。

その公園は、壁や木の多い——香港の愛鳥家たちが集まる場所だった。

コロコロと美しい声で鳴く小鳥を入れた釣り鐘形の鳥かごが、そこらじゅうに吊り下げられている。その視界の悪さを活かし、猴は公園の奥、鳥市場の方に逃げていく。

（——逃がすかよッ！）

ここで会ったが百年目だ。

こちとらお前を追って、何千kmも飛んできたんだからなっ。

それに一向に攻撃してくる素振りがない辺り、まだどこか調子が悪いと見て間違いないだろう。あれを捕らえれば、迷子になった俺の汚名だって返上できるぞ。

だが、鳥市場の狭い路地に入った辺りで……

「……ッ……」

俺は見失ってしまった。猴を。

だが、焦るな。ここは丘の上。

向こうだって走り出て逃げれば、上から背中を見られるリスクがある。

だから、まだ猴は近くに潜んでいて——

俺が退散するのを待っている可能性が高い。

「……」

俺は上着の中に手を入れ、ベレッタを密かに抜き……目で猴を捜しつつ、鳥市場を進む。

周囲には様々な鳥を入れた籠が、何十、何百と吊り下げられている。

むせかえるような、鳥のニオイ。

毒々しい色をした鸚鵡が、俺を見て首を傾げる。パンダみたいな色柄のカササギが歌う。

1つの籠に何羽も入れられたインコたちが踊り、野良スズメが縦横ナナメに飛ぶ。

……チュンチュンチュン。クワックワックワッ……

絶えることなく四方八方から聞こえてくる、鳥たちの声。

足音は双方、これに紛れて聞き取れないな。

そして、そこは気持ち悪いからあまり見ないだろうと思ったのか……

新鮮な鳥のエサ、つまり生きた芋虫やカエルを売ってる所に――

「……っ……」

いた。猴が。

ロングの黒髪を地べたに広げて机の向こうにしゃがみ、頭を上3分の1ほど――目まで出して、こっちを盗み見てる。

俺は気づいていないフリをして、じりじりと距離を詰めていき……

「――猴！」

バッ！
7mの拳銃交戦距離でベレッタを向けると、ぽいっ！
猴はこっちに、生きたバッタの詰まった透明ビニール袋を投げつけてきた。キモッ！
「ちょっ……！」
ついバッタ袋を躱してしまってから顔を上げると、もう猴は市場から駆け出ており——
裏にあった寺院へ逃げ込もうとして、その手前で「ワンッ！」と野良犬に吠えられた。
「いっきゃあああ！」
甲高い悲鳴を上げた猴は、べちゃ。
持っていたポシェットに犬が食らいついたもんだから、その場にスッ転んでる。
「やめてやめてやーめーてー！」
そしてすっかり腰が抜けた様子で伏せてしまい、俺から逃げることも忘れて両手で頭を守ってる。あのアホほど短いスカートで、こっちに尻を向けた状態で。
あーあ……
すっかり怯えて、シッポもくるるんと股の間に巻き込んじまってるよ。猴。
どうも……犬が、大のニガテらしい。
犬猿の仲とは言うが、猿が一方的に負けてる状態だ。あそこでは。

ジーサードを一撃で斃したのに野良犬に負ける、強いのか弱いのか分からん猴に近づく俺は……

「――よし、動くな」

頭部側に回り込むようにして、銃口を向けた。

犬は火薬のニオイを嫌うので、俺から逃げていき――

ようやく、猴は涙目で顔を上げた。四つんばいのまま。

「目をこっちに向けるな。レーザーを準備していると判断したら、その時点で射殺する。日本の武偵法が禁じているのは、殺人だ。お前は人間じゃないんだろ。おとなしく両手を挙げて――」

殺すつもりは無かったが、また逃げられると厄介なのでフカシで脅してたら……

――ぱかーん！

後ろから、頭を殴られた。棒状の物で。

「痛っ！」

振り返ると、うおっ、まぶしっ！

背後の寺からツルツル頭のお坊さんが出てきており、杖を手に何やら怒鳴ってきてる。

中国語なのでよく分からんが、怒られてる。俺。また。

「あっ……」

今度は、分かった。
お坊さんは俺の銃を指さしてる。寺で武器を出すなって意味だ。
寺や神社、教会は、聖域。
どんな悪党が逃げ込もうと、ドンパチやっていい場所じゃない。
それは人として守るべき、暗黙のルールだ。世界共通の。
京都でも、三十三間堂にレキと入ろうとした時は武器を預けさせられたしな。
ていうか、それでこっちへ逃げたんだな？　ズル賢い猿め。
「……おい、猴。お前には恨みがあるが……寺では戦わない。命拾いしたな」
俺は……ベレッタの撃鉄を戻し、ホルスターに収める。しょうがない。
ここで猴を弾いて、あとでバチが当たったりしてもイヤだしな。
ムスッとする俺に見下ろされた猴は、
「うぅ、ふぇ……」
超情けない声を上げて、さっき犬に噛みつかれたポシェットを抱き寄せた。
そしてその中身を見て、ぽた、ぽた。
涙を落としてる。
（何だ？）
……爆発物とかが入ってるんじゃないだろうな。それ。

と、武偵の習慣で、俺が中身を覗きこむと……
中にはボロボロに割れた乾麺が入っていた。元々はボールみたいに丸められた、黄色い細麺のカタマリだったようだ。タマゴ麺かな？
などと思ってると、
「ふ……ふえええぇぇぇぇ……うぇえぇぇん……」
な、泣き出した。
泣き出しちゃった。猴が。
で、お坊さんが俺を睨んでくる。『なに女の子を泣かせてるんだ』的な目で。
いや俺のせいじゃ……半分は、ないぞ。

猴は引きつけを起こしそうなほど号泣してたので、さすがに、かわいそうになった。
なのでお坊さんと一緒に日本語と中国語で宥めながら、寺院の中に連れていく。
中国の寺に入るのは初めてだが……日本とはあれこれ、様子が違うな。
まず目を引くのは、天井をビッシリと埋め尽くすように垂れ下がってる蜷局形の線香だ。
これは白雪のガイドブックで写真を見たが、燃え尽きた時に願いが叶うという物らしい。
お堂の奥に祀られている立像は……関羽、か？
日本では三国志の武将ってイメージだが、神様なのか。関羽。

その前にはビニール袋に入った果物や、現金に似せた紙の札束が供えられてある。
で、
「……ぐすっ……ぐすっ……」
そんなお堂の隅っこに体育座りした猴は、ポシェットを手に顔を伏せ、体育座りで泣き続けてる。
えーっと……どうしよう。これ。参ったな。
作戦通り藍幇、それも猴に遭遇したはしたが……
展開が想定外すぎて、対処のしようがないよ。
などと途方に暮れていると、ぐぐぅ……と、俺および猴の腹が同時に鳴った。
俺はまたも空腹を抱えている。それは猴も同じなんだろう。お互い朝食を中断して走り回ったからな。
ゲンナリしつつ、俺も猴の隣に座り込んで……頭の中で、この状況の整理を試みる。
「……」
だが、すぐ挫折した。
そりゃそうだ。謎が多すぎる。
まず猴は、ジーサードを撃った時の猴と印象が全く違う。あの時通じなかった日本語が通じるのも謎だ。タマゴ麺を抱えて走っていた謎……は割とどうでもいいが、事情聴取を

いろいろしないと分からない事だらけだ。
と……2人並んで腹をグーグー鳴らしながら座っていると……
さっきのお坊さんが、お供え物を回収しにきた。そしてガサガサとビニール袋を物色し、1房のバナナとお菓子の箱を出して持ってきてくれる。
で、それを俺に渡しながらゴニョゴニョ耳打ちしてきた。いや、だから中国語は分からないんだって。
でもまあ何となく言いたい事は伝わってきた。ナデナデしろ的なボディーランゲージで。
『泣いてる女の子を放っておくな、慰めろ』って事だなこれ。
お坊さんは去っていき、俺は……
「……おい、バナナもらったぞ」
と、バナナの房を猴に見せる。
すると猴は前髪の間からチラッとそれを見てきた。
……よし。泣き止んだみたいだぞ。食い物の力は絶大だな。
猿にはバナナの方が菓子より魅力的だろうと思ったが、正解だったようだ。
「腹減ってんだろ。俺もだけどな。分けて食うぞ」
「……あい」
あ、答えた。

俺が房からバナナをむしって渡すと、猴は素直に皮を剥いて……あーん、ぱく。
もぐもぐ。
ちっちゃなお口で咥えて、うまそうに食べてる。
やっぱりバナナが好物らしい。猴はすぐ食べ終えると、もう1本勝手に食べ始めた。
（やばい、猿が食い尽くす前に食べておかないと……）
と、俺も房から自分用に1本取る。
別に好きでも嫌いでもないが……バナナは消化しやすく、すぐエネルギーになる優秀なパワーフードの一つだ。と、強襲科で習った。だからプロレスラーがいっぱい食べるし、自然界でも怪力で有名なゴリラが食べている。
お寺で並んで座って猴とバナナを食うという、奇妙な絵面になりながら……
今朝の粥は美味かったなあ、などと食い物つながりでそれを思い出した俺は、
「……何やってたんだ、あそこで」
もう何から聞けばいいのか分からなかったので、そんな話を振ってみる。
「遠山こそ何やってたですか」
いきなり呼び捨てだし。
「俺は、その……どうでもいいだろそんな事は」
意気揚々と日本から攻めてきたけど、お金をスられて路頭に迷ってたヨン――なんて、

敵に言えるか。カッコつかなすぎる。

「質問返しするな。俺が質問してるんだ、今は」

「こ、猴は……ココにお使いを命じられて、金糸全蛋麺を買いに北角の店に来てたです。そこの店のじゃないとヤダとココが言うから、自転車で来てたです」

ちょっと喋り方はヘンだが……根は素直な子なのか、ちゃんと猴は回答した。

どうやらあのタマゴ麺を買いに、パシらされてたみたいだな。

（ていうか、藍幇のパシリなのかよ。猴……）

組織の命運を背負う戦士なのに、パシリ。

非合理的にも思えるが、俺もアリアによくパシらされてるから、合理的かもだ。かなめ風に言えば。

（……どこの組織でも、戦闘員ってのは偉くないのかもなぁ）

それに、コイツがパシらされてるのは分からんでもない。気が弱そうだもんな。中空知ほどじゃないけど。

ココみたいな押しの強いタイプに命令されたらイヤとは言えなさそうな、オドオドした性格をしてる。

だがそこが俺的には最も引っかかるので、

「ていうかお前、俺の弟を撃った時とだいぶノリが違うよな。日本語も喋れてるし」

率直に聞いてみると、猴は……

「猴は……猴は、死んでお詫びするより他にないです」

バナナを手に、また顔を伏せた。

「この寺を出たら、そこで射殺していいです。日本人は最後の最後まで諦めないですが、中国人は時がくればキッパリ諦めるです。遠山に捕まったからには、それが猴の時なのでしょう」

猴が泣きそうな鼻声になるので、お堂の奥からお坊さんが俺をまた睨んでくる。

「いや、その……さっき脅しはしたが……別に殺すほど怒ってるワケじゃない。泣くな。泣くなって」

「でも私は、あの夜、あなたの弟を殺した。殺したのは孫ですが、猴にはそれを止められなかった責めがあるです。孫は、あの男の闘気に触れて喜び、昂ぶり……そして撃った。今や……猴は、孫を止められないです。孫は恐ろしい女……猴は、孫が、怖い」

孫……猴……？　話は、よく分からんが……

ジーサードを殺したと誤解してるようではあるので、

「あー……一応、生きてる。うちの弟は」

一応、そこは教えておいた。

「えっ！　どう生き延びたですか！　如意棒で突かれたのに！」

猴はビックリして、くりっくりのお目々を見開いてきた。
びん、とオレンジ色のシッポも立ててる。
それで超ミニスカートの背面側が丸々ひっくり返ってるので、俺は目を逸らす。
「……企業秘密だ。一応お前と俺は敵同士だしな。ていうか、なんだその『孫』ってのは。孫悟空の孫か？　まさか、ココみたいに……お前も、そっくりさんが何人もいるとかいうトリックじゃないだろうな？」
このちびっ子も人海戦術家だったりすると面倒なので、その辺を尋ねると――
猴は、ふるふる。
首を横に振って、否定の仕草をした。
「猴と孫は、同じ体で、違う心の者です。異なる心が、体の中に2つある。普段は猴です。でも戦う時には孫が用いられる。こういうの、日本語で何と言えばいいのか……」
――二重人格者……
なのか。コイツ。
「……さもありなん、だぜ。前に戦ったブラドって奴もそうだったが、お前ら妖怪人間は社会に潜入するために別の人格を自ら作ったりするらしいからな」
俺が少し分かったような事を言うと、猴はまた、ふるふる。
長くツヤツヤした黒髪を揺らして、首を横に振った。

「猴は孫を作ってないです。昔々の皇帝が、倭――日本から来た巫女の秘術を使い、猴を石牢に3年閉じこめて、武神の心を猴の中に入れたです。それが孫です」

……人為的に、人格を付け足す術……ときたか。

そんなもの、一昔前の俺だったら『心理学的にありえん』と一笑に付してたところだ。

だが、今の俺は違う。

この半年、教科書や学術書を嘲笑うようなトンデモ体験に幾度も遭遇してきたからな。

――あってもおかしくない。

ここはそういう前提で、真剣に話を聞いておこう。

「……何のためにされたんだ、そんな事」

「皇帝が、神になろうとしたです。猴はその実験台だったです」

「実験……じゃあ、その皇帝もお前みたいになったのか？」

猴は、ふるふる。長い黒髪を揺らし、首を横に振った。

「――実験で、秘術に欠陥があるが分かったです。孫は猴の意志でのみ、出し入れできるべきだったですが……外部からも出し入れできたのです。藍幇は今、その方法を覚えた。『パトラの鍵』という埃及人の作った術がそれです」

話を、俺なりにまとめると……

・猴は人為的に造り出された二重人格者である。

・猴の中には、孫という人格がある。
・この猴は気の弱い女の子だが、あの孫はレーザーを放つ超人女。
・猴／孫の切り替えは、藍幇にも可能。その技術は『眷属』の同胞・パトラが供与したと推察される。

って、とこか。

「孫を出し入れされて人間に与するのは、約1400年前――三蔵法師玄奘さま以来です。玄奘さまは良い御方だったですが、藍幇は私利私欲に孫を使おうとしている。だから猴は……猴は……」

いま猴が言った三蔵法師とは、西遊記に出てくる僧侶の名前だ。

やっぱり孫悟空なんだなぁ。これが。

だが本人から話を聞く限り、お伽話とは微妙に違って……孫悟空ってのは、時の政権に造り出された人工超人だったようだ。今の米軍がやってる人工天才計画と同じような事を、中国は何千年も前にやってたって事か。それも猴みたいな、妖怪人間をベースに。

ていうか幾つなんだ、猴は。子供に見えるってのに。

玉藻同様、化生――妖怪族ってのは、体が成長しないのか？　誰かさんと同じだな。

（しかし……これは……）

元々対処しがたかった問題が、より対処しがたくなってきたな。

この目はジーサードを撃った。いずれ俺をも撃つかもしれない。
だが二重人格という病の構造上、猴に罪は無い。裁判所だって無罪を言い渡すだろう。
それを問答無用でボコってVサインするのは、ちょっと違う気がする。俺的に。
「お前――泣くぐらいなら、なんで藍幇なんかに従ってるんだよ」
困った俺が素朴な疑問をぶつけると、
「猴は……親兄弟もないです、お金も持ってないし、体はずっと童女のまま。この現代でどうやって生きていけばいいか、分からないのです。それを藍幇が助けてくれてるです。藍幇は金持ちのメンバーにお金で地位と名誉を売り――そのお金で身よりのない者を匿い、戸籍や教育を与え、いずれは仕事をくれる組織でもあるです。猴は、藍幇のおかげで現代社会に生きてられるです」
さらに問題がややこしくなってきたな。
ココが日本で悪さを働いた印象が強かったもんで、単純に極悪非道の組織だと思ってた藍幇だが……なんだよ。
無法者は無法者の集団でも、道義的には完全悪じゃねーじゃんか。
金で序列が買えるってシステムも、その金で恵まれない人を扶助するためっぽいし。
「……」
さて、どうしよう。

バナナを食い終わった俺は、後ろ頭を掻きつつ考える。
（極東戦役（FEW）の敵だと割り切って、ここで猴を捕縛して持ち帰ってもいいんだろうが……）
もし、猴が孫を出してきたら。
または、藍幇がパトラの鍵とやらを使って遠隔から孫を引き出せたら。
――俺は負けるだろう。孫には。
ヒステリアモードのジーサードでも勝てなかったんだ。素の俺が勝てるワケがない。
そんな爆弾みたいな少女を連れ回すのは、リスキーすぎる。
だから今ここでの猴逮捕案は、とりあえず廃案だ。
あーあ。戦うぞと息巻いて来たのに、何やってんだか。
「……どうしましょう、私たち」
俺同様、猴も今後の打ち手が思いつかなかったのか……
膝小僧を抱えて、そんな事を聞いてくる。
「うーん……そうだな……」
なので俺は……
「じゃあもうアレだ。上に聞くか。お互い」
極めて日本人的に、『会社に持ち帰って検討します』的な提案をすることにした。
「上？」

「お前が猴モードな以上、俺は戦うに戦えん。だから、とりあえず講和案を検討したい。俺とお前が会った事実は、バスカービルと藍幇――組織に報告して、お互いのメンバーにいろいろ意見を聞く。そして和睦の条件を持ち寄って会議するんだ」

「会議。話し合いですか。でも、決裂したら……」

「そしたら闘るさ。それが俺らの仕事だろ。だがその講和会議が上手くいくかもしれない。チャンスがあるんなら、フイにすることはないぜ。お前もそうだと思うが、俺も戦うのはあんまり好きじゃないんだ」

「ええーっ！」

「その反応ってことは俺の経歴を知ってるんだろうが、心の底から意外そうな顔をするな。失礼だぞ」

「あい……」

「つまり、俺とお前……というか、孫が戦う可能性は残ってる。だから俺らがどこに陣を敷いているとか、仲間の動きは教えない。猴も、藍幇のアジトの場所や動きを教えなくていい。俺もお前を尾けないから、お前も俺を尾けるな。俺たちは現状、敵対的でも友好的でもない関係って事だ」

「わ、分かりました」

などと、猴は素直にうなずいてる。

ので、

「よし。じゃあ……あと一つ、ちょっと付き合え」

俺は、ようやく立ち上がった。

猴は俺の提案に何やら感服したような顔をして、ひょこ、と立って横についてくる。

寺の奥からは、俺が猴を宥めるのに成功したと思ったらしい（実際そうだが）お坊さんが『よくやった』的にサムズアップしてくるのだった。

俺は猴を連れて、いったん北角の下町に戻り――

猴が買い物をしたという製麺店に行って、金糸全蛋麺なるボール形の乾麺を買った。

そしてそれを、猴のポシェットに入れてやる。

「と、遠山。どうしてこれを……猴にくれるですか」

「買って帰らないと、ココに怒られるんだろ」

余計な出費だったが、俺に追い回されたせいで猴が乾麺を失ったのは事実だからな。

それに……

猴が、かわいそうになったのもある。

彼女は、哀れだ。

元はただのおとなしい中国の妖怪だったんだろうが、人間に別人格をムリヤリ植え付け

られ……そっちの人格を利用されて、意にそぐわない戦いを強いられている。
俺も、ヒステリアモード――ある種の裏人格のせいで似たような日々を送っているから、同情してしまうんだ。猴には。
（あーあ……）
珍さんからもらった虎の子の20香港ドルだったが、これで残りは船賃だけになったよ。
トラムにも乗れないから、徒歩でフェリー乗り場まで行くしかないな。
だが、まあいいか。バナナパワーでなんとかなるさ。
「……遠山。あなたは強く、賢く、優しい人です」
乾麺を買ってもらった程度のことで猴は目に涙の膜を張り、俺を見上げてくるので……
「買いかぶるなよ。俺は自分の至らなさを実感してたとこなんだ。この香港で」
俺は気恥ずかしくなって、顔を逸らす。
すると――猴は、サッ……
「この麺をもらって、覚悟が決まりました」
その場に片膝をついて、跪いた。超ミニスカートなのに。見える、見えるって。
相手は小5ぐらいの少女とはいえ、俺はヒステリア的な警戒心で慌ててしまう。
しゃがんだ猴は俺を片手だけ拝むようにし、その手のひらにグーにしたもう片方の手を押しつけ、頭を垂れた。

これは――三国志の時代劇で見覚えがある。

中国の武将が、相手に深い敬意を示すポーズだ。

「これから言うはさっきの諦念とは違う、崇敬による言葉です。もし交渉が上手くいかず、また猴が孫にされて……遠山と戦う事態になったら、その時こそどうぞ殺してください。孫は、恋と戦を好む武神。遠山のような強い男には恋心を抱き、きっと初めのうち戯れて戦うことでしょう。そのスキに先手を取れば、殺せるハズです。孫を殺めるチャンスは、そこしかありません」

「いや、だから殺すの殺さないのって……さっきも言ったろ、俺はそんなつもりは――」

「『パトラの鍵』は孫の引き出し方が強すぎます。あれでは、猴は、孫を止められない」

「自分が言ってる事が分かってんのか、孫を殺すって事は猴――お前も死ぬって事だぞ」

「いいんです。猴は誇り高く生き、そして死にたい。恩があるとはいえ、もう人間に利用されて生きるはイヤなのです。何より……」

猴の最後の声は、少し低い。

一段階、よりシリアスになったムードだ。

なので俺は猴に向き直り、そこで目と目が合い――

「――あなたを、殺したくない」

この別れの刹那、最後の最後で戦慄した。

猴は今、明確に警告したのだ。
――殺さなければ、お前が死ぬぞ――と。
（猴……）
世界は、広い。
ただ強いだけの敵、ただ悪いだけの敵だけじゃない。
――こういう敵も、いるのか。

昼過ぎ、フェリーに乗って5分ほどの船旅をし、ヴィクトリア湾を渡って尖沙咀（チムサーチョイ）――
白雪（しらゆき）と観光した、賑（にぎ）やかな九龍（ガウロン）半島に戻る。
さっき寺院でもらった菓子（かし）はなんとロッテのトッポだったが、それは食べずに我慢した。
バスカービルの女子一同に会えたら、せめてものお詫（わ）びに渡そう。
箱には『PEPERO NUDE』とかヘンな名前が書いてあるから、ウケること間違いなしだ。
特にアリアにはいっぱいあげよう。ディナーの約束、すっぽかしちまったからな。
俺は開発地区の工事現場を縫（ぬ）うように歩き……
とうとう24時間ぶりにＩＣＣ、リッツ・カールトン・ホテルの地上出入口に辿（たど）り着いた。
おーおー、車寄せには相変わらずロールスロイスが停車してるよ。
同じ車でも、北角（ノースポイント）を往来してた大八車とはえらい違いだな。

とか思ってたら、その高級車のパワーウィンドーが下がり――

「――キンちゃん！」

白雪が窓から、貞子みたいに上半身を飛び出させてきた。

勢いよく出てきたもんだから、びったん！　と、一旦跳ね上がった両胸がドアの外側にぶつかってる。す、すげえもんを見ちまったな。帰ってくるなり。

ていうかドア開ければいいのに。

「よかった、よかった、よかったよぉ……！　昨日からずっと、みんなで捜索隊してたんだよー！」

ロールスロイスの窓から這い出てきた白雪は、たたたたっ、はしっ！

俺に駆け寄って、抱きついてきた。

「――もしキンちゃんが戻ってきた時のために順番で居残り係をしてて、その交代をしに戻ってきたところだったの！　そこで会えるなんて……運命！」

「いやまあ、その……済まなかった。携帯とサイフを盗まれちまって……」

俺は謝りつつ、いま衝撃的な乳芸を見せつけた巨大な胸を押しつけてくる白雪を微妙に押しのける。

「普段ならキンちゃんの行動や郵便物はかなめちゃんと協力してチェックしてたんだけど、旅先ではどうしても監視が甘くなっちゃって……ごめんね、ごめんね、ごめんねっ」

「……うん……ん？」

なんか今、発言の一部に問題があったような気がしたが――

俺がそれに気づく前に、白雪は「……!?」という顔をして、ふんふんふん。

ワンコみたいに俺のニオイを嗅ぎ始めた。なにその動き。

「誰か――女のニオイがするよキンちゃんっ……!?」

い、いたみたいだぞ……！

俺以外にも嗅覚に優れる人物が、バスカービルに。

ていうか女のニオイって。猴のことか？　もしくはユアン。

いや、ここは黙っておこう。やましいことはしてないし。

だが猴の話は、みんなが揃ってからにしよう。今したらヤバい直感がする。

「い、いろんな人間とすれ違ったからな。それより、みんなに報告したい事があるんだ」

ごまかしつつ、俺は白雪を連れてリッツ・カールトンに入っていく。

白雪はエレベーターに乗ってる間中、俺を発見した手柄に酔いしれてた。

「このあいだアリアに、極道さん達との戦いでキンちゃんの役に立てた事を自慢されたの。実家にも招待されたとか妄想じみた事も言ってたし、夜はキンちゃんと夕食会議するからジャマしないでとかいうメールも来てて――もう私、ガマンの限界だったけど――赤っ恥

だね、アリア。キンちゃんは来なかった。ふっふっふ。さすが愛人は不幸が似合うよ」

俺の右腕をしっかり両腕で抱き続ける白雪が、黒い笑みを浮かべてきた辺りで……

エレベーターは無事、103階のホテルロビーに着いた。

いやー怖かった。高層階まで上がる1分間耐久、黒雪をチラつかせる白雪と2人っきり。白雪モードならどんとこいだが、狭いエレベーターの中で黒化されたら……鬼道術解放からの力尽くで何されるか分かったもんじゃない。くわばらくわばら。

なんとか灰雪ぐらいの状態でこれをキープしつつ、118階のOZONE――

その司令部こと隠し部屋に入ると、

「――うぉっ！　キーくーん！」

本来アリア用の奥座で思いっきりくつろいで、机に足まで乗っけていた理子がこっちへ仔犬みたいにダッシュしてきた。

そして俺に飛びつこうとしてきたが、「たーっ！」と白雪がこれを迎撃する。

さりげなくやってたが、今のは伸ばした親指と人差し指の股で目隠しするように理子の顔面を叩く、虎口拳という古流武術の技。なんでそんなんできんの白雪。

「ふぐおっ！　目が、目があー！」

それは相手の眼球および眉間を瞼の上から同時に殴打するという、よい子は決してマネしちゃいけない荒技。理子は顔面を手で覆って悶え苦しんでいるが、ムスカの声マネする

余裕があるんだから大丈夫だろう。
「こういう時に感動で抱きついていいのは正妻だけです！　私とキンちゃんの絆の間には泥棒猫の入る隙間はありません！　ほらないでしょっ」
白雪は俺の右腕をぎゅぎゅうー！　と抱き、腕だけでなく両胸の谷間も活用して完全にホールドしてくる。
「ちょっ……！」
感触も見た目もとんでもなくヒステリア的な我が腕の危機に、俺は青ざめる。
む、むんにゅりと……！
セーラー服を押し上げる二つの球体の、なんという柔らかさッ……！
まるでつきたての餅に腕が絡め取られたようだ。
中華料理風に表記するなら『巨媚柔肉』『大双球餅』『白雪の雪見だいふく』等が適切であろう。って、最後のは日本のアイス菓子だ。テンパって脳が手に負えん状態になってきてるぞ俺。
などと迫り来るヒス化に俺が怯えていると――
「あるもんね！　分子レベルではありまくりだもんね！」
復活した理子が、わしっ！　と白雪の両胸を左右の手で思いっきり鷲づかみ。
双柔肉球を左右にオープンして、俺の腕と白雪の間にむりくり入ってこようとする。

対する白雪は「とおぉーっ！」と両手で万力みたいに自分の両胸を外側から挟み、その理子を押しだそうという構えに移行。

おかげでホールドが解けた俺の右腕は、雪見だいふく空間から脱出できた。

今や白雪は、単に理子の頭を胸で左右から押し潰そうとしている状態だ。理子は理子で顔が口元しか見えんが苦しいような気持ちいいような表情をしてる。ド変態だな。

といった、仲間内でぎゃいぎゃいケンカしてるいつもの光景に……俺は……

なんだか、一息つけた感じがした。

こんなんでホッとする自分の不幸さに涙が出そうではあるが、仲間の元に戻ってこれた事を実感できたからだ。

立ち関（？）から寝技に移行して上四方固めで圧力をかける白雪・ビクンビクンしてる理子というバスカービルほのぼの劇場からはこの辺で目を背けつつ――

どっかり、と、俺はイスに座って体を休めることにする。

傷1つ無い高級なテーブルには、俺を探す休憩に食べてたらしいジェムズのプチケーキ、ダロワイヨのマカロンなどが並んでる。

1個1個がヘタしたら何千円とかする、高級なお菓子ばっかりだ。

（ここにトッポを出したら、笑われるかな……ていうか、金持ちどもめ。水までエビアン飲みやがって。こちとら得体の知れない水道水を道ばたで飲んで歩いてきたんだぞ）

などと考えていると……

俺の左右に白雪・理子が休戦してちょんちょーんと座ってきた。揃って、笑顔で。

「はいどうぞ、醉貴妃（ジュイグアイフェイ）――疲れの取れる鉄観音茶ですよ。キンちゃんのお好みは、紅茶より中国茶かなって思って用意してもらったの」

白雪はお茶を淹（い）れてくれてからアリアに電話で自分の手柄（てがら）を報告し、

「ねーキーくん聞いて聞いて！　あのねあのね、理子さっきＩＣＣ探検してたんだけど、ビルの上にプールあったんだよ！　プールで抱っこしてよー。アリアが帰ってくる前に、一緒に入ろうよー」

理子はアホほどでかいペロペロキャンディーを咥（くわ）えつつ、二重（ふたえ）まぶたの大きなお目々を細めてニコニコしてくる。

ていうかお前。持ち場離れてプール探したりとか、ちゃんと俺を捜してなかったろ。

などとしばらく、白雪と理子に構われつつ休憩していたら……

「――!?」

突如、俺の背筋に悪寒（おかん）が走った。

（……こ、この殺気は……！）

ア、アリアだッ。

ごんごんごんごん……と、巨大な怒気が近づいてるのが本能で分かる。
いま俺たちは１１８階にいるんだが、いま70階あたりを巨大なオーラが上昇中。
80――90――き、来た……この階に、着いた……！
縦移動から横移動へ。ずんずんずん。歩行中。よくこんな事まで分かるな俺。
対アリア危機察知能力が優れてきたなこりゃ。でも逃げ場ないけど。
そして――ばばァァァーん!!
「――バカキンジぃぃぃぃ――――！」
隠し扉を諸手で開けたアリアのアニメ声が、ビリビリビリィぃぃぃッ！
室内の全分子を振動させる。
なお、その時の俺は（断ったのに）白雪に背後から肩を揉まれ、（よせっつったのに）理子が膝の上に座ってきて俺の首に腕をかけている状態。
俺自身はヒス的に困ってたものの、すでにＭＡＸなアリア様の怒りをリミットブレイクさせるのに十分すぎる『何様だよ』って姿でいた。
ちなみに気配がゼロだったのでそっちは見えてからやっと気づいたが、レキもアリアの横におり……冷たい目で俺を見てる。
そのレキが――ボクシングのレフェリーみたいに『ファイッ』って感じの手つきをした。
そこで処刑人モードのアリアが、ずか、ずか、ずかっ！

セーラー服のスカートを跳ねさせ、二丁拳銃をチラどころかモロに見せつつ、がしっ！
俺の髪を掴んで白雪・理子の間から引っこ抜いた。
ていうかレキ、人間らしさ出すところ間違ってるだろっ、アリアをけしかけるな！
まあ、お前も俺に怒ってるんだろうけどさ……！
元からツリ気味の目を一層ツリ上げたアリアは、俺を、
「――どこ行ってたのよ――――ッ！」
ぶうんっ！　ばしぃん！
デザイナーが見た目に面白く設計した、デコボコの木材で出来た壁にブン投げた。
――い、痛ぇッ……！　今ばっかりはそのデザイナーが恨めしいぜ。
「いや、その……俺は携帯もサイフもスられて、道に迷ってたんだよ……！」
壁際に座り込んだ俺がダメ亭主みたいに言い訳すると、
「迷う！　って！　何！」
ビキイッ！　額にD字形の血管を浮かべて仁王立ちしたアリアは、
「北が九龍で南が香港島！　その間にある狭い海峡がヴィクトリア・ハーバー！　こんな簡単な構造が何で分かんないのよ！　あんな世界一広くて複雑な東京で平然と暮らしてるくせに、なんでこんな狭い街で迷えるのよーッ！　このバカ！　どバカ！　どどバカ！」
ガミガミガミ！

「戻ってきたらきたで白雪と理子と、そんな、エ、エ、エッチ！　スケベ！　昼行灯！」

ガミガミガミガミ！

「キンジの……バカバカバカバカバカバカバカバカぁ――――――――っっっ！」

ぱかぽこぱかぽこ！

ぺけぽくぺけぽく！

アリアはハンマーパンチで脳天を、サッカーボールキックで側頭部を連打してくる。

「いたたたっ、おいよせやめろ！」

まるで少林寺で使われる木のダミー人間・木人を使った修行風景みたいだ。

だが俺は木人ではなく人間だ。ぽっすんぽっすんと大きなクッションで頭部をアリアにモグラ叩きされてる辺りで――むらむらっ、と、怒りが湧いてくる。

なんだよ……！

『心配したのよ』の一言があってもいいだろっ。白雪ほど過保護でなくても。

「――ここには脳みそが入ってるべきだけどッ！」

俺の頭を掴んで引き起こしたアリアは、プロレスみたいな動きで――

俺の背後に飛びつき、バックマウントを取ってきた。おんぶオバケ状態だ。

「あんたのは空っぽなんだろうから、地図とコンパスでも入れときなさいっ！」

アリアはさらに俺の両腕を後ろから引っ張り、両脚に両脚を絡めて、ぐりんっ！

後ろに転がり、俺をロメロ・スペシャルで吊り天井にする。
「おおーアリア！　パンツ丸見えだぁー！」
「女子に見られてもセェーフッ！」
などと理子とアリアがやいのやいの。
セレブなホテルのバーが、武偵高の教室みたいになっちまったよ……！
「――しかもお金までスられるとか、どこまでマヌケなの！　このマヌケ大魔王！」
「あーもう、うるせえッ！」
俺はここでとうとう逆ギレ。
白雪によるカットに助けられつつ、アリアのバリツ地獄から脱出する。
そして強襲科仕込みの回転受け身を取り、立ち上がった。
「金は――俺が両替した大部分は、そこのバッグに入ってるんだ！　確かに困ったが……俺の婆ちゃんが言ってた事だが、人間、盗むより盗まれる方がいいんだっ。盗みってのは人から盗まなきゃならんほど困ってる、かわいそうな人のする事で――」
「そういう発想が日本人的なのよアンタは！　ここは日本じゃないの！　世界には泥棒で生計立ててる人間なんかウジャウジャいるんだからね！」
口げんかになってきた瞬間を捉え、そのドロボーこと怪盗リュパンの曾孫・理子が、
「ん～～～～ふっふっふ……ちょっとぉ～～～～、待ってもらえますかァ～～～～？」

唐突にダミ声になりながら、ツーサイドアップのテールごと頭をフリフリし始めた。
「りこりんがぁ〜〜〜〜、質問してもぉ〜〜〜〜、いいですか〜？　んーふっふっふ……」
あー……古畑任三郎のマネか。
空気読めねーなコイツはコイツで。なんでここで古畑だよ。自由すぎる。
探偵科で流行ってたから俺は見たけど、他はみんな「？？？」って顔してるぞ。
だがそれは理子なりの作戦だったらしく、おかげでケンカのムードは一時中断となる。
そこは、助かったんだが……
「キーくんっ」
わざとらしく眉を寄せた理子が、おでこに当てていた手を俺に向ける。
「……何だよ」
「あなたは〜、テーブルのお菓子に手を付けてない。少なくとも何か食べましたね〜〜？
そしてどこかに泊まりもした。そのイスでも寝なかったし、汗のニオイもしないですもんねぇ。それどころか、女の子のニオイがしたんですよぉ〜〜〜〜」
「――理子ちゃんも嗅げたのっ!?　やっぱりしたよね！」
にわか名探偵・理子に、にわか名助手・白雪が加わってしまう。
や、やばい。俺、つるし上げされそうなムードになってきたぞこれ。
「いや、これはその……」

俺が否定できず、それこそ推理ドラマの犯人みたいに額に汗を浮かべていると――
「やっぱりねー！　理子は嗅げてないけど今のは誘導尋問！　ひっかけ問題でしたー！　そしてクンカクンカセンサーゆきちゃんからの証言も取れました。キーくん、香港美女のお家で楽しく一夜を過ごしてきたんだなぁー!?　いやーさすがだねこのジゴロは！」
理子は俺の背中をバンバン叩き、褒め称えてくるが……
「……ッ……！」
俺の目の前では、ごごごごごごごご……お……っ……！
「バカにつける薬は無いっていうけど、ホントみたいね……このむっつりスケベ……！」
アリアの闘気が、高まるッ……！
このＩＣＣビルの如く、天井知らずに……！
「まあまあ、むっつりスケベにはむっつりスケベなりの事情があったんだろうからさあ。旅行先で気が軽くなっちゃったんだよきっと。旅は人との触れ合い。さーて、キーくんはどこでどう、何人の女の子と触れ合ってきたのかなぁー？」
怒るアリア、レキの冷たい目、そして気がついたら白から黒に変化しようとしつつある白雪――にテンパってしまった俺は、
「いや別に、どっちとも、触れ合うような事はッ……！」
理子によって言葉巧みに、この一昼夜に『女』があった事を自白させられてしまう。

しかも2人という事までバレちまった。そこは完全に自爆で。

「やっほー！　聞かせて聞かせて！　理子に聞かせて！　キーくんの武勇伝！　年上!?　年下!?　それとも両方!?　巨乳!?　貧乳!?　コスプレ有り無し!?　きゃっほー！」

存在もしないお色気話をせがむ理子は、ぴょんぴょん跳んで俺の周囲を回るが――

て、てめえ……！

お前のスケベ心が今、そこの閻魔様にどれだけ燃料を与えてるか分かんねーのかよッ！

「あんたは……すぐ、そうやって女の橋を渡って生きる……ッ！」

閻魔様ことアリア様は、俺の死刑判決を確定させた顔で微妙に名言っぽいセリフ。

「ほんっっっとあんたは行く先々で女作るッ！　あーあーほんっとモテるわよねぇ！　女に困った事ないでしょーねー！　理子か白雪かどっちかと付き合っちゃえば!?」

あぁあぁあぁ……言ってる事がもう支離滅裂だ。アリア。

壊れ気味の笑顔になってるよ。

そして、

「撒餌作戦を立案したのは、あたしだったから――キンジがそれで、いなくなっちゃったから……昨日、あたしがどんな思いして、どんな思いして……！」

何やらそこに続けたかったらしい言葉を飲み込みながら、こみ上げてきた涙をこらえるような顔になった。

「その間に、あんたは！　あんたは！」
中国美女に囲まれてウハウハな俺の姿でも想像したのか、アリアはいつものオリジナル地団駄を踏み――
「もうあんたはクビ！　どうせ外に出したら女の子と遊んでばっかりなんだから！　この作戦には参加しなくてよし！　帰国までここでずっと正座してなさ――――い！」
――ジャキジャキ！　俺の予想通り、抜いた！
白銀と漆黒の、二丁拳銃を！
「――きゃー！」
「――ひょー！」
白雪と理子はテーブルの下に逃げ、レキは恒例の危機管理スキルでもう室外に避難済み。
「ア、アリア……ッ！」
俺はトッポを出し、アリアを宥めようとも思ったが――
出したトッポは、箱ごとひしゃげていた。
アリアに転がされた時に、自分のケツで潰してしまったらしい。
そのボロボロの箱と対比されるように、テーブルには豪華絢爛な洋菓子が並んでいる。
それを見た俺は急に何だか、みじめな気持ちになり……
そこから、改めて怒りが湧いてくるのを感じていた。

俺も俺で、感情が行ったり来たりだ。アリアに対してだけは、なんでか冷静になれない。

「俺は――」

そしてもうヤケになって、キッとアリアを睨み付けてしまう。

「――俺は海外なんか初めてなんだッ！　お前みたいな帰国子女とは違うんだよ！」

反抗的な声を上げ、トッポの箱を投げ捨てた俺に……アリアは少し、驚いてる。

アリアが俺をボコるのは日常茶飯事。

だがそんな時いつでも俺は――脱兎の如く逃げるか、なされるがままにボコられるかの二択。狼と羊の関係でやってきた。

それはアリアが強いから倍返しにされるとか、男が女にケンカで手を上げるのもどうかとか、怒るアリアも可愛いからとか、いろんな理由があるんだが……

事実上、俺は反撃しない。あんまり。

こういうマジギレをするのは5月に白雪のボディーガードをやったとき、方針の違いでケンカになった時以来かもしれない。

なのでアリアは――

「何よ……何よっ！」

いつもと違う俺の様子に、戸惑っている。

叫んでから、俺に、怒った理由の説明を無言で促すが――俺はそれを説明できない。

それは、自分が情けなくなるから。惨めになるからだ。

――アリアは優秀な人間だ。

戦闘力が高いというだけではない。勉強もできる。目の醒めるような美少女だ。語学に優れ、世界中の都市に土地勘もあるグローバルな人材。リアルに貴族で、俺みたいに金に困ることなんか一生ないだろう。

一方の俺は、ヒステリアモード時の曲芸ぐらいしか取り柄がない。

他は何もかもダメだ。それは自分でよく分かってる。頭やツラの悪さは言うに及ばず、海外に一歩出たら文字通り右も左も分からない。その海外にさえ借りた金で来たぐらいの貧乏人だ。

羽田からずっと、心の奥底に蓄積していくように意識させられてきた……

その、『格差』に――

俺は行き場のない、怒りを覚えたんだ。

俺とアリアには、差がある。ありすぎる。

それはきっと一生埋めることのできない、大きな差。

それが……悔しいというのとは、少し違う。

認めたくない感情だが、もし俺の中に……アリアの事を……俺は本当は、アリアを……

いや、それは考えるのも辛い。だから別の言葉で言い換えるなら、アリアにふさわしい

パートナーになろうとする感情が出来てたんだ。心のどこかに。無意識の内に。
でも、それが叶えられない。
それを思い知ってしまった。世界に一歩踏み出た、ここで。俺とアリアの差を象徴するかのような、このリッツ・カールトンと、あの北角で。
だから、辛いんだ。
だがどうしようもない。
アリアは全てを持っていて何でもできて、俺は何も持ってなくて何もできないから。
そんな格差に――
アリアは、無神経すぎる。
きっと今までの人生、ずっと勝ち組の世界で生きてきたからだろう。
優秀な人間に特有の『あたしができることは、みんなもできて当然』という、間違った価値観の中で生きている。
俺たちみたいな貧乏な人間、弱い人間、ダメな人間がいることを理解してない。
だがここでそれをぶちまける事は、できない。今以上に自分が情けなくなるだけだから。
だから俺は――
「お前こそもうクビだ！　藍幇ぐらい俺1人でなんとかしてやる！」
自分の感情の説明をすっ飛ばし、売り言葉に買い言葉。

逆ギレのお手本みたいな逆ギレをかまし、自分のリュックを掴み取って――
ざっ、とＶＩＰルームを出ていきにかかった。
「なによ……じゃあもう勝手にしなさいっ！　どうせこれで戦果無し！　せっかく攻めてきたのに、あんたのせいで手ぶらで日本に帰ることになるんだわ！　それでいいのね!?」
俺の背中に、アニメ声が追い打ちをかけてくる。
それでも俺が出ていこうとするので、
「――それでいいのね!?」
アリアは文末を言い直してる。
チラッと窓に映るアリアを見ると、その表情には『えっ本当に1人で何とかするつもりなの？　行っちゃうの？』という不安そうな色が混じっている。
だが、もう知るもんか。
俺はＶＩＰルームのドアをくぐり、振り返らず部屋を出ていく。
……アリア、お前は知らないんだ。
俺が猴と既に一定程度、話をつけてある事を。
だから俺はこれから、人通りの多い所をブラブラしてればいい。
藍幇には猴から講和案が伝わってるはずだ。俺は藍幇がコンタクトしてくるのを待ち、バスカービルでも話がまとまった事にして、交渉に臨む。

そして条件をあれこれやり取りして、話し合いで藍幇との決着をつけてやる。
そうすればアリアも俺を見直すだろう。
――見てろよ。そのツンツンした顔に、ほえ面かかせてやるからな。

展望台になってるカウンター席を横切りつつ、地上へのエレベーターに向かうと――
「キーくーん！　理子は東洋の貴婦人・ペニンシュラに泊まってるから、おいでよー！　お城みたいにチョー綺麗なとこだよー、同じお部屋に泊めてあげるよー？」
さっき火に油を注いだ件を全く反省してない理子と、
「キンちゃん様！　あんな帰国子女特有の性格の悪さを全て備えた女なんか放っておいて、一緒に行動しましょう！　私、ホテル日航に泊まってるの。完全に日系のお宿で、日本人スタッフもいるし日本語の新聞もあるよっ」
俺が怒ってると一緒に怒ってくれる白雪が、国粋主義的な事を言いつつ追っかけてきた。
2人ともなぜかホテル案内をしてくる点に危険性を感じた俺はそこをスルーし、
「――昨日はアリアに権限委譲したつもりだったが、それもここまでだ。バスカービルのリーダーとして命令する。お前たちも引き続き町をうろついて、藍幇を探せ。実は、話すアテはあるんだ。ヤツらとは交渉で決着できるかもしれない。そこにアリアを連れてくと戦いになりかねんから、こうして分裂したのはちょうどいいといえばいいかもだ。藍幇に

コンタクトしたら、俺に連絡を……」

と言いつつ、『連絡しろ』と言ったけど携帯が無いな……と思い至った時。

「キンジさん」

背後に、レキがいた。

うわぁビックリした。ほんとにコイツは気配が無いな。

驚いて振り返った俺に、レキは盗まれたハズの俺の携帯を差し出してくる。

「……！　どこにあったんだ、これ」

「盗品などが売りさばかれる泥棒市で、露店に並んでいたそうです。昨夜、アリアさんが買い戻したものです」

アリアが、これを……

「よく見つけ出せたな……二度と戻ってこないと思ってたのに」

「着信メロディーで、キンジさんの物だと分かったそうです」

――発信履歴を見ると、別に誰かに使われた形跡は無い。

だが着信履歴には白雪や理子、そして……

アリアからの着信が、いっぱいある。

心配して、何度もかけてくれてたのか。最後の方とか、1分おきぐらいだぞ。白雪より多いぐらいの回数、アリアからの不在着信がある。

「キンジさん。私はアリアさんと共に行動します。今は彼女を1人にしない方がよさそうですから」

コミュ力の成長を感じさせる事を言うレキは、今のバスカービルで一番冷静だ。

「キンジさんが言う通り、藍幇捜索は継続しなければならない。九龍は私とアリアさんが引き続き監視します。そのように、私が言い聞かせますので。キンジさんたちは香港島を調べてください。土地勘の無いキンジさんですが、昨日と今朝であの島を歩かれたことと思います。まだ香港島の方が敵を探しやすいかと」

こういう時……頼もしいなあ。レキは。

俺たちみたいに感情に振り回されたりしない。こういうメンバーがいてくれて良かった。ていうか、なんかレキをリーダーにした方がいいような気がしてきたぜ。バスカービル。

今度は地下鉄で香港島へ渡り、改めて単独行動となった俺は――

まず、遅めの昼食を取ろうと考えた。

今回は既に2回ほど、空腹のせいで身動きが取れなくなりかけてるしな。

（2度ある事は3度あるというが、あってもらっちゃ困るんだ。今度こそ……）

なにげに朝から粥とバナナしか食べてなかったし、ヤケ食いの要素もある。まだ本場のラーメンにありついてないしな。

というわけで……

俺は駅前を少し歩き、看板の『麺』という字だけを頼りに安そうなレストランへ入る。

……店内はごみごみしており、ほぼ満員。

あまりキレイとは言えない店内だが、いかにもメシ屋って風情のメシ屋だ。

（こういうのでいいんだよ。こういうので）

アリアはレキをお供にリッツ・カールトンの超一流レストランでフルコースのヤケ食いでもしてるんだろうが、俺にはこういう大衆食堂の方が気楽だ。

俺が座れそうな席を探していると、店の奥には――

「おおーキンジじゃねーか！　こっち来いよ！」

騒がしい店内でもよく通る大声で俺を呼ぶ、武偵高のクラスメート・武藤の姿があった。

座高が高い上にツンツンギザギザした髪型だから、俺もすぐ気がついたよ。

見れば武藤の丸テーブルには、彼がリーダーを務める兵站系チーム『キャリアGA』のメンバーも一緒についている。

キャリアGAは車輌科の武藤剛気・鹿取一美、装備科の安齋スグル・平賀文。

男2人・女2人。そこまではバランスがいいんだが、巨体3人・チビっこ1人と身長の偏っている、なんとなく惜しいチームだ。

なお先日「運搬は分かるが『GA』って何だ？」って聞いたら、剛気のGと文のAだと

言われて脱力した。目立ちたいのは構わないけどさ。もうちょっと練ろうよ。
「――修学旅行Ⅱ、お前たちも香港だったんだな」
俺が彼らに相席させてもらうと……う、なんちゅう食いっぷりだ。4人で20人前ぐらい食べ散らかしてる。まあ、香港に金を落とすって意味では正しい観光客なんだろうけどな。食い倒れも、旅の楽しみ方の1つだし。
（しかし、それにしてもだ……）
安斎。食い過ぎだろ、お前。
見たところ、半分以上コイツが1人で食ってる様子だ。
「遠山も、いっぱい食えよォ。残したらもらうぜェ～？」
イスを軋ませて言う安斎は武偵高ビックリ人間の1人で、２００kg近い巨漢だ。
歩くのすら遅いほどの肥満体だが、その装備品の調達能力には定評がある。
『高くつくし時間もかかるけど、どんな超兵器でも調達』の平賀さんとは異なり、安斎は『よく使われる装備を早く、安く、確実に調達』で、みんなに頼りにされてる武器屋だ。
しかもなにげに狙撃ができるんだよな。体型のせいで、あぐらかいて撃つらしいが。
俺が狙撃手大食い説（レキも食わせりゃ無限に食うので）を勘考していると……
「――お前、アリアと一緒じゃないのか？」
武藤がイヤな事を聞いてきたので、

「あんなヤツ知るか。さっきケンカ別れしてきたとこだッ」
俺はメニューを見ながら吐き捨てた。
すると、
「また夫婦喧嘩ですのだ。カーちゃん叱ってやれですのだ」
平賀さんが座ったまま背伸びして、平賀さん喋りで隣の鹿取に耳打ちしてる。
夫婦喧嘩って何だよ。もう……
俺が少し赤くなってソッポを向くと、鹿取が――
「遠山、こら。この『女泣かせ』。そこに直れ」
女子には特に評判の悪い俺に、キビシイ口調でツッコんできた。
アフリカ人女性がやるような編み編みのドレッドヘアーが特徴の鹿取一美は、大型車の運転に秀でた大女。背は俺より高く筋肉質で、苗字や名前の頭文字を取ったか、母ちゃんぽいからか、『カーちゃん』というアダ名で呼ばれている。休みのたびに長距離トラック運転手のバイトをして、荒稼ぎしてるって話だ。
「……っせーな。俺とアリアのケンカなんか、お前たちに関係ないだろ」
本場のラーメンがどうしても食べたい俺は、ここも『麺』という字のみを頼りに店員にメニューを指さして注文しつつ……キャリアGAの連中にボヤく。
すると武藤が、

「昨日の夜中、アリアが彎仔の怪しげな場所をウロウロしてるのに会ってよォ。オレ、『キンジ知らない!?』って聞かれたんだよ」

などと、心配そうに言ってくる。

「……」

九龍のＩＣＣから……

俺が消息を絶った香港島の彎仔まで、探しにきてたのか。アリア。

今の発言で自分も遅くまで怪しげな所をウロウロしてた事がバレた武藤を、平賀さんと安齋がイジり出したが……鹿取一美は俺を咎人を見るような目で睨んで、

「関係なくないぞ。セーラー服が似合わなくても、アタシだって女なんだ。あんまり女を泣かせるなって言ってんだよ、遠山」

「いや、だから……俺は……」

「アタシも昨日の夕方、香港警務処の近くで神崎さんに会ったの。あの子、かわいそうなぐらい泣きながら何度もアンタに電話してたんだよ。アタシにも『キンジを見かけたら、すぐ電話して！』って泣きながら拝んできたんだから」

カーちゃんに怒られつつ……俺は……

アリアが俺をどんなに心配してたか、人から聞かされて思い知らされる。

ＩＣＣで再会した時は、まるで心配されてなくて頭ごなしに怒られた気がしたが……

アリアはずっと、心配してたのだ。俺のことを。
何時間も歩き回って。
電話を掛けまくって。
かわいそうなぐらい、泣きながら。
これは……胸が痛むっていうか……
（悪いことしたんだな、俺……）
落ち込んでしまうな。
……
……
……謝りに、行こうかな？
とも一瞬思ったが、あれだけ啖呵を切って飛び出してきた以上それもできん。
――あれが、アリアが俺をとても心配してた感情の裏返しだった――
とはいえ、いつも以上の調子で殴る蹴るしてきたアリアも悪い。今後もあんな不器用なコミュニケーションをされたんじゃ、いくら俺でも体がもたんし。やっぱり向こうが頭を下げてこない限り、俺から謝るつもりはないね。トッポの供養もある。
などと意地を張る俺に天罰が下ったか、来た『麺』はまたしてもラーメンではなく――
皿うどんみたいな、ジャージャー麺だった。

# 4弾　九龍猿王（ガウロン・モンキー）

「今日冇房呀？」「一泊いくらですか幾多錢呀？」「唔該登記」泊まります

さっき白雪（しらゆき）のガイドブックから武侯（ぶてい）手帳に写させてもらった、広東（かんとん）語を見せつつ――

俺は15時頃（ごろ）、なんとか上環（シェンワン）の狭（せま）いビジネスホテルにチェックインした。そしてまた物を盗まれたりしないよう、貴重品を部屋にあった無料貸金庫にしまう。

そして武器と現金、パスポートを持ち、改めて再出撃だ。

改めて（半分はレキが）立てた作戦通り、俺は香港（ホンコン）島の市街地を歩く。

行動自体は昨日と同じだが、今回は違うぞ。心構（こころがま）えが。

携帯が手元に戻ったので復活したメールによると、白雪は彎仔（ワンチャイ）、理子（りこ）は銅鑼灣（コーズウェイベイ）で同様に撒餌（バーリー）作戦を再開している。

アリア班・キンジ班に分裂したバスカービルだが、レキから『こちら問題ありません』というメールもコッソリ受けている。九龍側も大丈夫だろう。

街角で、ぱんぱんぱん！　という音がして銃声かと振り返ったが……それは爆竹（ばくちく）の音。

暖かいのでイメージが湧（わ）かないが、クリスマスや年末年始も近い。そこで鳴らすお祝いの爆竹をテストしてるっぽいな。

スポーツ用品店の前で信号待ちしてると、親にスケートボードをせがむ子供がいる。スケートボードは店の前の路上に置かれたカゴに乱雑に突っ込まれ、破格で売られてる様子だ。クリスマス商戦があるのは、どの国でも同じっぽい。

（言葉は分からないが……プレゼントを欲しがってるんだな）

などと微笑ましい親子を横目に見ていると……ガタンゴトンッ……

2階建て路面電車が、信号の向かいで停まった。クリスマス模様のラッピング電車なので、俺の前方が少し離れたところに立った巨大な看板で塞がれたような光景になる。

その車内から、キャッキャッ、ウフフッ。ゾロゾロ。

女子校の生徒と思われる女の子たちが、お喋りしながらいっぱい降りてきた。

……あっ。あの白い制服。見覚えあるぞ。ユアンが着てたのと同じだ。

などと思う俺の右側、少し離れた道にも……ガタンゴトンッ……

「……？」

もう1輌、カンフーパンダがサンタのコスプレをした絵柄のラッピング路面電車が停車した。そこからも、ゾロゾロと同じ制服の少女たちが降りてくる。

――何だ。

様子が、おかしい。

路面電車から出てきて楽しそうにお喋りし合っているのはいいが、白制服の女の子たち、

ちょっと、人数が……多くないか？

1輌につき、30人ずつは出てきてる。中国ではよくあることなのかな？

いや、まだ出てくる。

出入り口だけじゃなく、窓からもぴょんぴょん降りてきたぞ。明らかにヘンだ。

気がつくとこの場は――100人ぐらいの、白い制服の少女たちで囲まれていた。

路面電車の運転手も、よく見たら同じ制服の女子生徒。

この異変に俺が身構えようとした時、今度は左側から――ゴロゴロゴロゴロ……

（――！）

……サッ……FV603……!?

香港警務処の装甲車が、徐行してきている！

FV603は6輪駆動の装輪装甲車。北アイルランド紛争でも運用された、機関銃弾も跳ね返すガチンコの軍用車両だ。

M1919機関銃を備えた回転銃座に増設したらしい、旧日本軍の九七式中戦車っぽいハチマキアンテナの合間から……にょき。

ハッチを開けて、玉飾りのついた黒髪ツインテール頭を出してきたのは――

「――ココ……っ！」

アリアの色違いキャラ、藍幇のココ……！

メガネをかけ、金色の拡声器を持ったそのココは、
「喂ー喂ー。依家開始拍戯、因為會有危險、所以請你蛐離開」
中国語で何やら、周囲にアナウンスし……
人々が、周囲からどんどんいなくなっていく。白い制服の女の子たち以外。
ココと連携が取れているらしい、この子たちは……理子が言ってた、藍幇資本の学校の少女たちってことか。だとすると、えっ、じゃあ、ユアンも……!?
などと俺がめぐるましく考えるヒマもくれず、人払いを済ませたココは――
「――キンチ！　日本では姉ちゃんたちが世話なったネ！」
拡声器をこっちに向け、銃座から上半身だけを出してカタコトの日本語で叫んできた。
その服装はまた、『霊幻道士』みたいな清朝中国の礼服。
色はピンクと金を貴重にした香港バージョンだが。
「お前たち香港ウロウロしてた、ずっと監視してたヨ！　ココたっぷり時間かけ、兵備を整えてきたたネ！　キンチとアリアが揃う、やっつける、これとても難問。レキと戦うも、これ難問――機嬢、姉ちゃんたち、狙姐、炮娘、猛妹に教わったネ！　でもアリアいない、いまキンチ1人。これ易問ね！」
何やら喚くココは……眉を吊り上げてる。装甲車からも降りてこない。
敵対的なムードだぞ。とっても。まだ猴の講和案が藍幇内で共有されてないのか。

しかし……俺1人仕留めるために、装甲車までお出ましとは。高く買われたもんだぜ。次は戦車とやらされるなこりゃ。

「……ッ……」

見回せば困った事に、白制服の少女たちは俺を囲む人間の輪を小さくしてきている。俺を中心とした半径を狭めるごとに、人垣は厚くなっていく。

人垣の外側、前と右は路面電車が壁となっている。左には装甲車。背後はビルの壁だ。

――包囲されたぞ。それも最も抜け出しにくい、同心円陣に。

「ココ！　話す前に警告するぞ。お前がどのココかは知らんが、藍幇の人間なら知ってるだろ。極東戦役では、決闘で勝敗を決めるルールになってる。この女子たちが全員それに堪える人員とは思えない。非戦闘員で敵を取り囲むのは、ルール違反だぞ！」

「ぷっぷー！　ルールが何ネ！」

バカにするようにベロを出したココは、愛らしいツリ目の脇で両手をヒラヒラさせた。

「その時のルールはその時のルール！　今は今、ココが決めた新ルールでやるの事ネ！」

出た、ルール全否定！　それじゃルールの意味がねーだろっ！

だがこれが藍幇全体の認識なのか、姉たちのカタキ討ちにきた第4のココ――機嬢による単独での暴走なのかは、俺には分からない。

「戦争は人間の多い方が勝つ、人海戦術は基本中の基本ある！」

「だが……それにしても、こんなに女の子ばっかり使って……！」

敵のルール破りという想定外の事態に戸惑う俺に、白制服の少女たちはジリジリと輪を狭めてくる。

距離が縮まって気づいたが、な、なんだ？　全員カワイイぞ。

平均身長が日本人より低いせいか小柄な子が多いが、みんなスタイルもいい。

「その女子たち通うのは香港藍女中學。キンチ、女に弱いネ。お前の喜ぶの状況を考えて用意してきたある！　郁手！　きひひっ！」

キンキン声で命令したココは、ばさ！

赤地に黒で『曹』と書かれた扇を広げた。

するとそれを合図に、女の子たちが、きゃ――――っ！

黄色い声を上げて、俺の方に殺到してくる。

「――ちょっ……！」

スポーツ用品店の壁際に後ずさった俺だが、あっという間に追い詰められ――押しくらまんじゅう状態にされてしまった。まるでファンに取り囲まれたミュージシャンみたいだ。

こ、こんなシチュエーションが好きと思われてんのか、俺？　心外すぎる。

「それにキンチお前、知らないか？　緋色の研究に書いてあった。イロカネは――」

と言いかけたココは、パッ。

扇で口元を隠し、『おっとこれは言わない方がいいか』という感じに目を細めた。

「……っ？」

妙なキーワードに眉を寄せた俺だが……すぐ、それどころじゃない事に気づく。

四方八方から女の子たちが手を出してきて、キャッキャッと笑いながら俺の手や腕、足までもを押さえ始めたのだ。

「おっ……おい！　ヘンなとこ触るな！　よせって！」

などと抵抗するものの、俺は手足の一本一本を3つ4つの手で押さえられてる状態だ。文字通り手も足も出ない。

メガネのココは、

「私、曹操四姉妹の中でいっとう用心深いネ。キンチ何しでかすか分からない男。防御も徹底してきたの事ある。きひひっ」

などと、装甲車に半分隠れた状態。

俺は……まずこの少女の人海から抜け出せないし、ココ――命令者は10㎜超えの装甲を持つFV603の中だ。あれに拳銃じゃ歯が立たない。

キャッキャッと笑いつつの美少女たちは、さらに手を俺の服の中に入れてきて――まず銃、続いてナイフを奪っていく。

ついでに首筋をくすぐってくる手もある。や、やめろってばホントに！

「さてキンチ、降伏するよろし。今ならその女全部、お前にくれてやるネ。欲しい敵将は女攻めにして骨抜きする、これ昔ながらの戦の常道ネ。足りなきゃもう１００人、キンチ付きの女にする。これでキンチは明日からココの駒、間違いないネ！」

「……なっ……何をバカな……！」

俺は女の子たちに揉みくちゃにされながら、呻然とするしかない。

日本を一歩出たら、こういう敵も出てくるのか。

どうも俺を藍幇に引き入れようという考えのようだが、その手口が力業も力業。日本人には発想もできないほどダイナミックで、強引なやり方だ。加えて、この組織力。

今までの敵とは違う。対応のしようがない。今までのやり方、物の考え方じゃ。

――ここは、海外。

日本の常識が通用する場所じゃ、なかったんだ。最初っから。

なのに俺は日本の尺度で物を考えてた。相手が戦役のルールを守る前提で作戦に同意し、敵の戦士を捕まえても情けをかけて逃がし、話が通じると思って講和を持ちかけさえした。

だが――全部、空回りだ。何一つ上手くいってない。俺のやったことは。

俺は視野が狭かったんだ。戦略に於いても。

そのくせ、前のめりになって海外まで攻めてきて――

まんまとその弱点を突かれた形になっている。結果的には。

だがそれに気づいても、もう遅い。俺は囚われてしまっている。この少女で出来た檻に。
「ココ……！　は、話がっ……ある！　猴だッ、俺は猴と、話し合いの約束を……！」
切り札とばかりに、もみくちゃの俺がそう叫ぶと――
ココは、ぱちん！　と扇を閉じる。
そして、カンカンッ。装甲車の内側を示すようにそれでハッチを叩いた。
「猴はここに居るネ」
な、何っ……!?　それに乗ってるのか!?　猴も……！
それなら対話の道がまだある、と、一縷の望みに賭けようとしたその時――がんっ！
車内兵員室の上にあるハッチを、内側から蹴り上げる裸足があった。
そして――ぴょん！
名古屋武偵女子高のカットオフ・セーラー服姿の少女が、マンガやゲームの世界でしかありえないレベルの跳躍力で飛び出してくる。
「猴……！」
円形の鉄棒のようなハチマキアンテナに降り立った、彼女は……
……ち、違う。
直感的に分かる。
肉体は猴だが、違う。おそらく――人格が……！

「呀呀呀。正確には――九龍猿王・孫悟空ヨ。キンチと猴、会った。藍幇の人間が見た。通報受けて、『パトラの鍵』で猴を孫に変えたネ。でもキンチは猴を捕らなかった、すぐ逃がしたある。捕ってればそのまま、孫がお前たち畳んでたヨ。勿体なかったネー」

などと語るココの横で、

「クル・ククル・カララロル」

猴……いや、孫が、意味不明な言語を独り言する。

そして長い黒髪を振り上げ、猿のようにその場にしゃがんでから……バッ――！

セーラー服を脱げてしまいそうなほどに翻して、制服少女たちの海にダイブした。

それこそ客席ダイブをキメる、ミュージシャンのように。

「……！」

少女たちは見事な連携で両手を挙げ、頭上で孫を受け止め――

運動会の大玉送りの要領で、身を丸めた孫を転がしてくる。こっちへ。

彼女らが挙げた手が集まって、広がり……その中心に――スッ。モデル立ちした裸足の孫は、京劇を彷彿とさせる赤いアイシャドウを目尻に引いていた。

「コルカラロス、アララス、クルアラル」

――化粧だけじゃない。喋る顔つきの印象も、明らかに猴とは違う。

キリッとしており、得も言われぬ超越的なムードを漂わせている。

これは、鏡高組本家の屋上で見た方の……孫だ。
（猴は、対話が出来るヤツだったが……）
こっちは、孫は――
ダメだろう。第一印象でそれが伝わってきた。言葉さえ通じないみたいだしな。
少女たちが挙げた手を適切なタイミングで開き、そこを足場にして……女で出来た池に咲く睡蓮を踏んで歩くように、モデル歩きの孫がやってくる。一歩、二歩。
なるほどコイツは――孫悟空。おとぎ話の世界の住人だ。
見た目は人間だが、佇まいからして非現実的なムードがある。
なんというか、華もある。颯爽としたその姿に、見とれてしまいそうなほどに。
少女池に沈んだ俺が、すぐ前まで迫ってきた孫を見上げていると――
ごろんっ。
孫はその場に涅槃仏みたいな姿勢で寝っ転がって、それを無数の手が支える。
「クルヒリルア」
俺の顔面の真ん前1センチに、孫の幼くも鋭い目つきの顔がある。今や。
あの時ジーサードを撃ったその右目も、俺の、目の前に……！
「孫ッ――」
反射的に叫んだ俺の口、露わになったその舌を――

――ぺろっ。

なめた。

口を俺の口に押しつけた、孫が。

「……！」

一瞬、呆然とした俺だが……

超常世界のヤツらとの付き合いが長くなってきたおかげで、何となく分かる。

今、コイツは俺に何か魔的な術を使ったんだ。舌と舌を接触させることで。

その術の正体は――

「――猴は臆病で、いけないよな」

孫が俺の口調で日本語を喋りだした事で、すぐ判明する。

「そんなに驚いた顔をするな、遠山。安心しろ。今のは現代の日本語を写させてもらっただけだ。男相手にやった事はなかったから、出来るかどうか分からなかったけどな」

ぐるっ、と俺の頭に抱きつくように擦り寄ってきた孫は――

「よし遠山。ちょっと闘るか」

ニヤリと笑いかけてくる。俺の顔の、すぐ横から。

「大丈夫。お前は見た目もあたしの好みだ。如意棒ですぐ殺したりはしない」

……猴の予想通りに、なってきたな。これは。

ドクンッ……

という血流を感じながら、俺は自嘲気味に苦笑する。

「――孫。孫は藍幇の代表として、俺に決闘を挑んできた。そういう理解でいいかい？」

「ハンッ。好きに解釈しな。お前らの抗争なんて、アリンコ同士の戦いさ。どうでもいい。その点ではあのココと気が合うんだよ、あたしは」

ドクンッ……

始まってるな。これは。俺の中で。

「――あたしは強い男が好きだ。強い男と闘りたい。それだけだ。この間のジーサードは、もったいなかった。寝ぼけて殺しちゃったからな」

――なるほど。1つ、有益な情報を得た。

孫はまだジーサードを殺したと思ってる。つまり、猴・孫は、脳の中で小夜鳴・ブラドみたいな情報のやり取りが出来てないのだ。

そういう事に頭が回るのは――

俺が、なっているからだろう。ヒステリアモードに。

いやはや。ちょっとビックリだね。我ながら。

掛かりは少々甘めなものの――小5ぐらいの孫と唇を重ねて、それでなれるとは。

俺をヒステリアモード化させた女性、最年少記録だよ。

とも思ったが孫は1400年前にも生きていたワケだから、逆に最年長記録。かな？

「俺と戦いたい……か。それも女性の頼みだからね。叶えずにはいられない」

ヒステリアモード的な言い回しで、俺は孫に微笑みを返す。

今の、こっちの俺は——ただ、女性に尽くす騎士。

いいよ。戦ってあげよう。君は藍幇の正当な戦士。戦役のルールにも悖らないだろう。

それに俺はまだ、君をよく知らない。

戦いとは、コミュニケーション。深いところでお互いを分かり合う行為でもある。

それを世界的に高名な君とさせていただけるなんて、光栄な事だよ。

俺は、君が何者で、自分が何をすべきなのか——見極める。戦いの中で。

だが——

30分だ。

こっちの俺は、どうも女の子には毒みたいでね。見せてしまうと、ハマられてしまってあっちの俺が危険な目に遭うことが多いんだ。アリアの例しかり。

だから時間制でいこう。ホストクラブは時間無制限だけど、出張キンジクラブは時間制。

だけどその時間内は、俺の全てを提供して——

「——夢を見させてあげるよ。おいで」

囚われの身ながら、そんな誘い文句で笑顔を見せた俺に……

孫はそれこそナンバーワンホストの指名が取れたような、嬉しそうな笑顔になる。
「じゃあ、孫。この酒池肉林を抜けて遊びにいこう。だが1つ、失礼を謝らせてほしい。初めは、その愛らしい手を取ってエスコートするべきだけど――」
俺は喋りながら、既に片足で足下に寄せていた――背後のスポーツ用品店の前にあったカゴから拝借した、特売品のスケートボードに片足を乗せる。
そして、俺の腕を縛めている少女たちの手の力の流れを全て読み……
「俺の手には10秒だけ、仕事の予約があってね。それができないんだ」
ぱっ、ぱっぱっぱっ。
先日、池袋の予備校のエレベーターで『転校生カップル後押しし隊』にもやったように次々と俺から離させていく。彼女たち自身の力を利用して。
ついでに少し遊びを入れて、女の子たちが手を取り合って大きな輪を作っているような姿勢にしてあげた。その輪の中心に、俺がいるような形で。
「香港で物を盗まれるのは、もう経験済みでね。次は盗ませてもらおう。君たちから」
キョトンとしてる彼女らにも前置きしておこう。日本語でだけど。
俺は、サッ。その場にしゃがみ、さらにスケートボードの上に仰向けになった。
そして壁を、力強く蹴り――
時々片輪走行になりつつも、スカートの葉がヒラつく御御足の林をスリ抜けていく。

本来は伏せてやる技で、出入りが逆だし、スケボーを併用するアレンジも加えたが……これはとても古い遠山家の秘技、『潜林』。

元々は大勢の騎馬や雑兵に守られた大将の首を取りに行くために開発された、敵の足と足の間をヘビのように這って通過する技だ。

本来はついでに雑兵の、今でいうアキレス腱を全部切って進むんだが――この白く細く優美であり、1本1本がどんな美術品にも勝る女性の足を傷つけるなんてとんでもない。なのでその代わりに、遊んでいた手で盗ませてもらった。というか、返してもらった。

俺の大事なベレッタと、バタフライ・ナイフと、スクラマ・サクスをね。

それぞれをホルスター・ポケット・背の隠し鞘に収めた俺は、この世で最も美しい林を抜け……カツンッ。

「お店に返しておいてもらえるかな」

つま先でスケボーをジャンプさせて、包囲網の外周にいた少女にウィンクしつつパス。

対キンジ人海戦術に使われた少女たちは揃ってポカーンとしつつスカートを押さえてるが、おかげさまでどうやらヒステリアモードも強化された感がある。

「そうこなくちゃな！　――キキッ！　面白いよ、遠山！」

女の子たちの上に立つ孫は、嬉しそうに目を見開いてこっちを振り返ってる。

第1の包囲網を抜けた俺はそれに背を向け、

（さて……）

第2の包囲網、2階建て路面電車と装甲車の壁をどう抜けるか思案する。

まず左方に控える装甲車と戯れるのは、ちょっと遠慮したいところだ。

前方と右側面に聳える路面電車は車高が7mほどある。高い壁だ。さすがのヒステリアモードでも、ちょっと飛び越すのは難しいかな。

だから、発想を変えよう。あれは壁と考えれば壁だが――本来は、乗り物。動く。

「たしか2・3香港ドルだったね」

俺は独り言しながら、今は無人となっている路面電車の車内に走り込む。

そして左手で運賃を先払いしつつ、運転席の操縦台に右手を伸ばした。

運転は、昨日乗った時に垣間見た記憶をまさぐれば簡単にできる。

ゴクンッ……と鈍重な音がして、壁となっていた路面電車が動き始める。

よし。この車両にはこのまま自走してもらおう。

とはいえ他の路面電車に追突しないように、時速10kmほどに留めてだが。

「――遠山ァ！」

叫ぶ孫の声で、距離と位置が分かる。少女たちの上を走ってきてるね。

いいよ、お乗り。どうせ追いつかれる事は分かってる。速度は出せないんだし。

と、俺が駆け寄ってくる孫の方を振り向くと……

さっき俺を取り囲んでいた女子生徒たちは、みんな驚いた顔をしてこっちを見てはいたものの――動かずにいた。
どうも上官の予定に無かったことは、指示がないと何もしないようだ。
その中で、一番ビックリ顔をしていたのは――
（やっぱり、彼女もいたか）
昨日、俺を助けてくれた北角（ノースポイント）のユアン。院美詩（ユアン・メイシー）ちゃんだ。
制服を見た時点で分かっていた事だが、彼女が通っていた学校も藍幇（ランパン）系の学校。そして――昨日彼女が語っていた学校指定のお尋（たず）ね者とやらは、どうも……
（俺の事、だったらしいな）
ユアンは「まさか、あのマヌケな日本人が『不可能を可能にする男（エネイブル）』だったなんて」という目で俺を見ているが――買いかぶりだよ。そのアダ名は。
俺は『ムリって言うの禁止』と昔アリアにムチャ振りされたから、いろいろやっただけ。
だから正確には、『不可能を禁じられた男』かな。
あー、かわいそうになってきたね。自分が。
路線に従って、ギシギシと音を立てて右折し始めた路面電車に……
「――キンチ！　逃げる駄目ヨっ！」
ココが拡声器（かくせいき）で叫ぶ声には、今や少し焦りがある。

路線の形は俺には見えており、だから前と右に2輌あった内のこっちを選んだワケだが——この路面電車は、東へ向かう狭い路地へと入っていくところだ。

ダイナミックさがアダになったね、ココ。装甲車じゃ、車幅がありすぎて追えないよ。

「……孫ッ！　お前、キンチ追っかけるネ！」

ココはそう言い残し、回り込むつもりだろう——装甲車で大通りを直進していく。

「——言われなくてもッ。追うに決まってる！」

などと叫びつつ、たったった——

カットオフ・セーラー服を撥ね上げつつ走ってきた孫が、低速で走り続ける路面電車に昇降口から飛び乗ってきた。

「遠山！　これで2人っきりだ！　楽しく闘れるな！」

「悪くない響きだね。女性と2人っきりっていうのは」

と言いつつ客席側へ後退する俺に、バンッ！　バンッ！

猴は車内の空気を破裂させるような音を立てて、素手で鉤爪や掌底を繰り出してくる。

1撃1撃は鋭く、速く、直撃をもらえば即・致命傷といった印象だが——

——読める。いなせなくは、ないぞ。

ここは手すりや吊り革の多い車内。蹴り技は出しにくいだろうし手技も軌道が限定的・小規模になる。そう踏んで、俺はここでの格闘戦に応じたのだ。

だが……猴は跳び上がり、

「キヒッ！」

手すりに右手で、吊り革に左手で掴まり――まるで十字懸垂みたいな姿勢になって身を捩り、バスバスバスッ！　また空気の破裂音を上げ、右足、左足、さらにシッポを使った三段蹴りを繰り出してくる。

逆に、狭さのせいでそれを『躱す』事ができなかった俺は――

「――ッ！」

3発とも、とっさに両腕をクロスして『受ける』。

その衝撃は凄まじく、全身が階段の方へ吹っ飛ばされてしまう。

こ、小柄な相手だが……強烈だな。これは。

とっさに『橘花』で減速防御できてなければ、両腕が肘からもげていただろう。

「……短いスカートでのキックは、自粛した方がいいんじゃないかな？」

冗談交じりに言いつつ、俺はさらに見た事もない前宙――シッポで壁を押して、途中で軌道がナナメに変わった――と共に繰り出された回転蹴りをまた腕で受ける。

だが威力は殺しきれず、踏みしめた俺の足の下で階段が1段壊れた。

つ、強いな。全身の骨が軋む。

孫のストライキング・パワーは、通常打撃でも俺やジーサードの『桜花』・『流星』の7

割程度の威力がある。

それを当たり前のように連打されては、橘花を多用してもダメージが蓄積していく。

とはいえ、受けないワケにもいかない。この空間では、躱せないからな。

「遠山！　お前も手を出してこなきゃ面白くないぞ！」

にょろーんとオレンジのシッポで頭上の手すりからブラ下がり、無邪気な子供みたいに嗤う孫は――この狭い空間を全く苦にせず、極めて器用で重い打撃を放てている。

まるで林の中に居る、猿のようだ。

いや、実際、孫は猿の特性を持つ化生なんだろう。経験上、この手の輩は動物の特徴を兼ね備えている事が多かった。玉藻は狐、ヒルダはコウモリとか。

（この車内での徒手格闘戦は、不利だ……！）

俺は2階へ避難し、窓から出てのハコ乗りで一旦隠れようとするが――

「――っ！」

まさに今この路面電車とすれ違おうとしていた対向車線の路面電車に頭をぶつけかけて、慌てて車内に戻る。

（そ、側面がダメなら――）

――上だ。もう退避できる場所はそこしかない……！

2階後部の窓から体を出し、懸垂で車両の屋根に上がると――

「……？」

ガヤガヤ。ガヤガヤ。周囲から、声がしてる。

見れば……路地のあちこちから、香港の住民がこの路面電車を面白がって見ていた。

建ち並ぶマンションからも人々が顔を出してる。みんな楽しげだ。

どうも最初から、一連の騒ぎを映画の撮影か何かだと思っていたっぽいな。

「えらいぞ。よく香港が分かってるじゃないか、遠山キンジ。観客にもウケてる」

よっこらせ、と車体前方の窓から屋根へよじ登ってきた孫が話しかけてくる。

「……お褒めに与ってる理由がよく分からないんだが」

呼吸を整える時間ぐらいは、もらえそうだな……

「車内から屋上へ。どんどん舞台を切り替えて格闘するのは、香港映画の王道だからな」

猴はギャラリーが多い事が嬉しいのか、ニヤニヤ笑いながら――

ちょっとだけ尖り出している、二次性徴初期っぽい胸の前で腕を組んだ。

「ああ……理解できたよ。俺も好きだからね、香港のアクション映画は」

ここは狭い車内とは環境が異なる。

攻防共に、よりワイドな動作ができるだろう。

と、思ったんだが……ここはここで、囲まれているな。

格闘戦を継続する上で少し厄介な、香港名物に。

道の上空に張り出し、カラフルな漢字が描かれた、無数の――看板に、な。色とりどりの看板は大きさも高さも不規則に、次々と迫ってくる。正確には、自走するこの路面電車が近づいている。

いま頭上を通過していった看板は問題ないが、道の奥にはこの屋上を掠めるような高さの看板もたくさんある。ある種のアスレチックみたいな調子でそれを躱しつつ、この孫と闘る事になるワケだ。ここからは。

「キキッ。じゃあ見せてやろう。シーン2カット5、自走トラム上での功夫アクション。客をシラケさせるなよ？　お前の血肉を桜花雨みたいに飛び散らせて、盛り上げてやる」

愉快そうな孫は肘を90度に曲げた手を天地に構え、曲げた脚を広げ、腰を低くし――

サッ、サッ、ザシュ。

ちょっと愛嬌が感じられる、カンフーの構えを取った。

お見事。完璧な構えだ。南派少林拳だね。星の数ほどもある中国拳法の中から、揺れる船上での格闘戦を得意とするそれを選択したのも正解。路面電車の上は、揺れるから。

……などと、美少女とはいえ敵を誉めてる場合じゃないか。

またあの猛打を、なんとかしなきゃならないワケなんだからな。

「この遠山桜――散らせるものなら、散らしてごらん」

すっ……と、俺が『絶牢』の構えを取ると――

やはりどうやら映画のロケだと勘違いしているらしい住民の皆さんが、わぁー！　と、あちこちのビルから喝采を投げてきた。

対峙する俺と孫の周囲、左右や頭上スレスレを次々と流れていく原色の看板の群れ。

その更に上空では、耳鳴りのような音を上げながら――香港名物の超低空進入コースで、エアチャイナの旅客機が街スレスレを飛んでいく。

ビルから中華鍋を突き出した誰かが、グァーン！　と、それを銅鑼代わりに鳴らし――

――俺と孫の格闘アクション、第2シーンが始まる。

# 5弾　躍る香港トラム

胸の辺りの高さで屋根の上を掠めてきた、幅広の『天香楼有限公司』と書かれた看板を――孫が後ろ向きのままジャンプして、俺は屈んで、それぞれ躱す。

看板で俺の視界が一瞬塞がれた刹那、孫は、ばんっ！

9mはある路面電車の前方から後方まで、1アクションで飛びかかってくる。

まさにワイヤー・アクションのような、常識では考えられない跳躍距離だ。

そして着地と同時に放たれた、ゴッ！　と天を突くような上段前蹴り――功夫の端脚を、

（――絶牢ッ！）

よりによってこんなに人目のある所ではあるものの、俺は全身を回転扉のように用いる遠山家の秘技で受ける。

俺の肉体で最も堅い場所――額で孫の裸足の踵を受け、その衝撃力を全吸収し――その瞬間、攻防が入れ替わる。

――バッ！　孫のキック力をそのまま利用した、俺の後方宙返り蹴り――

100倍ヒステリアモードのジーサードでも対応できなかった絶牢に、

「――奇ッ！」

孫は、初見で対応した。
その胸部と腹部の中間に俺の蹴り上げを半分は喰らったが、咄嗟に下げた前腕で衝撃を分散させたのだ。ダメージはあっただろうが、限定的になった。
な、なんて反射神経だ。やっぱり人間じゃないものと戦わされてるんだな。俺は。
とはいえ今の絶牢は不完全だった。路面電車の揺れのせいで、こっちの重心が完全には肉体の中心・中央に無かったからだ。
負け惜しみにはなるが、まだこの奥義が破られたとは思わないようにする。
「――っ……」
自分の打撃の力で車体前方まで後退させられた孫は、ちょっと驚いた顔だ。
まさか人間ごときに、一瞬とはいえ本気で防御を強いられるとは思わなかったのだろう。
――ぺろり。
舌なめずりしたその顔が、改めて愉快そうな笑みを形作る。
「……遠山、いいね。お前、なかなか面白い」
孫は背後にも目があるような正確さで、背後から迫る看板に跳び乗り――その裏側から車体の屋上に戻る途中で、ばしんっ！　看板を蹴り上げ、吹っ飛ばしてきた。
飛来する『可口可楽』の看板を俺がターンして避ける間に、孫は電車のすぐ横の建物へジャンプし、壁伝いに走って、その壁を蹴り――バッ！

（――！）

潜り抜け（ウィービング）で躱したものの、俺の髪を掠めるような跳び足刀を放ってくる。

はっ、と振り向けば孫は看板に足の指で掴まって水平にしゃがんでおり、そこから跳ね戻ってきた。全身をミサイルのように使った鋭い頭突きが俺を掠める。体をキャッチして投げ技にいけるか――とも思ったが、孫の全身が不自然に上昇（リフト）して逃げた。頭上の看板を支える鉄パイプに引っかけたシッポで懸垂（けんすい）したのだ。

続けて、指で俺の肉を毟り取ろうとする裸足の蹴りが頭上から降り注いでくる。

なんて3次元的な戦い方だ。段違い平行棒みたいだよ。

「――旋斧廻刎（シャンフーフィエン）ッ――！」

逆立ちで舞い降りた孫は、車両の屋上にクロスさせた両手を突いてからの――

その腕の捻れを解放するような、スピニングキック。

1秒内に放たれる右足・左足・シッポの三連撃が俺の腹部を掠める。

これも恐ろしい鋭さだ。ギリギリ躱したが、もらっていれば胴体が上下に断たれていた。

屋上の縁までバックステップして距離を取った俺が、

「……孫。その……もう少し、遠慮してはもらえないかな？　孫はスカートなわけだし、そのブラウスも極端に短いんだから」

滲む冷や汗を隠しつつ、注文すると――

くりん、と逆立ちから新体操選手みたいな後転で立ち姿勢に戻った孫は、うにょん。
玉藻がたまにやるみたいにシッポを『?』型にした。
「遠山、お前まさか――あたしの姿に、女を感じるのか？　この身体の成長は、齢10歳で止まってるんだぞ。ほら、こどもだ」
孫はわざとらしくこっちにオシリを向け、自らペンペンして見せる。そして顔だけ振り返り、アカンベーして見せた。まるで女子小学生が男子高校生をからかうように。
「……どうだ？　遠山」
「どうと言われても……」
だが、今の仕草は――大人の女性が、俺という少年を挑発してるようにも感じられた。
見た目は子供、頭脳は大人、ってところかな？　孫という人物。
つまり背の低い、年上の女性と考えると……うん、腑に落ちる。嫌いじゃないよ。
本来、こういうネタで話すのは好ましくないんだが……今は幾つかの理由により時間が欲しい。CVRの女子みたいに、自分の性別――男を使わせてもらおう。
「……男性は理性とは別に、身体的反応が女性への情愛を示す事がある。ココから聞いているかもしれないが、俺の戦闘に関する調子はそれで決まるところがあってね」
「じゃあ、調子はどうだい。あたしに対する遠山の」
「悪くない。好みのタイプなのかもしれない、君が」

あと2、3分、路面電車が進めば……

「……ちょっとお前という男が不安になってきたけど、まァ嬉しいね。女扱いされるのは。2千年もの人生で一度も無かったから、ちょっと憧れてもいた」

風でスカートをバタつかせつつ、孫は嬉しそうに笑い、

「っていうか、お前ホントにこのあたしでもイケるのか？　大丈夫なのか？」

自分のほとんどない胸、ほっそりしたラインの足を見回した。

今までずっと極端に子供っぽくてモテず、恋に恋してきた妙齢の女性が……

ついにそんな自分でもいいと言ってくれる男性に巡り会えたような、ワクワクしつつも信じられないような、そんな表情をしてる。

「――女性は生まれたその日から女性だ。女性は世界を華やかにする花。花を愛でるのは人の本能、と、俺は兄……というか姉……というか兄から教わってる。君を、愛するさ」

我ながら何だか分からないヨタ話を振りながら――

俺は手の中にコッソリ握った携帯を、自分の背後で操作する。

「……い、言っとくが本気にしちゃうぞ。年上女の純情を踏みにじったらコワイからな？　中国で最も残酷な処刑方法を全部やって、トドメに如意棒で刺してやる」

少女のように赤くはならずとも、孫は昂揚した表情で見た目にそぐわぬ事を言う。

「といった所で、同様に俺の愛する花々――恋人たちを紹介しよう」

「いきなり浮気か！」
「浮気は文化だ」
などと……
あまりにも適当に喋ってたせいもあり、そこで孫に俺が背後で携帯を操作している事に気づかれた。
「――おい遠山――仲間を呼ぶな。死体が増えるぞ」
だが、今もらった時間で充分だ。もうコールしてる。
「孫。さっきそのあられもない服で俺と戦う時は、遠慮した方がいいと注意したけど……その理由は、俺の血の巡りが良くなって――強くなってしまうからなんだ」
身体の中心・中央を感覚で確認すると、やはり熱さは増している。
最初は孫の幼い外見を気にして、倫理的にヒステリアモードになってよいものかどうか戸惑っていたらしい血流が……やはり本質的には彼女が年上なのだと分かり、通行規制を一気に解除された感じだ。俺は割と、年上趣味なところがあるしな。
「さて。日中の文化交流の一環として、面白い物を見せてあげよう。日本人は携帯電話が大好きでね。携帯を使いながら、なんでもできるんだよ」
「なんでも？　よし、また組み手でいじめてやる。それなら両手が塞がるだろ」
「おいで。俺流のハンズフリーをご覧に入れよう」

俺は白雪に繋がったらしい携帯を、看板の間を縫うように放り上げ――
駆け込んできた孫が仕掛けてきた、両手両足を使った打撃戦に応じる。
――バッ！　ビシュッ！　ビシッ！
やはり重い。一撃一撃が。だが俺の橘花も快調だ。絶牢も2度、3度、チャンスを見て放つ。孫はそのたび自分の打撃力を丸々自分に返され、その不可解な技に眉を寄せてる。
そうやって孫悟空の攻撃を、さらに迫り来る看板の群れを躱しながら――
「もしもし、白雪」
ぽん、ぽん。降下してきた携帯を頭でリフティングしつつ、俺は白雪に語りかける。
『――キンちゃん？』
「敵さんと、お会いできたよ。今いじめられてるところだ」
『えええっ!?』
頭部を狙ってきた孫の上段回し蹴りを、屈んで躱し――
ころころ、と、俺は携帯を頭の回りでサイコロみたいに転がしつつ普通に話す。
そしてヒステリアモードの頭で、
「軒尼詩道（ヘネシーロード）から金鐘道（アドミラルティーロード）に入って、路面電車（トラム）の線路に沿っておいで」
ＩＣＣから見下ろした香港（ホンコン）の全景と、先日この携帯で表示したＧＰＳ地図の記憶を組み合わせ、白雪に合流する経路（ロジ）を伝える。

白雪は灣仔駅付近で藍幇を捜索していた。この路面電車が向かう先にいるのだ。
俺は初めから合流狙いでこれを走らせていた。ノロノロ運転だったから時間はかかったけど、ようやくその成果が出そうだよ。
「――覇ッ！」
気合いの声と共に孫が蹴り上げようとしてきた、そのほぼ全て露出している太腿を――動作の起こりのタイミングで押さえて、中国武術・寸勁のお株を奪う『秋水』。
ドンッ！　という音がインパクトの瞬間に上がり、キックをキャンセルさせられた孫は――また驚いて目を丸くしてる。
その間、携帯は俺の左肩の上から左腕の内側へ。
「理子とレキにも電話しておいてくれ。こっちはどうも、手が放せなくてね」
『はいっ！　いま、会いにゆきます！　キンちゃんの元へ！』
俺はヒステリアモードの聴覚……を使うまでもない大声を聞き、右手で、ぱたん。
肘で携帯を折り畳んで、すとん。自分のポケットに入れた。
ついでに正面にウィンクしてあげると、孫は嬉しそうにゾクゾクッと身震いしてる。
どちらかというと、性的興奮に近い悦び方に見えるな。
強い男の示威行為――こういう曲芸でもいいらしい――を見るのが、お好きなようだね。
（ちょっと性的にはクセのある子、なのかな？　俺が言えた義理じゃないけど）

見れば……対向車線から、もう一台の2階建て路面電車が接近してきている。
こっちの闘いに気づいた運転手さんが、目を丸くしてるよ。スミマセンね。
ここで俺は、拳銃を出し――
「そういえば孫は無賃乗車だったね。もう、降りるべきだろう。だが俺が乗ってると降りづらいようだから……レディー・ファーストではないけど、お先に失礼するよ」
そう言って、少し、いや、きちんと集中して狙いを定め……パァン！
対向して迫る路面電車のバンパーに、発砲した。
ギンッ！　と跳ね返った銃弾は、俺たちの乗る路面電車の1階に飛び込む。
がきんっ、という車内を跳弾する音が続き……がしんっ。俺が記憶してあった運転台、そのブレーキハンドルを掠めて叩いた。この路面電車が、停車するように。
――目隠し一重跳弾射撃。
ヒステリアモードの空間把握力を頼りに、見えない箇所にある特定のものを跳弾で撃つ銃技だ。いま初めてやったけど。
「じゃあ、ここからシーン3――屋内戦に移ろう。ヒロインさんもおいで」
減速しつつも、惰性でまだ少し走る路面電車から――
俺は、すれ違う対向車線の路面電車、その屋上に飛び移った。
そしてさらに、その先にあるデパートへと看板づたいに窓から侵入していく。

既に飛び石となる対向車は通過してしまっていたが……

「キキッ。言われなくてもッ！」

笑みを浮かべた孫は、バンッ！

路面電車の屋上を踏み抜くほどの勢いでジャンプして、また一足で飛び移ってくる。

俺がバックステップで入ったデパートの店内、3階の一角は――

（おっと……）

これは、ちょっとアンラッキーだったかな。

ここは男子禁制の、エルドラド――女性向けの、下着売り場だ。

日本のデパートのラインナップより少々派手なランジェリーが、無数に煌めいている。

四方八方、色とりどりの下着だらけ。クラッと来てしまうね。

価格帯は少々高めの店のようで、足下は豪華な起毛の絨毯。女性的で華美な内装だ。

そこに窓から、後ろ歩きで闖入してきた男子高校生に……

店員さんと香港美女のお客さんたちは、目を丸くしている。

「……どうも。お邪魔します」

言葉が通じないので、俺は彼女たちにとりあえずスマイル。

そして今一番言いたい『危ないから下がって』というセリフを――

窓から入ってこようとする孫への発砲音で、雄弁に伝えた。

パァン！　という銃声に、キャー！　と万国共通の女性的な悲鳴を上げ、皆さんフロアから逃げていく。試着室から飛び出てきた人は、下着姿のままで。不好意思。でも映画にお色気シーンは付きものって事で、ここは一つ笑って許して下さいな。

一方、距離もあったが平然と俺の射撃を見切って避けた孫は、

「やっぱり噂通りのスケベだなっ。入るに事欠いてこんな店か！」

こういう下着をつけられない自分の体にコンプレックスがあるのか、赤ら顔で怒ってる。

「……あまり説得力は無いと思うけど、真実だから言っておくよ。断じて故意じゃない」

昔もこんな事を言った覚えがある俺は、苦笑いしつつ――

裸足で駆けてきた孫を、1銃1拳の拳銃格闘戦で迎え撃つべく構える。

孫は走りながらコート掛けの長い棒を取り、横倒しにしたそれを、ビタッ！　と背後に構えて跳躍した。風を切り、両膝を曲げ、大股を開いて飛びかかってくる。

「――ッ！」

あまりの速さ、身のこなし、それと姿勢の大胆さに引き金を引くのが間に合わなかった。

バッ！　と振るわれた鋼の棒を、俺は下着が満載されたテーブル上を転がって躱す。

床に降りる刹那、そのテーブルを空中で蹴って滑らせ、孫に当てようとするが――孫はそのテーブルに飛び乗り、コート掛けをサスマタのように突き出して俺を床に押しつける。

――上手いな。孫は棒術が得意なんだ。
だから如意棒も棒と混同されたって事か。悠久の歴史の中で。
俺は倒れた姿勢のまま、孫の立つテーブルの脚を蹴り折ってバランスを奪い――棒から逃れる。
テーブルから転落した孫は、絨毯の床で回転受け身を取り、
「――哈ッ！」
起き上がりざまに、俺の脳天めがけて棒を振り下ろそうとしてくるので――
俺はそのタイミングに合わせてウィンクしつつ、絨毯を思いっきり引っ張ってやる。
すると、ごろーん！
「惨！」
孫は両足を真上に向けるぐらい、派手に尻もちをついて転んだ。
ばしんっ。棒も俺の横の床を叩いた。ハズレだ。
はは。今まで俺が戦ったどの敵より優れた瞬発力があっても、やっぱり君は小柄な女性。体重はあまりないね。
と、笑みを浮かべた俺は――
「――？」
まだフロアから避難してない女性がいる事に、気づく。

ランジェリーショップの向かい、キャンディー売り場で……二つ編みでメガネの、若い店員さんが何かやっている。

武偵高でいえば救護科の後輩・宗宮つぐみにチョイ似のお姉さんは、

「……っ……」

透明なアクリルの巨大キャンディーボックスの底に隠してあった柳叶刀――

日本で言う、青竜刀を取り出した……！

だが、自衛のために戦おうという顔じゃない。ビビりつつ、孫にアイコンタクトしてる。

――それで分かった。

彼女は香港の町中に潜むという、藍幇の構成員の1人なんだ。

「孫小姐！　請你用呢個！」

ぽん！

彼女が投げた青竜刀を横取りしようと、俺は手を伸ばしたが――孫の棒が、刀の柄から垂れた赤い房を絡め取って奪ってしまう。

そこで孫は棒を棄て、ひゅん、ひゅん。

「――キキッ。せっかく中国に来たんだ。これとそれ、味わっていきな」

これも華麗な手つきで、体の周囲に振り回し始める。

背後でも、ひゅん、ひゅん。

音がするので振り返ると、さっきのお姉さんが……

「――啊娇（アチョッ）、啊娇（アチョッ）……！」

タイトスカート&ハイヒールという格闘戦に最も適さない姿にも拘（かかわ）らず、雙節棍（シャンジエグン）――ヌンチャクを振り回して威嚇（いかく）してるぞ。俺を。

だがその手つきは素人（しろうと）丸出し。1動作、1動作がやたら遅い。

「タァーッ！」

ブルース・リーよろしく腋（わき）でヌンチャクを挟（はさ）んで止めようとしたお姉さんは、びしっ。

それに失敗して、自分で自分の背中を打ってる。

「〰〰〰〰カハっ！」

そして倒れた。何がしたかったんだアンタ。

でもいるよな。ああいうサモハン・キンポー的コメディー担当。香港映画に必ず1人は。

暫時（ざんじ）、俺と孫がそれを無言で見てると……

お姉さんはヌンチャクを捨てて、ヨロヨロと逃げてった。背中丸見せで。

……何もしてないけど、1人倒しちゃったよ。藍幇の構成員。

「えーっと……だな。ああいうのもいる、藍幇には。対不起（ゴメン）。雙節棍はキャンセルだ」

「じゃあ、あれは俺が代わりにやろうか」

「できるのか？」

「学校……強襲科で3時間だけ、双節・三節棍の講習を受けた。香港人の先生から」
などと話しつつ、俺は言葉巧みにヌンチャクを手に入れた。
樫の木で出来た左右の棍を、水平に構えるが――
まあ、形だけだよ。俺のは。
「じゃあ、ほら。藍幇の仲間が寒いコントやったお詫びに、サービスだ。遠山」
孫は、きゅ。
ランジェリーのお花畑みたいなその場にしゃがみ、ごろん。
寝っ転がってテレビを見る人のような姿勢になった。青竜刀を片腕で抱っこしたまま。
「逃げたりするなよ。これ、スルーされたら恥ずいから」
一見リラックスしているような、孫を前に――
「安心していい。日本には『据え膳食わぬは男の恥』という諺がある。それに横になった女性を置いて立ち去るれほど、俺はクールじゃないんだ」
チャンスをもらった俺は、ジリ……ジリ……
距離を、詰めて……
バッ！　孫のお株を奪う、跳躍からの打撃を打ち下ろしにかかる。
双節棍とは見た目以上に殺傷力の高い武器。投石機のように遠心力を使い、先端速度はただの棒で殴るより遥かに速くなるのだ。

「――キキッ」

だが俺の棍術は、やはり付け焼き刃。

孫は寝っ転がったままルーレットのように全身を回して悠々それを避け、逆に、バッ！

俺の足首を薙ぐように、青竜刀を振るってきた。

――そう来る事は読めていた。

孫のその一見無防備な構えは、中国拳法にある――地躺拳。

地を這う体勢から立った敵を攻める、術理立てられ、長い研鑽を積まれた格闘技の構えなのだ。知っててよかった。あんな強襲科のでも、授業はマジメに受けて損はないね。

そんな珍しい戦闘スタイルもマスターしてるらしい孫は――

一閃を躱した俺の膝や股間を狙った、鋭いキックを地表から繰り出してくる。

「……っ！」

それに素人技のヌンチャクで応じたところ、ガキッ！

弱点の鎖部分を、青竜刀の突き上げが破壊していった。

ただの棒きれ2本になってしまったヌンチャクを持つ俺は――それも先読みできていたので――パシッ。孫の青竜刀、その刃を2本の棒で挟んで止める。

そしてその刀身に膝蹴りを叩き込み、バキッ！

――力任せに、折ってやった。

1本1本丹念に鍛造される日本刀と違い、中国刀は鋳造で量産される刀。立派な彫金や房で飾り付けられていても、鍛えられていないから脆いのだ。

俺がヌンチャクを取ったのは、ここまでが狙いだったが――

さらに先まで展開が読めていたらしい孫は、

「――殺ッ！」

落下した青竜刀の先端を空中で掴み取り、すぐさま手裏剣のように投げ上げてきた。

「――っと」

真下から刃物を投げられる、という経験はあまりなかったので――

俺のそれを避ける動きが、少し大きくなってしまう。

その隙を捉えた孫が、ぐっ。突き上げた両足の指で、ブレザーの裾を掴んでくる。裸足の足指を、まるで手のように器用に使って。

そして、超人的な脚力で――ぐいっ！

俺を、抱き寄せた。足で。

「！」

だんっ、と孫の両脇に手をつくように倒れた俺は……がし。

今度は背に回された孫の両脚で、胴をクラッチされてしまった。

徒手格闘でいうところの、ガード・ポジションという形だが……男女でやると……は、

恥ずかしい痴態に、見えなくもないね。

俺が孫を押し倒し、孫もそれを悦んで足で俺を抱きしめてきたような……あられもない体勢にも思える。頭がフットーしそうだよ。

「――だいしゅきホールドとか言うんだろ？　これ」

「なんで俺も知らないような日本語を知ってるんだい、孫は？」

上体を起こした俺は、すかさず肩を入れた鉄槌――を打ち下ろしにかかったが、

「ききっ！」

孫がシッポで床を押し、小さな腰が、ぐりっ。俺の腰の下で、思いっきり上がってきた。

そして、ガチッ……！

空振った俺の右腕を掴み取り、即座に肘関節を伸ばさせてくる。

加えて、バッ！　体をズリ上げてきた孫は上下逆さまの姿勢で胡座をかくようにして、両太腿と股間で俺の頭部をグルリと締め付けた。

これは、三角締め――いや、位置が浅い。

本来は頸動脈を締めるべき両腿が、頭部を挟んでいる。

そして少々気まずい事に、こっちの口や鼻は孫の股間に塞がれる形になってる。

「――遠山。お前、なかなか面白い男だったよ。でも、やっぱり『なかなか』止まりだ。『髑髏剪剪脚』をこんなに完璧に極められるようじゃね。あたしは、弱い男はキライだ。

今の読みの甘さとか、対応力の無さとか、ガッカリ。殺っちゃおうか？　もうこの辺で」

（……ッ……!?）

ギリッ……ギリギリ……ッ……！

違うッ。三角締めなんて教科書的な技じゃないぞ、これは。多分、中国拳法の裏技だ。

腕を極めて動きを奪い、股間で呼吸を奪った上で――

相手の頭部を、挟み潰す技……か！

「『女たらし』らしく、パンツ屋で、スカートの中に脳みそ撒き散らして死にな。遠山」

通常、この形は三角締めの極め損ない。いくらでも抜け出し方がある。

だがそれは人間相手の事。孫の脚力は、超人レベルのものだ。

ぬ――抜け出せないッ。孫の股の間から。

グリッ、グキッ……俺の頭の中から、頭蓋骨の縫合が軋む音が聞こえて……

「せー……のッ！」

孫が上体を丸め、脚部に一気に力を込めようとした、その刹那。

ビュンッ――

――じゃりッ！　という鎖の音と共に、腕のホールドが解けた。

「――！」

おかげで、俺は頭を脚から抜く事に成功する。

――危なかった。あと1秒挟まれてたら、本当に頭がスイカみたいに割れてたところだ。見れば、孫の首には分銅つきの鎖が絡みついており――

鎖はデパートの3階フロアの先、階段のそばにあるフラワーショップから伸びていた。その先端に繋がる玉鋼製の鎌を持っていたのは、

「……キン、ちゃん、とっ……なんという、う、うらやまハレンチな、行為を……！」

俺の味方――かどうかちょっと判然としない、光を失った双眸で俺と孫のあられもない姿勢を見ていた……白雪！

「し、白雪。助かったよ。さっきのあれはだね、戦ってたんだ。ちょっと、きわどい形に見えたかもしれないけど……」

しどろもどろで言う俺の体の下で、鎖分銅を腕から解きつつ――孫も仰ぐような姿勢で白雪を見てる。

「あれがお前の愛人か？　えらい日本美人だな」

一発目からNGワード言うし……孫！　めっ！

「あ、あ、アイジン……ッ？　それは自分の事でしょおおおお――――ッ！」

がすっ！　と床に鎌を投げつけて突き立てた白雪は、ぞろおおおお――――！

制服のスカートから長い長ぁーい銃弾ベルトを出し、げっちょん！　広げた両足の間に、鉄塊を産み落とすように――折り畳み式に改造されてある、M60機関銃を登場させた！

「「！」」

ランジェリーの花園でもつれ合っていた俺と孫は、ごろごろっ！

こういう時は妙に連携が利くのか、左右に離れて――

俺はドラッグストア、孫は婦人服売り場に退避する。

「――わーっしょい！　わーっしょい！」

なぜお祭りの掛け声なのかはともかく、白雪は『わーっしょい！』1回につき100発ぐらいの銃弾ベルトを肩にタスキ掛けし――

がっしゃこん！

モンハンのガンランス使いみたいに、M60を持ち上げざまにバネ動力で組み上げた。

そして、がちんっ！　殴るように銃弾ベルトの初弾を機関銃に装填し、

「天エエエエエン誅ウウウウウウウ！」

――ガガガガガガガガガガガガガガガガッ！

店内に7.62×51mm NATO弾の嵐を巻き起こし、香港のアクション映画をハリウッドの戦争映画に一変させた。

さっきの孫と俺の体位がよっぽどショックだったらしい白雪改め黒雪は、

「あはははは！　さっきのあれは、なんてうらやまけしからん事でしょう！　あんなこっといいな、でっきたっらいいな！　私ともしたことないよね！　ねぇキンちゃん!?

ねぇキンちゃん!?」

『ドラえもんのうた』や『ねえムーミン』をパクったメロディーに乗せてM60を振るい、笑いながら逃げ回る孫を追射しまくってる。

バキバキバキバキッ！　5体並んでポーズを取っていたマネキンの頭が次々に撃たれて飛散し、ガシャガシャガシャッ！　リカーショップの酒瓶が弾幕に入って血飛沫のようにワインを撒き散らす。ああ……被害総額、何香港ドルになるんだこれ。

「あはは、あはははははははははは――――ッ！」

真鍮の薬莢を周囲に撒き散らす白雪は、それが周囲の花にビシビシ当たって出来ていく花霞の中で高笑いしてる。

「――きひひっ！　さすが遠山の女ッ、いい女じゃないか！」

叫んだ孫は壊れたマネキンを踏み台に、バッ！

婦人服売り場のシャンデリアに飛びつき、吊り具を手刀で破壊する。

そしてシャンデリアを空中で蹴って、白雪に――がっしゃん！　激突させたッ……！

「し、白雪ッ……！」

フラワーショップの棚に突き飛ばされ、棚から雪崩のように落ちてきた無数のブーケに埋もれてしまった白雪を心配したのも束の間――げっちょん！

花で出来た小山から、M60の銃身が突き出てくる。

そして、バリバリバリバリバリッ！　おそらく伏臥姿勢になった白雪の斉射が続く。
白雪、なんという諦めない女……！
「なんて諦めない女だッ」
俺と同じ感想を持ったらしい孫に、
「いいの！　しつこいぐらいがいい女なのッ！」
花の銃座から、白雪は金切り声を返してきたが……がちんっ！　ぷすぷすぷす……
弾切れだ。
伏せていた俺が、ドラッグストアで立ち上がると……がばっ。起きてきたぞ。向こうで白雪も。お花の山の中から。日本刀持って。
「キンちゃん――孫悟空は、猿です。人間じゃないよ。今から私が行う行為は、猿退治。つまり殺人ではありません。ふ、ふふっ、オンキリキリバサラウンバッター――怨っ！」
ざしゅ、ざしゅ。
白雪は抜き身のイロカネアヤメを八相に構え、花を踏み越えてやってくる。
や、殺るつもりだぞあれ。孫を。
ていうか、本気で殺れちゃうかもしれない。黒雪さんなら。
そういう圧倒的なムードがゆんゆんと漂ってる。
だが――俺は孫との闘いの中で、もう悟ってる。

いま俺たちが為すべき事は、孫を斃すことじゃないんだ。
「ま、待て白雪っ……！　孫は――」
なんとなくムダじゃないかなーと思いつつも説得しようとした俺に、
「怨怨っ！　猿退治！　猿退治！　退治てくれよう星伽巫女ッ！」
白雪はそれがやっぱりムダだった事を、力強く教えてくれる。
孫もきっと、これには応じて――殺す気で、白雪と戦うに違いない。
何とかしてこの場を取り持とうと、俺が孫の方を振り向くと……
――孫は、意外な状態にあった。
「啊ァ……色金殺女……制御棒を持ってるって事は……あれが、緋巫女って事か。哎呦」
額に汗を浮かべ、不可解な事をブツブツ言いながら、後ずさっている。
あれだけ好戦的で、自分の戦闘能力に疑いを持っていなかった孫が。
もちろん闘志を失ってはいないが、今の白雪とは警戒心を持って戦おうという表情だ。
（……？）
その様子に俺が眉を寄せた、その時――
ぷっぷーぷぷぷー！　ぷっぷぷぷー！
デパートの下、車道の方から断続的なクラクションの音が聞こえてきた。
イタズラみたいに聞こえるが――モールス信号だ。

それを頭の中で読むと……『リコリコリンリン』……だとよ。
また状況をややこしくしそうな子が到着してしまったな。
だが、これは好機かもしれない。
クラクションという事は、理子は車の運転席にいる。足を用意してきたのだ。
孫の願いを叶えて遊んであげようと決めた30分も、もうすぐだし——退こう。一旦。
となれば……まずは白雪を止めないと。
「白雪、もう十分だ！　退くぞ！　孫には如意棒がある、もし使用われたら……！」
俺は白雪めがけて走りつつ、再び説得を試みる。
「キンちゃんどいて、どいてくれないとそいつ殺せない！　死は元より覚悟の上です！」
アリアを殺りに来た時と同じ状態の白雪に、詰め寄った俺は——
——ぱん！
目の前で柏手を打って、猫騙し。
からの、えいっ。お姫様抱っこだ。
「——白雪。俺に愛され終えていないのに死ぬなんて、神が許さない」
刀を持ったままの白雪を抱え上げ、急ぎの『呼蕩』で耳元に囁くと……
白雪は、きょとーん。
からの、うっとり。

黒雪から白雪に戻って、自分を抱える俺を見上げている。
「さあ笑って。白雪が怒りに打ち震えていると、俺は悲しい。でも、その悲しみをいつも癒してくれるのも――白雪。君だろう？　だから、ほら。白雪。笑って」
映画だったら観客がドン引きしそうなセリフだが、白雪はこっちの俺なら何を聞いてもオールオッケーな客。自分の好きなアイドルが出てる映画なら、どんなZ級映画でも見に来てくれるありがたいファンみたいなところがある。
なので、
「――はい！」
うわぁ……逆にコワイぐらい、キラキラした笑顔になったよ。俺の腕の中で。
というか、俺も白雪コントロールの経験が豊富になったもんだ。夫婦漫才の領域に到達しつつあるね。
などと自嘲気味の笑いを浮かべつつ、俺は白雪を抱えて――
理子のクラクション音が聞こえた方の窓へ、駆け寄る。
「哎っ――遠山ッ！」
我に返ったような孫の声が、背後でする。
だが、もう30分を過ぎた。お遊びはもう充分だろう。延長は別料金になるよ？
ここは振り返らず、クールに去らせてもらおう。

そして――

――この戦いの中で、俺には分かったよ、孫。君が何者なのか。部分的に、だけどね。

ヒステリアモードとは本来、子孫を残すためのもの。

そして子孫とは本来、女性が男性を心から受け入れなければ残らないものだ。

だから……ヒステリアモードの俺は、女性の本心に敏感になる。

本心を、すなわち心を、深く深く見据える事ができる。

孫――その君は、君じゃない。

ここにはいない、誰かだ。

それが本当の君――猴の肉体を、どこか遠くから操り人形にしている。

ココや諸葛でもなく、パトラでもない、誰かが。

つまり俺が孫の心をもって受け入れられるべき女性は、別のところにいるんだ。

そういった事が分かってから……俺には見えてきた。今の君に、俺がするべき事が。

それはやはり、こうして戦ってあげる事じゃない。

――救ってあげる事。

孫の人格を追い出し、その体を猴だけのものにしてあげる事だ。

もちろん俺は精神科医でも何でもないから、どうすればいいのか分からない。君と俺は戦う運命にある敵同士でもある。事象は困難で、解決は不可能に思える。

だけど安心していい。
俺は『不可能を可能にする男（ミッション・ポッシブル）』のアダ名通り、数多（あまた）の不可能を可能にしてきた。
今また、それに挑むよ。君を救うために。
俺が、敵である君を救う理由？　あるさ。それは3つだ。
1つ、君は女で――
2つ、俺は男。
そして3つ、女性を救うのは男の仕事。だろう？

一時撤退のため、窓を全開にすると――
そこには意外な光景が広がっていた。
このデパート、こちら側の壁は補修中だったらしく……
目の前には、壁全体を覆うような足場が組まれてあったのだ。地上から、最上階まで。
日本なら鋼鉄で作られるその足場が――香港では、全て竹製。
そういえば映画でも見た事がある。
この地では安全性をやや犠牲にして、安価な竹で素早くビル工事の足場を作るのだ。
「キーくーん、こっちこっちー！　見て見て！　理子、キーくんのためにクルマ買っちゃいましたよーっと！　道ばたで！　小切手で！　くふふっ！」
そのジャングルジムみたいな竹をよじ登ってきつつ、理子が俺にウィンクしてきた。
その下には四角く平たく大きなアメ車、キャデラック・デビル・1968が駐車してる。
さっきのクラクション音で俺が想定したのと同じ車種・年式だ。カラーがファンシーな薄水色な事までは読めなかったが。あれが理子が調達してきた車ってワケか。
型が旧くて速度は遅いが、頑丈なオープンカーだ。緊急調達としちゃ上出来だよ。

「白雪、降りれるか」
「はい！」
納刀した白雪を竹の足場に立たせ、俺は自分も足場に出て――
窓を閉めて2人で足場を下り始めたところで、バガンッ！
窓枠ごと窓を蹴り飛ばして、孫も竹の足場に飛び出てきた。
「遠山！　ははは っ！　あたしをここまで滾らせたんだ、決着まで遊んでけって！」
するっ、するするっ――と降りてくるその動きが、俺たちより断然速い。まさに人間と猿の競争だ。瞬く間に追いつかれた俺に、孫が手を伸ばしたところで――
「たぁーッ！」
白雪がフライング・クロス・チョップを孫に叩き込み……損ねて、
「きゃん！」
竹の足場にぶつかった。
そして、びょいん。しなった竹に弾き返され、ナナメ下に転落していく。完璧な自爆だ。
「ちょっ……ゆきちゃん！」
その下には運悪く理子がいて、白雪の安産型のオシリに思いっきりぶつかられてる。
白雪はそこからうまく竹の柱に掴まれたが、理子は下へ下へ、ピンボールの玉みたいにごっすんごっすん竹棒にぶつかりながら落ちていった。そのたび「おぶっ！」「なを！」

「かうけっ！」「んりっ！」などと声を上げつつ、最終的には――べちゃ。インベーダーみたいな姿勢で歩道にうつぶせに落っこちたが、まあ理子なので大丈夫だろう。

一方白雪は理子にゴメンの一言も無しで、棒高跳びに失敗した人みたいに竹棒にしがみついたまま……ぐにょーん……と体重で竹をしならせ、少し離れた車道へ軟着陸していく。

逆U字みたいにしなった竹は、白雪が地面に降り立つと同時に限界を迎え、バキッ！折れて、5m程の長さの竹竿になった。

白雪はすぐさまそれを竹槍のように扱い、

「キンちゃん、援護しますッ！　とぉーッ！」

改めて俺に迫る孫を、下から突き上げる。

その竹槍使いがやたら上手く、

「――奇ッ!?」

孫はその鋭い突き上げを足やシッポで捌きつつも――

動きをジャマされて、降りていく俺から相対的に離れていく。

す、すごい。あの孫に通用してるぞ。白雪の竹槍が。マシンガンも効かなかったのに、竹槍が。白雪、お前、主武器を竹槍に変えたらどうだ。

おかげで俺は、たんっ。

歩道に降り立ち、やはり大丈夫だった理子がハイハイで乗り込んでいくキャデラックの

運転席に――道なりに駐車している他の車を何台か踏み台にさせてもらって、飛び乗れた。
俺がヒステリアモード状態だと悟ったらしく、自身は後部座席に入っていた理子は――
「キーくん！」
「何だッ！」
「あれ孫悟空だよね！」
「そうだ！」
「大変だよ！」
「何がだッ！」
「悟空ちゃん、赤と黄色のしまぱんだぁー！　お国柄！　珍しい！　理子も欲しいー！」
「――どうでもいいだろ今そんな事は！」
俺はエンジンを掛けつつ助手席側のドアを蹴り開け――コラムＡＴ車は初めてだったが、Ｄレンジに入れると同時にアクセルを蹴り込み、ホイルスピン音を周囲への警笛代わりに、急加速・急ハンドルのフェイントモーション、シフトダウンとブレーキングで――ドでかい車体をブン回すような、１８０度の慣性ドリフト・ターンを披露する。
開け放った助手席のドアが、車道に立つ白雪をちょうど迎えるように。
「白雪ッ、乗れ！」
「――はいっ！」

白雪は助手席に、すぽっ。
大縄飛びする女の子みたいな調子で、上手くジャンプして座ってくる。
俺がステアリングを素早く戻し、一旦制止したキャデラックを再び急発進させると、
「きゃっはー！」
一連のカースタントみたいな走りに、スリル中毒のケがある理子は後部座席で大喜び。
助手席の白雪が怖がってないか心配だったが——
「キンちゃん、カッコいい……！」
俺の乱暴な運転にも、ウットリしてる。肝の据わった子だよ。どっちも。
（——上環方面へ行けば、ココの装甲車とハチ合わせする危険性がある）
そう考えた俺は、香港島の湾岸沿いに東區走廊を東へ走行する事にした。
そして思いっきりアクセルを踏み込み——
バックミラーの中で、既に地上に降りた孫の様子を窺う。
孫は行き交う車を何台か見送ってから、突然、ケモノみたいな四つん這いポーズで走り出した。
……あ、ありえん。目測だが、時速１００㎞近く出てるぞあれ。ピューマみたいだ。
そして孫は走行中の赤いオープンカー——ＢＭＷ・Ｚ８に飛び乗り、運転してた青年をネコ掴みして持ち上げ、別の車の窓に放り込んでる。何て乱暴な。

ベージュ色のレザーシートの運転席に収まった孫は、ウォンッ！
8気筒エンジンを高鳴らせ、ぐんぐん加速して俺たちを追ってくる。
（――Z8か……！）
Z8はボンドカーにも採用された、正真正銘のスーパーカー。
こういったカーチェイスには最適な車の1つだ。
広大なアメリカを時速100㎞程――2000rpm前後でクルーズするために設計されたこのキャデラック・デビルとじゃ、性能が違いすぎる。
こっちはメーターを振り切って時速120㎞ほどで走っているが、Z8は160㎞以上出てる。まだ500mは離れてるが、追いつかれるまで1分弱ってとこだな。
迫る孫のZ8に――
デビルから、びょーん！　ヘッドスライディングするような姿勢で、理子が車体後部のトランク上へ上体を乗り出した。
「くふふっ！」
そして二丁拳銃のワルサーP99を突き出し、バスバスバスッ！
マズルフラッシュを閃かせ、発砲する。
9㎜パラベラム弾が、ぼすぼすっ、と向こうのタイヤでくぐもった命中音を上げた。
だが、走行には問題が無いようだ。

孫のZ8は甲高いエンジン音を上げて、更に加速してくる。
「やっぱりねー」
と言う理子のセリフの意味が、俺にも分かる。
さっき孫は何台か車を見送っていたが、あれは防弾タイヤの車を探していたのだ。
暴走する2台のオープンカー、さらに銃声が加わったものだから——一般車はみんな、路肩に避難していく。交差点でも、映画のようにバカみたいに突っ込んできたりはしない。
「くしししし」
理子笑いした理子を、ミラーで見ると——
後方50mほどまで肉薄してきたZ8に、何やら大きな缶を掲げて見せつけている。
——オイル缶だ。用意がいいな。
「きゃはーっ！」
後部座席に立った理子は既に切り開けていた缶から、オイルを——ばしゃっ！
キャデラックの後ろ、Z8の前に思いっきり撒き散らす。
対し、孫は——ウォンッ！　Z8を更に加速させた。
そして……きゅるるるるっ！
思いっきりタイヤをスリップさせ、斜めになりながらも慣性ドリフトで前進するZ8の運転席で——

「……っ……！」

その光景に――俺、白雪、理子は揃って唖然としてしまう。

カットオフ・セーラー服を風に翻し、立ち上がったのだ。孫が。

しかも、座席に、ではない。

左右の裸足を――フロントガラスの上縁とハンドルに乗せて、その上に、だ。

孫はスピンしかけるＺ８のハンドルを右足で精緻に操作し――速度さえも車体の向きでスリップの度合いを増減させて調節している。視線は俺たちから逸らさずに。

速度はこっちに合わせられる状態で、クルーズモードにして保っているようだ。

そんな超人的な器用さを見せつけながら、孫はＺ８をキャデラックの真横につけてきた。

今や、ほぼ併走している状態だ。

前方のビルの窓から、藍幇の構成員――と思われるスーツ姿のサラリーマンが、棒状の何かを投擲するのが見えた。

――投げ槍のように飛んできたそれを、ばしんっ！

走る車上の孫がキャッチして、ビッ、と背に回して構える。

日本の薙刀にも似たそれは――青龍偃月刀。占代中国の戦器だ。

長柄の先に付けられた幅広の曲刃には、燃えさかる炎の彫刻が施されている。

長い黒髪を旗のように靡かせる――Ｚ８の上の孫は――

まさに闘戦勝仏、九龍猿王（ガウロンモンク）の名に相応（ふさわ）しい。武神（ぶしん）のような、少女。

「――古代中国、三国時代――」

ニヤリ、と笑った孫の頭上に……キラ、キラキラ……

黄金色の光の粒子が舞い始めた。

それが天使の輪のように、孫の頭部を彩る。玉藻（たまも）が金箍冠（きんこかん）と呼んでいた現象だ。

そして彼女の右目が、ついに――

（……！）

――ああ、孫。いや、猴（コウ）。

俺（おれ）にはそれが、君の涙に思えてきた。

君の中に半分しか在（あ）ることを許されない本当の君が――

片目だけが流す、赤い、血の涙のように。

「呂布（りょふ）、張飛（ちょうひ）、趙雲（ちょううん）、関羽（かんう）、夏侯惇（かこうとん）――あの頃（ころ）の中国には、遠山（とおやま）のような一騎当千（いっきとうせん）の将、いい男がゴロゴロいたものさ」

孫の中には、苦しんでいる猴がいる。

その苦しみのために、命すら諦（あきら）めようとしている猴が。

――だが、俺がなんとかしてみせる。

俺は『女泣かせ』らしいが、それならその涙を止めてあげることも俺の義務だから。

「お前のお陰で思い出したよ、あの頃を。遠山キンジ」
俺を見据えて笑う孫の右目が、いま、光っている。
間違いない。これはあの時見たのと同じ光。
如意棒――光速の攻撃、だ……！
その瞳が、1秒ごとに輝きを強めていく。
――紅く、紅く、紅く紅く紅く――！

Go For The Next!!!

# あとがき

元気ですかー！　お誕生日ケーキのローソクの火を扇風機に消された、赤松です！

この13巻は初の海外遠征編で、上下巻でいえば上巻になります。

その下巻にあたる14巻――の前に、次は『緋弾のアリア』シリーズで初となる短編集・アニメのＤＶＤ・ＢＤ特典にもなった『キャストオフ・テーブル』が冬に刊行予定です。

『キャストオフ・テーブル』とは、夏休みにキンジたちが（というか理子が半強制的に）開催した脱衣ゲーム大会。本編ではなかなか見られないようなセクシーイラストも満載で、読者様必携アイテムの１つになること請け合いですよ！

えっ、上下巻の間に短編集が出るのはなぜかって？

……

……べっ別に、レーザーの攻略法が思いついてないんじゃないんだからね！

……

……うぉおおなんであんな強いの出しちゃったんだよー！　私のバカバカー！

い、いや、大丈夫っ、思いついたら14巻もちゃんと出ますのでご安心下さい。

私が思いつかなくても――キンジが上壇場で、またなんとかしてくれるよきっと！

と、ジタバタしたところで宣伝を2つほど。

1つ目！　こぶいちさんの画集・『緋弾のアリア Illustrations こぶいち, art works』が、この本と同日発売となります！　描き下ろしピンナップもある逸品ですよ。私もキンジの必殺技についてキンジが語る短編小説を寄稿させていただきました。

そして2つ目。来月の9月10日に、電撃文庫さんから私の新作が刊行予定です！『やがて魔剣のアリスベル』という小説で、イラストは「おにあい」で有名な閏月戈さん。この緋弾のアリアと同じ世界で繰り広げられる、大スケールアクション&ラブコメディー第2シリーズです！　アリア共々、ぜひアリスベルとも仲良くしてやってくださいね。

そして最後に謝辞を。この本の執筆にあたっては、香港で取材をさせていただきました。隠し部屋的な個室まで見せて下さったザ・リッツ・カールトン香港の皆様、取材に協力して下さったMF文庫J編集部・東立出版集團有限公司の各位に心から御礼申し上げます。

2012年8月吉日　赤松中学

祝！
13巻
発売
『緋弾のアリア』も
13巻までやって
まいりました。
今回も
新キャラちゃん
大活躍です。
12巻の菊代・萌
ともまた違う今までにない
感じのキャラで
楽しかったです。
しっぽをもうちょっと
強調しても
良かったかもですね。
また次巻でお会いいたしましょう！

イラストレーター・こぶいちが描く
『緋弾のアリア』の世界がここに！
総収録点数200点以上！
新規描き下ろしイラストも収録！
緋弾のアリア
Aria the Scarlet Ammo
Illustrations
こぶいち
art Works.
著・こぶいち
絶賛発売中!!

MF文庫
J

# 緋弾のアリアXIII
## ガウロン・リバース
## 反撃の九龍


| | |
|---|---|
| 発行 | 2012年8月31日 初版第一刷発行 |
| 著者 | 赤松中学 |
| 発行人 | 三坂泰二 |
| 発行所 | 株式会社 メディアファクトリー<br>〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 3-3-5 |
| 印刷・製本 | 株式会社廣済堂 |



©2012 Chugaku Akamatsu


Printed in Japan ISBN 978-4-8401-4682-1 C0193



※本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、固くお断りいたします。
※定価はカバーに表示してあります。
※乱丁本・落丁本はお取替えいたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。
※その他、本書に関するお問い合わせも下記までお願いいたします。
メディアファクトリー　カスタマーサポートセンター
電話:0570-002-001
受付時間:10:00～18:00(土日、祝日除く)

この小説はフィクションであり、実在の人物・団体・地名等とは一切関係ありません



【 ファンレター、作品のご感想をお待ちしています 】
**あて先**:〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト
株式会社メディアファクトリーMF文庫 J 編集部気付
「赤松中学先生」係　「こぶいち先生」係

★スマートフォンにも対応しております(一部対応していない機種もございます)。
★お答えいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料待ち受けをプレゼント!
★サイトにアクセスする際や、登録・メール送信時にかかる通信費はご負担ください。
★中学生以下の方は、保護者の方の了承を得てから回答してください。

二次元バーコードまたはURLより本書に関するアンケートにご協力ください。

http://mfe.jp/uat/

だが案ずるなかれ。

「――俺に任せろ」

武偵憲章7条。『悲観論で備え、楽観論で行動せよ』だ。

海外だからって恐れることはない。備えはある。

俺の手元には日本製の、世界一高性能な情報端末――携帯電話があるのだ。

と、俺はガラケーのGPSを起動する。

……よし。自分の現在位置が表示されたぞ。誤差も50m以内。

海外パケホ事業者に接続してるから、料金もたかが知れてるだろう。

「ほら、これで俺たちがどこに居るか分かる。歩いてる向きも出るんだぞ」

と、俺はアナログ女の白雪に地図アプリを見せつけてやる。

すると白雪は俺の携帯を見つつ、つん……つん。

「ありがとうキンちゃん。キンちゃんは、や、やっぱり、頼もしい御方……」

つん、つん……

何だ？　携帯GPSごときで過剰に俺を尊敬したような表情をしつつ……俺の手の甲に、自分の手の甲を触れさせてきたぞ。

つん、つん……

あ、またやってきた。



白雪は手の方を見ておらず、わざとかどうか分からないほど控えめになんだが……俺がそれに気づいた顔をすると、テンパったような表情になって固まってる。

どうも故意だったらしい。このつんつん行為。

（なんだ……？）

俺が首を傾げると、白雪は「えいっ」って顔をして、ぺた。

手の甲と甲を、くっつけてきて……からの……そーっ……

ゆっくり綾取りするみたいな指つきで、俺の指と自分の指を絡め始めてきた。

何これ。マジで。

「――あ、あああ、あのっ、キンちゃん様っ！」

にぎりっ。

しまいには俺の手を握ってきたよ。白雪。

そして、うわぁー凄い大胆な事しちゃってる私！　的に自分で自分にビックリした顔をしている。

いやだから何なんだよこの手は。意味が分からん。

「あの！　はぐれちゃったらいけないから！　手を繋いでもいいですかっ！」

声でけえし。

ていうか……いいですかって聞く以前に、がっしり繋いできてるだろ。これ。